



2001. 8. 15.



まえがき 『閃光』と『肌光』 - 鉄への思い -

心情は『前向いて ただひたむきに』 そのengineは『Openness & Frankness』
技術屋としての姿勢は『不思議やなあ 面白いなあ』『観たり、聞いたり、試したり』

『現在の鉄』が『産業の米』ならば『古代 和鉄』の系譜は『日本の源流』。

日本各地には『たたら』と呼ばれる古代から連綿と続く『日本の和鉄』の膨大な痕跡がある。今表舞台では見えないが、これらと和鉄の流れが「日本を作り、日本の文化・産業を担ってきた」に違いない。日本全国の奥深い山々や川筋には、日本に鉄を伝え、鉄精錬をはじめた渡来人に始まる「産鉄の民」の系譜があり、また、日本各地の山深い谷筋には山を開き作られた鉄の精錬場の遺跡が残っている。この精錬場には各地から砂鉄や薪・墨などの原料が集められ、また生産された鉄が日本各地に運ばれていった。海岸沿いをまた、山を越え、そして幾筋もの川筋をさかのぼり、発達した通商の道が製鉄の山々から各地に張り巡らされた。

古くは大陸から日本への鉄伝来の道・日本各地への鉄伝播の道。そしてこれらは時代を超えて日本各地の文化・産業を担った「和鉄の道」。そこでは多くの人達が交流を繰り返しそして日本が出来てきた。

1988年昭和63年の夏スタート以来 十数年 日本各地を歩いた「Iron Road・和鉄の道」Country Walkを整理して一冊にまとめました。このcountry walkは材料研究者としての自分史のような気もしています。そこから 何が出てくるのか・・・

昭和43年に鉄鋼会社に入り、鉄鋼材料の研究者としてスタートし、約40年 鉄鋼・非鉄金属材料 そしてセラミックス・機能樹脂と仕事の変遷とともに本当に幅広い材料に取組み、材料科学 接合・ハイブリッド化 そしてその機能開発の研究者として、材料開発・実用化開発に関わることが出来ました。

恩師 田村今男先生からは

「鉄鋼は剛柔にして、しかもその態を変える。古くから多くの人の知恵が使われている。

材料の成分・製造履歴が材料の性質にきわめて重要であり、『先人の知恵を見よ』」と教えられた。

また、専門の溶接・接合冶金の分野の諸先生・先輩諸氏からは

「溶接のルーツは「奈良の大仏」の鑄掛け。

「奈良の大仏」から「宇宙開発」まで脈々と続く溶接の歴史を見よ」と良く聞かされてきました。

「オリジンの大切さと「ルーツ」へさかのぼる解析。そして本質を見る眼」がいつも頭の中を駆け巡った若い日々でありました。

昭和63年7月 鹿島・波崎の研究所に単身赴任したのを機会に何か関東ではじめたいと思っていた矢先に、波崎の研究所が建っている「若松」の地名が常陸風土記に出てくる古代砂鉄出土の地である事を知り、また、何気なく訪れた波崎日川の砂丘・九十九里の浜で大量の砂鉄を見て、何か因縁めいた感じを受けて始めたのがこの『たたら探訪』のスタート。

自分の趣味として『たたら 和鉄』にこだわって日本各地行く先々でcountry walk。

銚子から岬町大東崎まで砂鉄の砂浜「九十九里浜」を歩いたのをスタートに日本古刀の里 千種・備前。

奥出雲の「たたら」そして奥三陸の海岸へ。

学問的に緻密な裏づけを求めるわけではなく、ただその地に行ってただ立たずんで、地形を眺めながら、この地の人の足跡をまた時代を思いめぐらすだけの探訪。

でも、色々な場所で多くの人に会い、本当にこの10数年非常に楽しい胸わくわくのlife workとなりました。

鹿島・波崎から次の赴任地 山口県美祿では秋吉台の麓 中国山地の奥深い山の中。しかし海岸には弥生時代に大陸からやってきた数百体の渡来人が、望郷の念を抱いて西の海を眺めながら眠る「土井が浜弥生遺跡」があり、鳥取・岡山から島根奥出雲にかけての奥深い山々には数多くの「たたら」の跡。せっせと通いました。この間 美祿ではコンピュータ革命の一端を担った世界最先端の技術開発にも携わり、先端ビジネスの厳しさ面白さ そして若い人たちとの交流の中から生まれるクリエイション。都会では味わえぬ多くの事と素晴らしい仲間を得ました。

結婚した娘が住んだ鳥取県米子。大山の麓伯耆の国・出雲の国は古代鉄が日本誕生のドラマを演出した土地。

そして、親父が生まれ育った丹後の羽衣伝説は「鉄伝播」の証。丹後の家の直ぐ北の丘から突如古代この地方の鉄を支配した豪族の墓が出てきたのにもビックリでした。

東北にも隋分通いました。

青森三内丸山遺跡・縄文のストーンサークルなど青森へせっせと通う中 鉄のない縄文の時代のすばらしさと多くの仲間にも出会えました。先人の墓を中心に丸い輪になって暮らす縄文人。

「現代人として 何か忘れ去ったものを取り戻したい。・・・」いつも そんな感じがしています。

古代文明論に詳しい森本哲郎氏は「三内丸山縄文遺跡」が「世界三大文明にも匹敵する木の文明」であると指摘された。巨大柱に支えられた檜や大型住居などが整然とならぶ巨大都市。森の中に作られた多彩な植物栽培と日本全国から集まってきた漆・土器・石器の数々。

この「巨大木の加工技術」はさらに時代を経て 船による日本各地との交流をさらに盛んにし、空高くそびえる出雲大社の空中神殿 そして東大寺大仏殿へ。 さらに日本各地に残る「御柱」へと連綿と日本文化・文明をつないで行く。

石器から鉄器へと変化はしたが、「加工工具の技術」や「加工技術」の果たした役割の大きさは世界文明としての位置付けを指摘されるとあらためてその技術の偉大さにただビックリ。

「和鉄」が日本産業の米としての物質的役割ばかりでなく、当初意識していなかったのですが、その時代時代の社会形成に大きな影響を与え、日本各地の伝説・神話を産み、「日本誕生」のドラマを演出し、「日本人の心情・文化」の形成にきわめて大きな影響を与えてきた事を知るに至って その広がりにはますますビックリしています。

「Iron Road・和鉄の道」この言葉を口にした時の広がり・人との繋がりはやっぱり「鉄の持つすごさ エネルギー」を物語っている。

今 鉄鋼は産業の米としての役割がゆらぎ、表舞台からは退場を余儀なくされていると言われる。

でも、先人の知恵が凝縮された鉄の世界。

『溶鋼のまばゆい輝き「閃光」と「くろがね」の落ち着いた「肌光」』

必ずや時代を動かす力として今後も多くの広がりをもたらして行くだろう。

この十数年 日本各地を歩いた「Iron Road・和鉄の道」Country Walk。大半は家内と二人の「二人三脚」。まだまだ 行きたい場所考えたいことも多い。

津軽・兵庫千種・丹後そして山陰奥出雲はまだまだ通いたい。そして 東北・三陸 秋田・白神 近江・越 そして 朝鮮・中国へ いかねばならぬ field は無尽蔵。今後を楽しみにしています。

そこから また 何が出てくるのか・・・・・・・・

2001. 8. 15. 神戸にて 2003. 5. 15. 追記

材料技術屋 40年 いろんなことが在りましたが おもしろい材料技術屋人生でした
今後も姿勢は同じ 『さあ 第一歩 先に向かって』です。

2003.6月 鉄にたずさわれたことを誇りに思いつつ
中西睦夫

M. Nakanishi Internet Home Page 『IRON ROAD 和鉄の道』
<http://www.asahi-net.or.jp/~zp4m-nkns/index.htm>
<http://www.asahi-net.or.jp/~zp4m-nkns/iron.htm>

『和鉄の道』口 絵



大江山 酒天童子 鬼の像



奥出雲 ヤマトノオロチ伝説

日本各地に散らばる『たたら』製鉄遺跡やその資料館等を訪れた時に見たり入手した資料から 『たたら』製鉄図並びに砂鉄を採取した場所等の写真並びに採取した砂鉄を分析した写真等ができましたので、少し古いですが整理しました。

2002.1.12. 柏にて M.Nakanishi

1. 現在も継承されている『たたら製鉄』

1. 島根県吉田村鉄のミュージアム
「菅谷たたら」



2. 島根県横田町 日本刀剣保護協会
「日刀保たたら」



2. 絵図に描かれた「たたら製鉄」

1. 四合吹き of 図

岩手県久慈「たたら館」入場券より



2. 島根県広瀬町

金屋子神社縁起絵巻より



3. 兵庫県千種町 千種町歴史民俗博物館蔵絵巻より



3



4. 山口県福栄村大板製鉄遺跡 ホームページより



3. 日本各地にある砂鉄

kcie2.htm by M. Nakanishi



1. 日本各地で採取した砂鉄例
2. 砂鉄の形態・成分分析例

3.1. 日本各地で採取した砂鉄例



以前 房総の浜や千種川の河原等で採取した砂鉄まじりの砂を磁石で選別。のりのついた紙の上にそれをばら撒き標本していた資料やその砂鉄を走査電顕で覗いた写真等がでてきましたので整理。

波によって浜に打ち寄せられた砂鉄が風によって描く美しい模様の数々。

よく、『鳴き砂』の浜の美しさが語られますが、砂鉄が舞う『砂鉄の浜』も劣らずどこも本当に美しい浜でした。ポケットからそっと磁石を出してその砂が吸い寄せられるかどうかチェックした事など思い出しています。

また、電子顕微鏡の中に角の取れた砂鉄がびっしり浮かび上がった様も印象的でした。

採取した砂鉄例	
	皆生浜 浜砂鉄 H4. 8. 11. 奥出雲 吉田村 菅谷たたらで採取
	奥出雲鳥上山 山砂鉄 H4. 8. 11. 奥出雲 横田町 日刀保たたらで採取
	兵庫 千種川 川砂鉄 H4. 9. 28. 千種町 千種川で採取
	波崎 日川浜 浜砂鉄 H4. 7. 26. 茨城県波崎町 波崎砂丘で採取
	房総 大東崎 浜砂鉄 H4. 7. 4. 千葉県 九十九里浜 大東崎浜で採取

砂 鉄 砂鉄の混じった浜砂



福島県 原町市 金沢製鉄遺跡の近傍 北泉海浜公園



茨城県波崎町 日川浜・波崎海岸砂丘千葉県

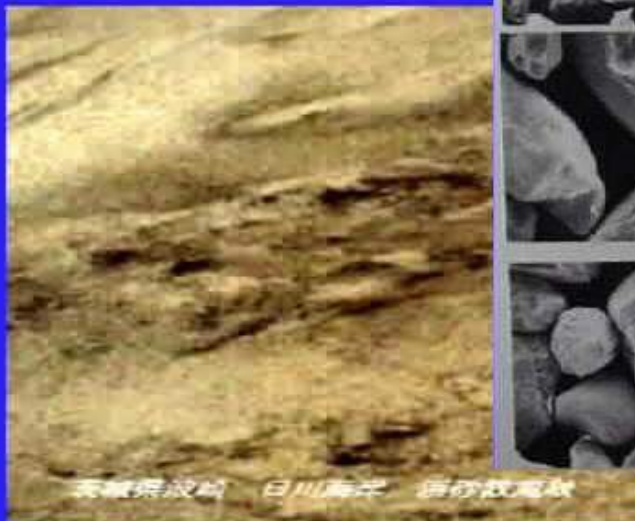


千葉県 飯岡浜・九十九里浜

3.2. 砂鉄の形態・成分分析例

砂鉄の走査電顕写真

日川浜採取 砂鉄



茨城県波崎 日川浜 採砂鉄電顕

砂鉄の成分分析の一例

房総 九十九里浜 大東崎浜採取 H4. 7. 4.

	C	Si	Mn	P	S	Cu	Ti	Fe	Al	O	N
A	0.06	17.12	0.30	0.017	0.037	0.03	2.25	26.0	1.57	2.1	0.0090
B	0.05	11.37	0.30	0.015	0.037	0.03	3.60	29.5	1.54	29.0	0.0075

1) 試料 A: 300 μ m 71V1(下)
B: 71V1(上)



房総 砂鉄の浜 日川浜 波崎砂丘



BC 800	600	400	300	200	100	0	100	200	300	400	500	600	700	800	1000	1500
	縄文晩期	弥生前期	中期	後期	古墳前期	中期	後期	飛鳥	奈良	平安						室町
				【鑄造破片再生の時代】				【本格鍛冶の時代】				【鉄の量産化の時代】↑				
日本古代 和鉄の歴史				【原始鍛冶の時代】				【鉄生産・鉄の自給拡散の時代】								
				【鍛打伸展鍛冶の時代】				【鉄の多様化の時代】								

1. 縄文晩期～弥生前期 紀元前2世紀～紀元1世紀 【鑄造破片再生の時代】

中国・朝鮮半島との交流は縄文時代晩期には既に始まっており、中国にその起源をもつ鉄器が日本に現れ、その後弥生前期には中国で製造された鑄物製の鉄斧などの破片を日本で割るなどの再加工して使用する事が始まる。

2. 弥生時代中期～後期 紀元1世紀～3世紀初頭 【原始鍛冶の時代】

薄く板状に鑄込み表面脱炭去れた素材が日本に持ち込まれ、曲げなど簡単な鍛冶が行われるようになる。

3. 弥生時代後期以降～古墳時代中期 2世紀～4世紀 【鍛打伸展鍛冶の時代】

中国では脆い鑄鉄鑄物ばかりでなく、鉄鉱石を低温還元焼成してつくられた塊状錬鉄が得られるようになり、脱炭鑄鉄と同時に日本にこれらが持ち込まれるようになり、これらを素材とした鍛錬加工(原始鍛冶)がスタートし、次第に本格鍛冶へと移って行く。

4. 古墳時代初頭以降 初期～中期 3世紀前半～5世紀 【本格鍛冶の時代】

大陸では塊状鉄精錬が本格化し、鍛冶材料として広く流布。朝鮮半島でもこの塊状鉄精錬がスタートしたと見られるが、はっきりしない。

この当時 半島朝鮮半島の南部辰韓・加耶と倭国との交流が始り、4世紀半ばには加耶が鍛冶加工された薄い鉄板(鉄)の供給基地として登場し、渡来人の交流と共に大量の鉄が鍛冶原料として持ち込まれるようになる。当初3世紀には北九州に限られた鉄の先進地が5世紀には瀬戸内・出雲・吉備・畿内へと東進してゆく。この間日本に於いてはこれら朝鮮半島から持ち込まれた鉄と共にこの鍛冶・加工に使った鍛冶炉跡や鍛冶滓が大量に見つかるようになる。

5世紀後半になると畿内には大泉遺跡のような大規模な專業鍛冶集団が生まれて勢力を伸ばす。

5. 古墳時代中後期～飛鳥・奈良 5世紀末～8世紀 【鉄生産・鉄の自給拡散の時代】

その始りはまだはっきりしないが、5世紀末から6世紀初頭にかけて 鉄鉱石原料とした箱型炉による製鉄精錬が日本国内(吉備)で始り、鉄素材の自給が始まった。また 国内に大量に存在する砂鉄を原料とした精錬も始り、日本での鉄自給の波が西国から東へ広がって行く。

7世紀末から8世紀には現在の福島県原ノ町近傍(行方製鉄遺跡)まで広がりさらに、9世紀には青森岩木山北山麓での製鉄が確認されている。

6. 奈良・平安時代 8世紀～11世紀 【鉄の多様化の時代】

竪型炉が関東・東国に出現し、大型の箱型炉や鑄物遺跡の出現など鉄生産が日本全国におよび、鉄生産の多様化が進む。本格的な鑄物生産がはじまり鉄の多様化がはじまる。

7. 中世 15世紀以降 【鉄の量産化の時代】

高殿たたらが鉄山経営として成り立ち 出雲など中国地方の生産が他を圧倒して行く

『Iron Road 和鉄の道』【1】

はじめに

M.Nakanishi home page 『IRON ROAD 和鉄の道』

日本誕生とたたら 歴史雑感 『IRON ROAD と日本誕生のロマン』
 出雲と新羅・朝鮮との関係 -スサノオ伝説とたたら-
 たたら製鉄の起こりと発達
 「たたら」製鉄 日本古来の砂鉄製鉄法

『IRON ROAD 和鉄の道』【1】

1. 『和鋼・たたら』との出会い
 【砂鉄が風紋を作る砂丘海岸 茨城 鹿島・波崎・千葉九十九里浜】
2. 日本人のルーツと「和鉄の道 Iron Road」の接点を求めて
 『弥生人の源流を探る =西から東へ=』土井ヶ浜シンポジウムの周辺で
 1. 山口県土井が浜弥生遺跡 と 「土井が浜シンポジウム」
 - 1.1. 土井が浜弥生遺跡 & 人類学ミュージアム
 - 1.2. 『中国青海省の青銅器時代人骨と弥生人骨』
 - 1.3. 長江で『渡来系弥生人』の人骨初確認
 -日 中調査団 ルート論争に一石-
 2. 日本人のルーツ渡来系弥生人の源流をもとめて
 3. 『弥生人の源流は大陸のどこまでさかのぼれるか』
 4. 古代日本と中国・朝鮮の交流 鉄の伝来
 5. 『ヤマトノオロチを退治したスサノオノミコトは朝鮮からやってきた』
 6. 出雲と朝鮮新羅の関係 ・ 日本誕生とたたら 歴史雑感・
3. 岡山県 富村 鍛冶谷たたら 【鍛冶谷たたらと初花】
 1. 富村鍛冶屋谷 たたら遺跡
 2. 『初花 - ほとばしるたたら溶鉄の造形 - 』
4. 古代畿内勢力 蝦夷征伐の兵器庫 福島県 原町 金沢製鉄遺跡
 【黄金吹く「行方製鉄遺跡」】
 1. 7世紀 畿内王権の蝦夷征伐の兵器庫「行方製鉄」遺跡を訪ねる
 2. ヒタカミ「日高見(北上)」の鬼 蝦夷(エミシ)の雄アテルイ
 3. 8世紀 蝦夷と戦った畿内王権の前線基地「多賀城遺跡」
5. 山陰の古代鉄の大王国 伯耆国
 -日本誕生に役割を演じた古代山陰の iron road -
 【溝口の鬼伝説と古代伯耆国の製鉄地帯】
 1. 『鉄の伝来をもたらし古代 山陰鉄の王国の出現』
 -日本誕生に役割を演じた古代山陰の iron road -
 2. 『古代 鉄の集散地 妻木晩田弥生遺跡』 -鳥取県淀江町・大山-
 3. 『溝口の鬼伝説』と伯耆の国の製鉄地帯

6. 津軽の古代鉄の大王国
 - 【岩木山北山麓の鬼伝説と古代津軽の製鉄地帯】
 - 1. 鬼伝説と古代製鉄
 - 2. 岩木山北麓 鬼沢 「鬼神社」と「鬼伝説」
 - 3. 空沢製鉄遺跡群 鱒ヶ沢町湯舟 と 「鬼伝説」
 - 4. 中世の交易都市 安東氏の拠点 十三湊
7. 東北 秋田・青森 縄文のストーンサークル
 - 【縄文人の心を映すストーンサークル】
 - 1. 縄文のストーンサークル これも iron road
 - 2. 秋田県 鹿角市 大湯 ストーンサークル
 - 3. 青森県 青森市 小牧野 遺跡
 - 4. 青森県 青森市 山内丸山 遺跡 ストーンサークル
 - 5. 秋田県 鷹巣町 伊勢堂 岱 遺跡
8. 「弘前ねぶた」と岩木山北山麓「鬼伝説の里」
 - 【鬼沢の鬼神社 十腰内巖鬼神社を訪ねて】
 - 1. 「弘前ねぶた」
 - 2. 「鬼沢のねぶた」出陣へ
 - 3. 岩木山の鬼伝説
 - 4. 鬼神社 巖鬼山神社を訪ねて
9. 山口県のたたら 美祢河原上たたら遺跡
10. 丹後国の古代鉄の王国
 - 【天女の通った道は鉄の道 【羽衣伝説】】
 - 1. 丹後国 古代 鉄の王国
 - 2. 「羽衣伝説 天女の通った道は鉄の道」
 - 3. 弥生時代 3 世紀の大型墳丘墓遺跡 赤坂・今井墳丘墓遺跡
 - 4. ガラスの腕輪と大量の鉄剣が出土した大風呂南古墳
11. もう一つの邪馬台国 丹後国
 - 【大陸と日本を結ぶ古代丹後の国の大製鉄加工基地遠所遺跡】
 - 1. もう一つの邪馬台国 -丹後の国の重要性-
 - 2. 弥栄町 遠所製鉄遺跡 - 丹後の国 古代最古の製鉄コンビナート -
 - 3. 遠所遺跡と製鉄炉と丹後の国製鉄炉の変遷
 - 4. 遠所遺跡原料 高チタン系砂鉄の謎
 - 現在の溶接材料につながる高チタン滓系 -
 - 5. 発掘調査中のニゴレ遺跡探訪

『IRON ROAD 和鉄の道』

BY M.NAKANISHI ironprint.htm



古代から昭和初期に至るまで、日本に西洋製鉄法が根づくまでの間、『たたら』と呼ばれる砂鉄と木炭を使った素晴らしい日本独特の製鉄があった。

3世紀～5世紀、さらに飛鳥・奈良時代に至るまで、朝鮮半島から、日本沿岸をめぐる『大陸からの鉄伝来の道』があった。

大陸からの「稲作」や弥生文化の伝来の道 数多くの渡来人がやって来て、「日本誕生」に関わった道 『たたら』の言葉の響きの中にあるロマンに魅せられ 『COUNTRY WALK 『IRON ROAD -和鉄探訪-』をスタートした。



全国至る所に『たたら』の製鉄遺跡・砂鉄の産地があるが・・・

弥生時代・日本の誕生が金属器の使用に始まるとすると武器・農耕機具等の『鉄器』の支配は日本の国の広がりにも重要な役割を担ったに違いない。

『日本誕生』と『鉄』の展開には、非常にミステリアスな出会いがあるに違いない。

最近の青森三内丸山縄文遺跡や吉野ヶ里遺跡に代表される弥生遺跡の発掘は日本の誕生研究に大きな展開をもたらしている。

また、昨年全国をブームの渦に巻き込んだアニメ映画「もののけ姫」は「たたら」を広く一般の人々たちに紹介するきっかけとなった。

司馬遼太郎著『街道を行く』の一遍である「砂鉄の道」や「朝鮮半島を行く」の中には著者の鋭精緻な知識・現地主義に裏付けられた鋭い歴史観とあいまって、古代の『たたら』や『渡来人』『日本誕生』のロマンが熱っぽく語られている。

最近 金属学会報・鉄鋼協会誌に『たたら』『古代鉄』の詳細な研究報告が発表され、学術的にもまた、最近多くの人々が取り組んでいる。

日本誕生とたたら 歴史雑感

『IRON LOAD と日本誕生のロマン』

出雲と新羅・朝鮮との関係 -スサノオ伝説とたたら-
susaprint.htm 1998.11.1.

いつたい弥生人はどこからやってきたのか？ 鉄器はどこから伝わったのか？

『日本誕生』の古代には、北九州・出雲・吉備・丹後・津軽などに時代はこととするとしても大和と拮抗する王国があったという。この頃、また 朝鮮半島の百済・新羅・高麗から多くの渡来人がやってきて、日本誕生に関わったという。しかも、鉄の集団と密接に関係して・・・



(慶州：天馬塚にある天馬図)

崇高な文化をこれ一枚で感じることができる



よみがえる古代鉄の王国

伽耶王国展より 1992.8.9.

新羅の前身である弁・辰韓にふれた「魏志東夷伝」に「国から鉄が出、倭などみな随ってこれを取る」という記述がある。この事は古代朝鮮に製鉄技術があり、それを日本の前身である倭からも取りに行くなどの交流があったことを示している。

また、その後の日本誕生にかかわる出雲スサノオ伝説とも絡み、非常に興味深い。そのほか新羅王の冠の飾りに出雲が主産地としてよく知られていた勾玉が使用されていることも興味深い。

【出雲スサノオ伝説】

当時 朝鮮半島では部族・民族間の戦い繰広げられ、難を逃れた多くの人たちが渡来人として日本にやってきた。スサノオノミコトもその一人で新羅系の人たちと共に日本に逃れ、出雲に来て、すでにやってきて、農耕の民と争っていた先住のたたら民を討ち、国を治め出雲の王となった。その後、百済系の人たちの大和朝廷に国を譲った。スサノオノミコトが鉄を目指して朝鮮半島 当時の新羅から日本にやって来たともいわれている。

出雲人の祖先は一体どこから来たのであろうか？

出雲は新羅から船を迎日湾に浮かべると海流によってたどり 着くことの出来る場所である。

当時から大勢の移民が出雲に流れ着いたか、意図的に渡来していたと考えられる。

一方出雲と対峙していた大和朝廷は百済系と言われており、「記紀」等の記述から、出雲を新羅系と認識していたと考えられている。

出雲では砂鉄が取れ、縄文時代の中期頃からすでに素朴な鉄生産が行われていたという記述もある。倭から弁・辰韓に鉄を取りに行った人々の情報の中に、出雲の鉄のことが含まれていたとしてもあながち妄想ではなからう。

【大陸/朝鮮半島・日本への古代鉄伝来の道】



瀬戸内

〔北九州－瀬戸内－備中・美作－兵庫・千種－大和・畿内〕

日本海西沿岸

〔北九州・長門－出雲－丹後－若狭・琵琶湖-大和・畿内〕

日本海沿岸

〔北九州・長門－出雲－丹後－若狭・越－秋田・津軽-松前・北海道〕

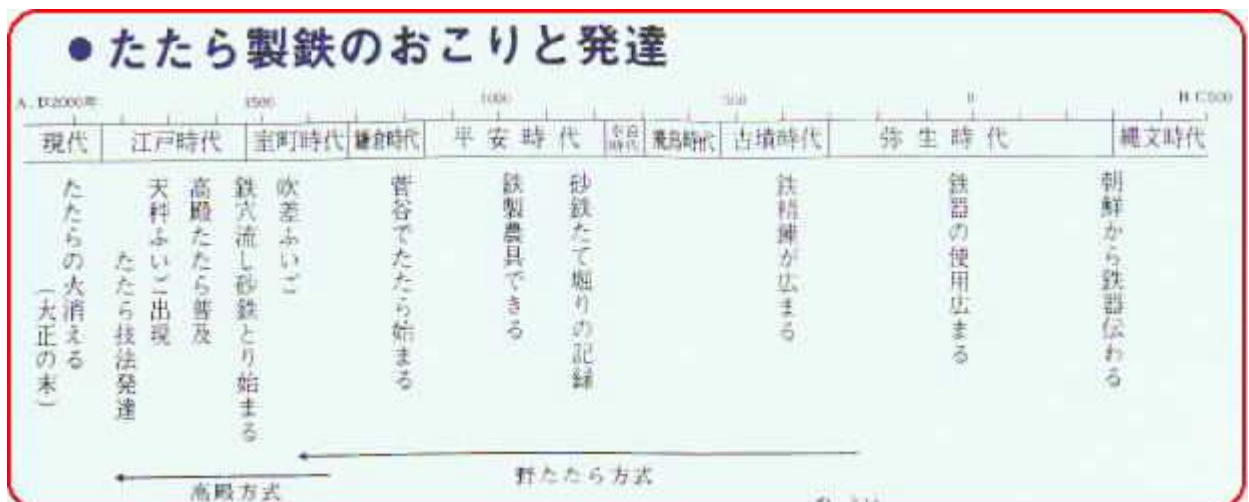
太平洋沿岸ルート

〔津軽－三陸－房総－畿内・紀伊半島・瀬戸内・北九州・〕

太平洋・畿内

〔北九州・瀬戸内・紀伊半島・畿内・河内・大和〕

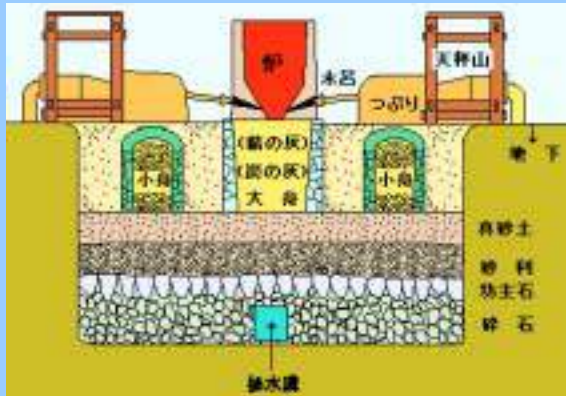
たたら製鉄の起こりと発達



「たたら」製鉄

日本古来の砂鉄製鉄法

1998.10.1. giho.htm



日本独自の古来製鉄 【たたら製鉄】

四合次製鉄図

さきものすしめ

This block contains a series of illustrations and photographs related to the tatara iron-making process. At the top, there is a title '日本独自の古来製鉄 【たたら製鉄】' and a subtitle '四合次製鉄図'. Below this is a large illustration showing four stages of the process: 1. Preparing the furnace, 2. Loading the furnace with iron sand and charcoal, 3. The furnace in operation with a large fire, and 4. Removing the finished iron block. To the right of these illustrations is a detailed cross-section diagram of the furnace, labeled 'さきものすしめ'. Below the illustrations are two photographs: one showing a pile of iron sand and another showing a glowing iron block being removed from the furnace.

「たたら」は粘土製の炉の中へ、原料である砂鉄15トンと燃料である木炭15トンを交互に挿入し、砂鉄を溶かして鉄の塊を得る製鉄法である。

作業は三日三晩にわたって行われ、最終日には炉を壊して炉の底で成長した約2.5トンにもなる鉄の塊「けら」を取り出す。

「けら」は冷却した後、細かく粉碎し、「玉鋼」「歩(ぶ)けら」「けら銚(ずく)」等に分ける。

玉鋼」は日本刀の材料に、「歩けら」「けら銚」はさらに加熱鍛錬により「包丁鉄」となり、工具、農具の材料になる。

『たたら製鉄法』は古代より、砂鉄と木炭を使った日本独特の製鉄法として近代製鉄法が百欧から入ってくるまで栄えた。古代稲作に続く鉄の伝来は日本・大和誕生のルーツに大きく関わっている。また、『たたら』の良質な鉄【玉鋼】は日本刀の原材料として近代製鉄法では再現できず、現在に至るまで珍重されている。『たたら』の誕生・その性能は神祕のベールに包まれている。



【 たたら 製鉄法 】

現在も「たたら」の技法を使って玉鋼を生産している施設

名称	住所	電話番号
日刀保たたら	横田町大呂	0854-52-1010
現代たたら (和鋼生産研究開発施設)	吉田村吉田 たたら鍛冶工房	0854-74-0301



伝統の技

精進こめて玉鋼焼くたたら保集

玉鋼に伝統の技を打ち込む日刀保・小林兄弟

日本刀剣保存協会
たたら

鉄の歴史村 吉田村と菅谷たたら

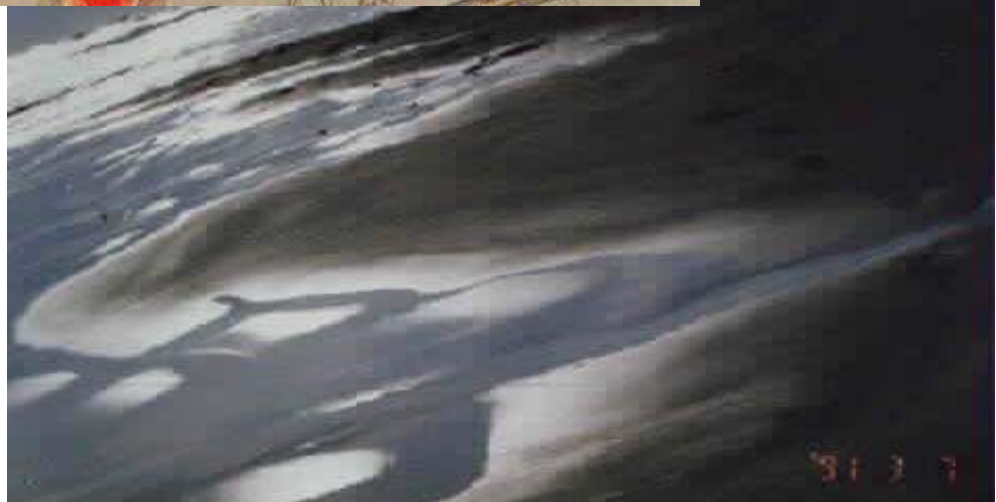
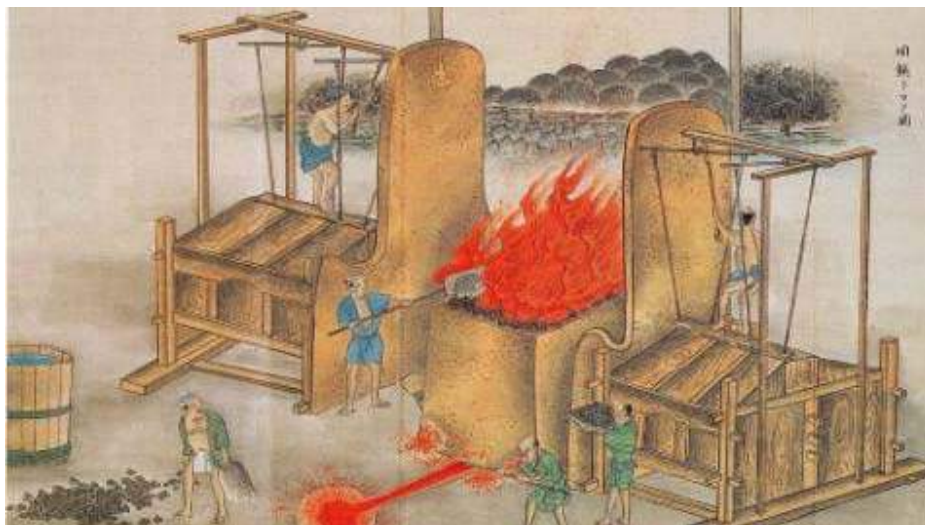
「Iron Road 和鉄の道」【1】 和鉄探訪

1. 『和鋼・たたら』との出会い
【砂鉄が風紋を作る砂丘海岸 茨城 鹿島・波崎・千葉九十九里浜】
2. 日本人のルーツと「和鉄の道 Iron Road」の接点を求めて
『弥生人の源流を探る =西から東へ=』土井ヶ浜シンポジウム周辺で
 1. 山口県土井が浜弥生遺跡 と 「土井が浜シンポジウム」
 - 1.1. 土井が浜弥生遺跡 & 人類学ミュージアム
 - 1.2. 『中国青海省の青銅器時代人骨と弥生人骨』
 - 1.3. 長江で『渡来系弥生人』の人骨初確認 ・日中調査団 ルート論争に一石・
 2. 日本人のルーツ渡来系弥生人の源流をもとめて
 3. 『弥生人の源流は大陸のどこまでさかのぼれるか』
 4. 古代日本と中国・朝鮮の交流 鉄の伝来
 5. 『ヤマトノオロチを退治したスサノオノミコトは朝鮮からやってきた』
 6. 出雲と朝鮮新羅の関係 ・日本誕生とたたら 歴史雑感・
3. 岡山県 富村 鍛冶谷たたら 【鍛冶谷たたらと初花】
 1. 富村鍛冶屋谷 たたら遺跡
 2. 『初花 - ほとばしるたたら溶鉄の造形 - 』
4. 古代畿内勢力 蝦夷征伐の兵器庫 福島県 原町 金沢製鉄遺跡
【 黄金吹く「行方製鉄遺跡」 】
 1. 7世紀 畿内王権の蝦夷征伐の兵器庫「行方製鉄」遺跡を訪ねる
 2. ヒタカミ「日高見(北上)」の鬼 蝦夷(エミシ)の雄アテルイ
 3. 8世紀 蝦夷と戦った畿内王権の前線基地「多賀城遺跡」
5. 山陰の古代鉄の大王国 伯耆国 ・日本誕生に役割を演じた古代山陰の iron road -
【溝口の鬼伝説と古代伯耆国の製鉄地帯】
 1. 『鉄の伝来をもたらした古代 山陰鉄の王国の出現』
・日本誕生に役割を演じた古代山陰の iron road -
 2. 『古代 鉄の集散地 妻木晩田弥生遺跡』・鳥取県淀江町・大山・
 3. 『溝口の鬼伝説』と伯耆の国の製鉄地帯
6. 津軽の古代鉄の大王国 【岩木山北山麓の鬼伝説と古代津軽の製鉄地帯】
 1. 鬼伝説と古代製鉄
 2. 岩木山北麓 鬼沢 「鬼神社」と「鬼伝説」
 3. 空沢製鉄遺跡群 鱒ヶ沢町湯舟 と「鬼伝説」
 4. 中世の交易都市 安東氏の拠点 十三湊
7. 東北 秋田・青森 縄文のストーンサークル 【縄文人の心を映すストーンサークル】
 1. 縄文のストーンサークル これも iron road
 2. 秋田県 鹿角市 大湯 ストーンサークル
 3. 青森県 青森市 小牧野遺跡 ストーンサークル
 4. 青森県 青森市 山内丸山遺跡 ストーンサークル
 5. 秋田県 鷹巣町 伊勢堂岱遺跡 ストーンサークル

8. 「弘前ねぶた」と岩木山北山麓「鬼伝説の里」【鬼沢の鬼神社 十腰内巖鬼神社を訪ねて】
 1. 「弘前ねぶた」
 2. 「鬼沢のねぶた」出陣へ
 3. 岩木山の鬼伝説
 4. 鬼神社 巖鬼山神社を訪ねて
9. 山口県のたたら 美祢河原上たたら遺跡
10. 丹後国の古代鉄の王国 【天女の通った道は鉄の道 【羽衣伝説】】
 1. 丹後国 古代 鉄の王国
 2. 「羽衣伝説 天女の通った道は鉄の道」
 3. 弥生時代 3世紀の大型墳丘墓遺跡 赤坂・今井墳丘墓遺跡
 4. ガラスの腕輪と大量の鉄剣が出土した大風呂南古墳
11. もう一つの邪馬台国 丹後国

【大陸と日本を結ぶ古代丹後の国の大製鉄加工基地遠所遺跡】

 1. もう一つの邪馬台国 ・丹後の国の重要性・
 2. 弥栄町 遠所製鉄遺跡 - 丹後の国 古代最古の製鉄コンビナート -
 3. 遠所遺跡と製鉄炉と丹後の国製鉄炉の変遷
 4. 遠所遺跡原料 高チタン系砂鉄の謎 - 現在の溶接材料につながる高チタン滓系 -
 5. 発掘調査中のニゴレ遺跡探訪



『 IRON LOAD - 砂鉄/たたらとの出会い 』

- 茨城県鹿島・波崎&千葉県九十九里浜 - 1995.10.

『IRON LOAD』-和鉄の道-

3世紀～5世紀さらに飛鳥・奈良時代に至るまで、中国・朝鮮半島から、日本沿岸をめぐる『鉄の道』があったという。

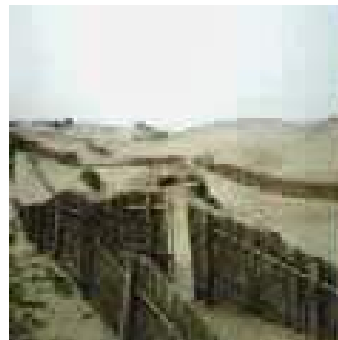
- 瀬戸内〔北九州-瀬戸内-備中・美作-兵庫・千種-大和〕
- 日本海・若狭・琵琶湖-大和〔丹後・若狭&越-大和〕
- 日本海沿岸〔北九州・長門-出雲-丹後-越-秋田・津軽〕
- 北太平洋沿岸〔津軽-三陸-房総--大和〕

1. 『たたら』との出会い

- 茨城県鹿島・波崎&千葉県九十九里浜 -- 『IRON LOAD 1.』 -



鹿島製鉄遺跡図



茨城県 波崎砂丘



千葉県九十九里浜

1991年茨城県鹿島・波崎に転任し、波崎の海岸砂丘・九十九里浜を歩いて驚いた。歩いている足元の砂に砂鉄が大量にまじっている。すごい量だ。

鉄鋼会社に入って、20数年。赴任先の研究所の敷地の地名にも、そこが昔砂鉄の産地であることが、常陸風土記に記されている。

『たたら』むかし少しかじった言葉 この言葉にこだわって country walk したら.....

と頭に浮かんだ。

まず、九十九里浜の完全踏破。兵庫県千種・奥出雲のたたら製鉄遺跡にも.....再度 出掛けよう。

“COUNTRY WALK”をこの『たたら』にこだわってやって見ることにした。

日本には、古代から『たたら製鉄法』と呼ばれる砂鉄と木炭を使う日本独特の製鉄があったという。

弥生時代・日本の誕生が金属器の使用に始まるとすると武器・農耕機を初めとする『鉄器』の支配は日本の国の広がりにかわめて重要な役割を担ったに違いない。

3世紀～5世紀さらに飛鳥・奈良時代には朝鮮半島から、＜日本海沿岸＞＜三陸・房総・太平洋沿岸一大和＞＜北九州・瀬戸内一大和＞など日本沿岸をめぐる『鉄の道』があったという。

日本の国の展開と『鉄』の展開には、非常にミステリアスな出会いがあるに違いない。

スタートは夏の暑い日。銚子の丘に立つ赤いとんがり帽の教会から九十九里浜の海岸全踏破と浜砂鉄の採取から.....

休みごとに歩いている内に冬になり、そして、1995年 仕事で訪れたアメリカ アリゾナで セドナ

へ案内してもらって驚いた。真っ赤な砂地の街・真っ赤な岩山。まさしくベンガラ(赤鉄鉱)の岩山・街。

「たたら」を訪ねる walking はますます広がっている。

スタートとした銚子の教会から約1 KM。最初に砂鉄を見つけた九十九里浜の端飯岡海岸の浜を見下ろす崖に飯岡灯台がある。この飯岡灯台のすぐそばに洒落た小さなレストランがある。

この walking を完了する時には、このレストランで夕日を見ながらワインをゆっくり飲みかわすことにしている。何時完了するかわからないけれども.....

1995.10. 茨城県鹿島郡波崎町にて M.Nakanishi

2. 茨城県鹿島・波崎 & 千葉県九十九里浜 『たたら・製鉄遺跡』探訪

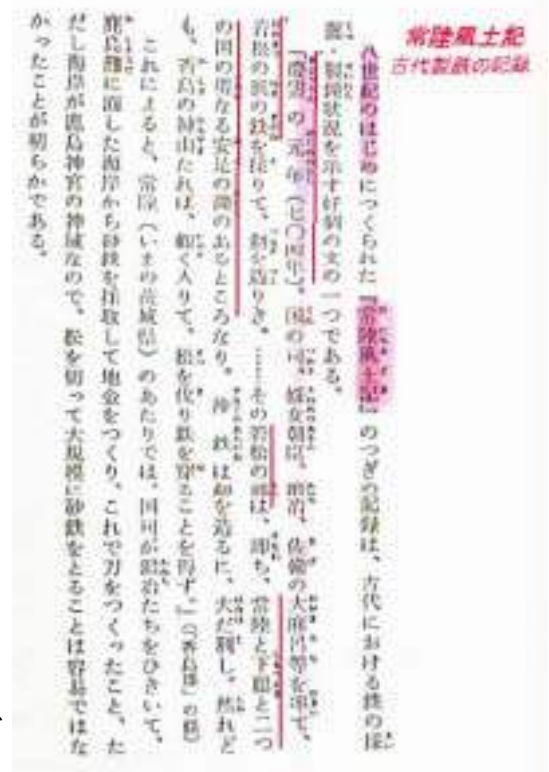
【常陸風土記 古代砂鉄精練の記録】



利根川河口の逆水門より鹿島・波崎工業地帯を望む

古代「常陸風土記」に記載された砂鉄採取・精練の地「若松」はその中央にある。

また、その先鹿島灘に対峙する波崎砂丘には大量の砂鉄があり、その風紋が素晴らしい。



【波崎海岸砂丘 砂鉄の堆積・風紋】



【飯岡浜 九十九里浜砂鉄堆積浜】 -砂鉄の浜(飯岡浜)-



【海上町岩井安町製鉄遺跡】 -飯岡浜北の海岸段丘の丘-



岩井安町製鉄遺跡の概要

◎ 所在地 千葉県海上町岩井安町 浜原地区の丘陵地

◎ 遺跡年代 古墳時代中期4世紀前半 (佐賀県からの出土品で決す)

◎ 製鉄遺跡とは 1. 花崗 2. 煉瓦 3. 磚 4. 瓦 5. 煉瓦破片 6-1. 鉄鋼破片 6-2. 鉄片 の6つの異なる土層が重なった遺跡あり、3-5の煉瓦破片のみを示す場合は製鉄遺跡と見なさない。

製鉄遺跡時期 縄文時代(晩期) 3基-鉄器時代 出雲第4期 古墳時代 16期 5区-平安時代 2期 万葉記頃(基) 5区 5基

遺跡の概要
 平安時代遺跡は、沖積堆積する丘陵に位置する製鉄遺跡で、1971年、縄文時代から奈良-平安時代における各時代の遺跡の存在が明らかになりました。遺跡事項として、鉄鋼を扱った遺跡です。「製鉄遺跡」は古墳時代前期の土層です。土層の形状は、若干の崩壊と砂を埋め込み、50cm-60cmを掘り、出土遺物は、鉄鋼のはかせ、鉄片、ハンマー(石製)、土、コブ等です。古墳時代は、当時の製鉄の出土品は、産物の産地に入ると考えられます。全国的に見ても、この遺跡を調査して、他県でも同様の製鉄所が知られることによって、時期決定に関しては見られるところがあります。

「平安時代」は平安時代の製鉄所(山崎遺跡)があります。

「平安時代」から発見された製鉄所(山崎遺跡)遺跡が、調査されたため、調査と製鉄(金)「ころばり」の可能性は高く、おそらく古墳時代前期に、その後の遺跡(土層)に製鉄所(製鉄所)を築いたものと考えられます。その後に、丹波川の周辺(土層)に製鉄所(製鉄所)を築いたものと考えられます。

この遺跡は、平安時代より、平安時代の縄文時代遺跡から発見された約300m、平安時代のものを中国や朝鮮半島から輸入して、その後もしばらくは、輸入した製鉄所を製鉄所に加工する可能性があります。

【べんがらの岩山・街 SEDONA】 -アメリカ フリゾナ州-



2. 日本人のルーツと Iron Road の接点を求めて

『弥生人の源流を探る =西から東へ=』

japanprint.htm

1. 山口県土井が浜弥生遺跡 と 「土井が浜シンポジウム」
 - 1.1. 土井が浜弥生遺跡 & 人類学ミュージアム [dhmprint.htm](#)
 - 1.2. 『中国青海省の青銅器時代人骨と弥生人骨』 [dhm2print.htm](#)
 - 1.3. 長江で『渡来系弥生人』の人骨初確認 [dhm3print.htm](#)
日中調査団 ルート論争に一石
2. 日本人のルーツ渡来系弥生人の源流をもとめて [roots1print.htm](#)
3. 『弥生人の源流は大陸のどこまでさかのぼれるか』 [roots2print.htm](#)
4. 古代日本と中国・朝鮮の交流 鉄の伝来 [gaya1print.htm](#)
5. 『ヤマタノオロチを退治した
スサノオノミコトは朝鮮からやってきた』 [susano1print.htm](#)
6. 出雲と朝鮮新羅の関係 [susaprint.htm](#)
日本誕生とたたら 歴史雑感



1. 土井が浜弥生遺跡 & 人類学ミュージアム

【 土井が浜 弥生パーク 】

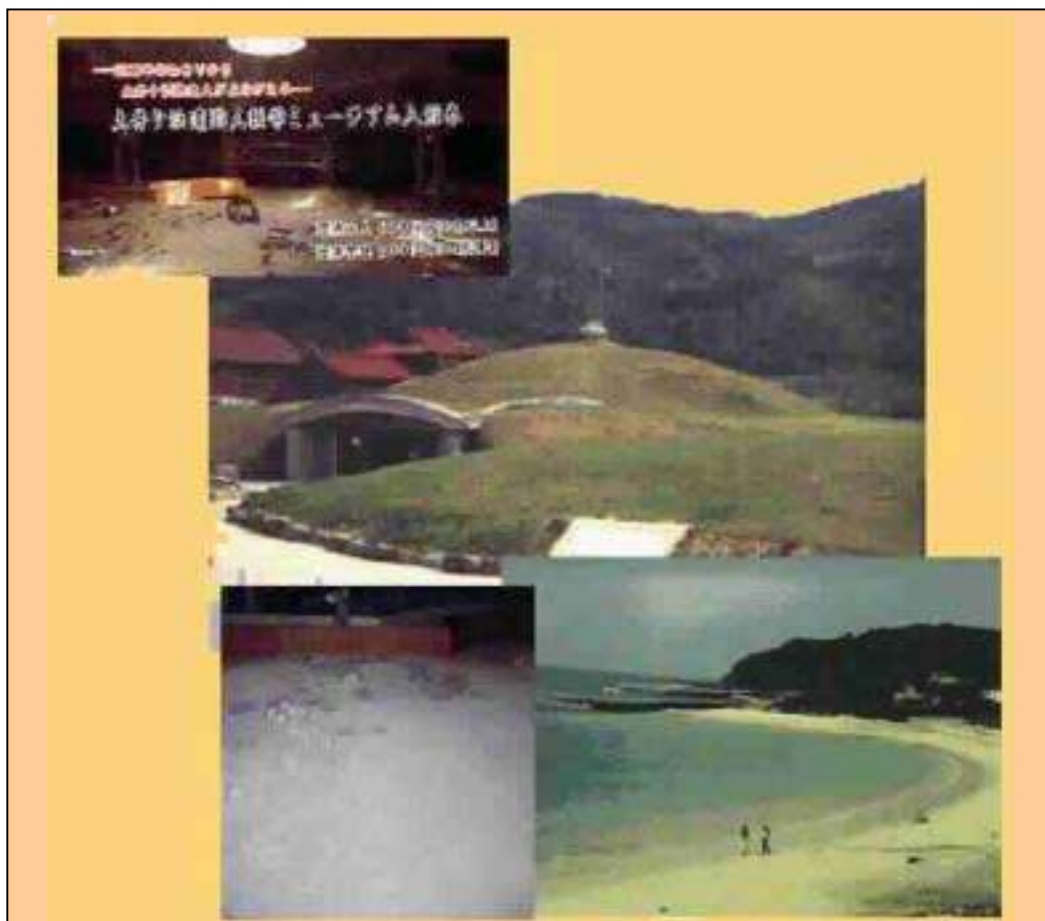
山口県豊浦郡と豊北町

dhm.htm by M.Nakanishi 1999.5.3.

1.1. 土井が浜 人類学ミュージアム

土井が浜遺跡は、遠い2000年の昔 日本の歴史を考える国立の史跡公園です。

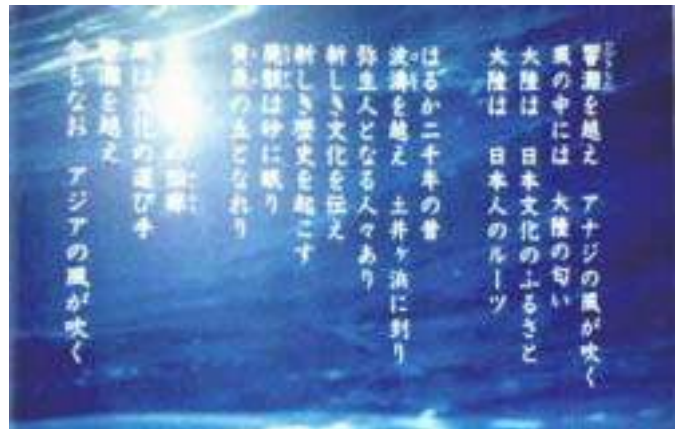
この日本海を臨む浜辺の丘の上には、300体を超える弥生人骨が整然と
並んで埋葬・出土した非常に貴重な集団墓地遺跡です。



この多くの弥生人骨は、日本人の起源を考えるうえで、また、埋葬の在り方は弥生人の生活を知るうえで大変重要な資料を提供しています。

この土井が浜人類学ミュージアムでは 中国の研究者達と共同研究が行われる一方毎年人類学シンポジウムが開催され、この渡来系弥生人のルーツ調査が行われています。

【土井が浜 人類学博物館ドームの内部】



発掘された状態でドームがかけられ内部が見学できます

その結果、ここから出土した弥生人の人骨は、中国内陸部の黄河・長江に挟まれた地帯から出土する人骨とよく似ている事が、発見され、弥生人のルーツの一つがこの地方にあることが判りつつあります。



【土井が浜渡来系 弥生人と縄文人の顔骨格の相違】

縄文・弥生の時代を超えて、大陸から多くの人々が渡来し、数々の文化を伝え、この日本を形作ってきました。2000年前の昔中国春秋戦国の動乱の中、大陸から渡来し、日本人として生涯をとじた渡来人達が、望郷の念を抱きつつ海をへだててはるか遠い故郷の方向をじっと眺めつつ、この丘で今も眠りについている。
北九州・山口地方の渡来系弥生人のルーツが土井が浜弥生遺跡です。

1.2. 『中国青海省の青銅器時代人骨と弥生人骨（予報）』

松下孝幸 ・ 韓康信

1998.6.30. 土井ヶ浜人類学博物館にて

dhm2.htm 1999.54.24. by M.Nakanishi 資料収録

私たち学際的共同研究チームは、土井ヶ浜弥生人など、縄文人的特徴をもたない弥生すなわち渡来系と呼ばれている弥生人のルーツを探るために、中国の研究者と共同研究をおこなってきた。

94年から96年までの山東省との共同研究で、山東省臨?から出土した周代末と漢代人骨が、北部九州や山口の弥生人骨によく似ていることが、明らかになり、北部九州・山口タイプの弥生人のおおもとは中国大陸にあると考えても差し支えない状況になりました。

しかし、私たちはこの事実から北部九州・山口タイプの人は山東省から来た、といってるわけではない。どこから来たかはまだわからないが、おおもとは大陵にあるといってもいいだろうと思っている。これから先は「直接どこから、どのようなルートで、どこへ入ってきたか」という課題と「本当のルーツはどこか」という2つの課題で調査研究を進めていく計画である。

「本当のルーツはどこか?」というのは土井ヶ浜弥生人や吉野ヶ里弥生人など日本では渡来系弥生人とよばれている人々の形質は「どこまでさかのぼれるのか?」「中国大陸ではいつごろからこのような特徴をもった人々がどこに現れたのか?」という意味である。

山東省臨?では周代末からは確実にこのような特徴を示していましたので、おそらく周代までは確実にさかのぼれると私たちは考えている。

日本列島への渡来を考える場合は、日本人はよく北からとか南からとかいうが、中国でヒトの移動を考える場合は、西から東への流れを無視するわけにはいかない。

私は、黄河と揚子江の二大河川に沿ってヒトと文化が西から東へ移動したのではないかと、考え、まず黄河と揚子江の源流がある青海省の古人骨の特徴を調べてみることにした。

幸いなことに青海省からは保存状態のよい青銅器時代の人骨が多数発掘され、韓先生のご努力でそれらが保管・管理・整理されていた。

現在、私たちはこの人骨の研究をおこなっているが、人骨が多量なためにまだ彫塑途中なので、今年は研究の一部をご紹介します。

第6回 土井ヶ浜シンポジウムにて

1. 弥生人の地域差

1. 北部九州・山口タイプ	1. 顔が長い(顔の高さが高い) 2. 鼻の付け根が扁平 3. 高身長(男性 162~164 cm 女性 150cm程度)
2. 西北九州タイプ	1. 顔が短い 2. 眉上弓の隆起が強く、鼻骨が隆起し鼻根部が陥凹しており、ホリが深い容貌 3. 低身長(男性 158cm程度 女性 148cm程度) 4. 風習的抜歯を行っている。
3. 南九州・南西諸島タイプ	1. 著しい「低・広顔」(西北九州弥生人の特徴がさらに顕著) 2. 強い「短頭性」(頭を上からみた形が円に近い) 3. 著しい低身長 {男性 153~155 程度 女性 141~145cm程度} 4. 風習的抜歯を行なっている。

【弥生人と縄文人の頭骨の特徴と差】

<山口県土井が浜人類学ミュージアム>



2. 地域差が生じた理由

西北九州タイプ	<ul style="list-style-type: none">・ 縄文人の特徴と同じ・ 彼らは縄文人の子孫？
北部九州・山口タイプ	<ul style="list-style-type: none">・ 縄文人の特徴は見られない・ 彼は大陸からの渡来人か？

3. 中国大陸の2,000年前の古人骨

山東省の臨沂の漢代と周代の人骨は北部九州・山口タイプに酷似。

4. 青海省青銅器時代人骨 資料{頭蓋}

各人骨の所属時代は、？ 約文化および辛店文化期の青銅器時代で、日本の縄文時代 後期に相当する。

上孫家	アハトラ山	李家山	合計
232	37	24	293

5. 李家山頭蓋の特徴

- ・ 頭型は中頭型。
- ・ 顔の特徴は高さが高く、幅が狭い(高顔・狭顔)。
- ・ 鼻根部は扁平。

土井ヶ浜弥生人や吉野ヶ里弥生人などの渡来系弥生人に酷似。

土井ヶ浜弥生人の形質的特徴の原形は青銅器時代までさかのぼる可能性が強くなってきた。

土井ヶ浜の海岸丘で、遠く大陸へ続く日本海を眺めつつ眠る土井ヶ浜人。

弥生人については日本人のルーツの集団の一つが、黄河・揚子江に挟まれた流域からやって来たらしい。

中国・朝鮮半島の多くの国の興亡の中 朝鮮海峡を渡り、日本にやって来た。

この弥生中期の土井ヶ浜人が鉄を持ってきたかどうか?はまだ判っていない。

しかし この道は日本へ数々の文化を伝えた本街道。

日本へ鉄を伝えた『 Iron Road 』も間違いなくこの道であつたに違いない。

日本人の起源 シリーズ 1 土井が浜 弥生人のルーツ

1.3. 長江で『渡来系弥生人』の人骨初確認

日中調査団 ルート論争に一石

朝日新聞 1999年3月19日朝刊より

choko.htm 1999.3.25

『大陸から稲作や金属器など弥生文化を伝え、現代日本人の成立にも大きな影響を与えたとされる渡来系弥生人にそっくりな人骨を中国・長江（揚子江）流域で初めて確認した』と3月18日 日中共同調査団が発表
日中共同調査団

日本側団長、山口敏・国立科学博物館名誉研究員
中国側団長、鄭厚本・南京博物院考古研究所長



北方系とされてきた渡来系弥生人の故郷のひとつが長江下流域にもあったことをうかがわせる発見で、朝鮮半島経由ルートと江南ルートに分かれて論争湖続く弥生文化の伝播をめぐっても大きな関心を集めそうだ。

中国・江蘇省の梁王城、胡場などから出土した古人骨を対象に、1996年度から人類学者グループが南京博物院と調査を進めていたもの。

日本の弥生時代とその直前にあたる春秋戦国時代から前漢時代の人骨約二十体の頭がい骨や四肢骨、歯を計測。併せてDNAも調べた。

その結果、北部九州や山口県で見つかる、背が高く面長でのっぺりした顔立ちの渡来系弥生人と姿形が酷似し、遺伝的にも近いことがわかった。

また、弥生時代にみられる抜歯の風習も確認された。

日本人の成立については、南方系とされる彫りが深く低身長 of 縄文人に、大陸北部の北方系の渡来系弥生人が混血したという見方が有力。九〇年代に入り中国では、黄河下流域の山東省や内陸部の青海省などでも渡来系弥生人に似る骨が確認されているが、長江下流域では知られていなかった。

山口団長は「稲作文化の中心は長江流域。渡来系弥生人を北アジア的とする通説に修正が必要ではないか」と話している。

近年、長江流域は、中国文明とは別に独自の高度な文明を持っていたとして注目を集めている。春秋戦国時代には呉・越や楚などの国が興った。畑作地域の華北とは異なる稲作圏であることから、稲作中心の弥生文化は直接ここから日本列島に流入したとする説があり、有力な朝鮮半島経由説と対立している。

考古学的に江南ルートの存在を主張してきた

樋口隆康・奈良県立橿原考古学研究所長の話

長江流域は人類学では手が付けられていなかった。渡来系弥生人に似ているならば彼らが弥生文化を持ってきたと言っていい。

弥生文化が来た道はいろんな道があったことを示す育力な資料だ。

2. 日本人のルーツと Iron Road の接点を求めて

『弥生人の源流を探る =西から東へ=』

-土井が浜シンポジウムの周辺で-

日本人のルーツ

渡来系弥生人の源流を求めて

大陸から日本海を渡る『渡来人の道 鉄の道』を考える

roots1.htm 1999. 4. 24.

昨日 弥生時代の大集落・大型建物の列柱の出た大阪府池上曽根遺跡の大型建造物の完成を記念して隣接の大阪府立弥生文化博物館で開催中の『渡来人登場・弥生文化を開いた人々 --』展を見に行った。大阪から和歌山へのバイパス国道 26 号線沿いの和泉市と泉大津市の境の市街地に新たに復元された巨大な列柱を並べた建物と広い遺跡に隣接して弥生博物館が建っていた。東には河内から大和へ続く山々が見え、渡来人の郷 河内飛鳥がすぐ近くここも間違いなく渡来人の足跡が感じられる。



大阪府池上曽根弥生遺跡に復元された大型建造物



弥生特有の線描 船と狩猟 船の舳先に鶴が見える

このページを気にかかっているインターネット ホームページ『IRON ROAD ・たたら』の「大陸との交流」のページを進めるきっかけにしようと思う。

300 体を超える渡来人が望郷の念を抱いて日本海のかなたの大陸を眺めながら整然と並んで眠る山口県響灘の土井が浜の海岸丘遺跡。出雲の国に入り、ヤマタノオロチを退治したスサノウノミコトは戦乱の朝鮮半島の小国の王子。鉄を持って日本に逃れてきたと言う。邪馬台国の所在地は北九州・畿内???

日本海側や瀬戸内沿いにヤマトに向かって点々と続く金属器と稲作集落の弥生の遺跡・古代王国の連環。

などなど。

紀元前 1 世紀から 3 世紀にかけて中国・朝鮮半島の戦乱の世に戦乱を逃れ、多くの渡来人が日本へやって来たという。

大陸から九州・西日本に続くこの道は渡来人と一緒に歩んだ『稲の道』『鉄の道』『大和・日本成立の東遷の道』。

その黎明には大陸からやって来た幾多の渡来人一族の群れがこの道をと通っていった。

そして、弥生人の子孫が渡来人達の技術・技能を借り、それらを融合して築いた大和の国。

稲作を伝え、金属器を伝え、集落を作り、国へと発展し、日本の骨格が出来ていったと言われている。

昨年 土井が浜人類学ミュージアムで『土井が浜人のルーツ・日本のルーツ』の資料を貰った。

これらを手がかりに渡来人の道 「鉄の道」を考えてみたい。

3月に娘のいる米子訪問を機に「和鉄・渡来の民が色濃く足跡を残す古代王国の地」である奥出雲・伯耆の国を訪ねた。

- ・日野川・斐伊川の流れてたたら衆の守り神金屋子神社。
- ・スサノオ神話の鳥上の峯〔船通山〕とヤマタノオロチ。
- ・司馬亮太郎著『街道を行く:安芸の道』で読んだ
「石見風土記の丘・江の川と三次盆地渡来人とたたら」

曾根池上遺跡に併設された大阪府立弥生文化博物館で開催されている「渡来人登場 -弥生文化を開いた人々」展 を見つつ、また、曾根池上弥生遺跡の中に立ち、バラバラではあるが次々と古代ロマンの膨らむ一日でした。

ちょうど朝日新聞に日本渡来人のルーツが黄河流域のみならず揚子江の中流も考えられるとの日中共同研究の記事。 中国大陸の文化の伝播が川沿いの南北のみならず両者を繋ぐ東西にも広がっていったと伝えている。

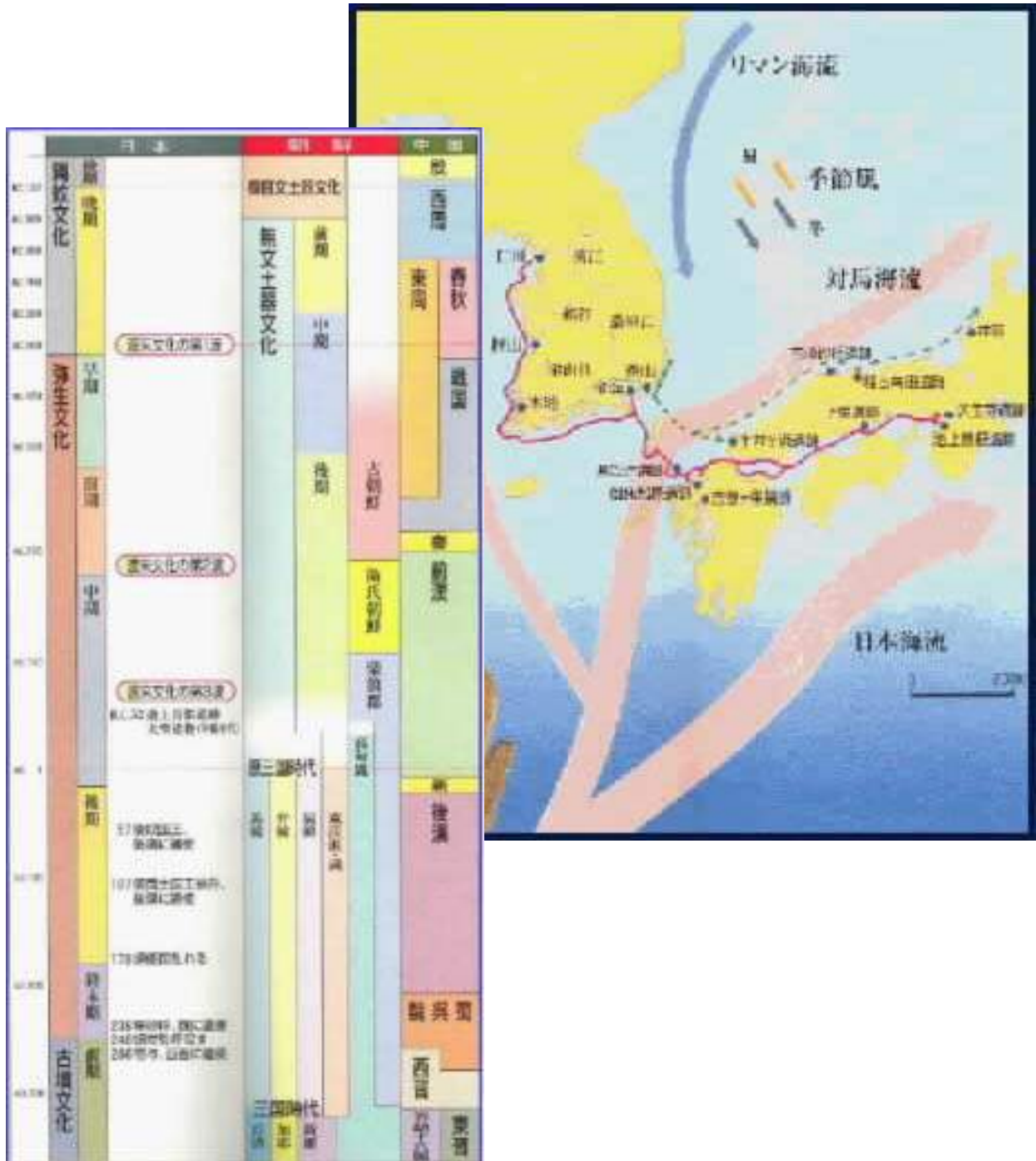
土井が浜 人類学ミュージアムの「土井が浜人 ルーツ研究」の資料にも同じ事をみた。

【 参 考 】

弥生時代の東アジア史年表 <日本・朝鮮・中国>

弥生 日本 の起源黎明期 大陸環境と渡来人

朝鮮から日本への推定航路 & 弥生時代の東アジア年表



日本人のルーツ と Iron Load の接点を探して

3. 『弥生人の源流は大陸のどこまでさかのぼれるか』

第6回 土井が浜シンポジウム

『弥生人の源流を探る・西から東へ・』

ーシンポジウム開会挨拶より転記・

土井が浜遺跡・人類学ミュージアム 松下孝幸館長

1998.8.30. 土井が浜人類学ミュージアムにて

roots2print.htm 1999. 5. 4. by M..Nakanishi 収録

【松下孝幸館長基調 Review】

『 弥生人の源流を探る ・ 西から東へ ・ 要約 』

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 館長 松下孝幸

1998.8.30. 第6回土井が浜シンポジウムにて

『土井ヶ浜シンポジウム』は、人類学ミュージアムの活動の大きな柱で人類学的成果と考古学的成果などを広く普及し、その成果を分かちあうことを目的として、学際的に行なっているシンポジウムです。今年第6回目になり、また日中共同シンポジウムの5回目となりました。

1993年 第1回 テーマ

「弥生人は海をかけて南北に交流したか」

1994年～1996年 第2,3,4回テーマ

「北部九州・山口と中国山東省のヒトと文化」

(中国山東省の考古学者と中国の人類学者との共同討論)

1994年から、人類学ミュージアムは中国山東省の考古学者や中国の人類学者と共同で、土井ヶ浜弥生人などの渡来系弥生人のルーツを明らかにする調査と研究を行なったので、その成果を普及するためのシンポジウムでした。

この共同研究によって北部九州・山口の弥生人のルーツ（おおもと大陸にあると考えてもよさそうです。また、土井ヶ浜弥生人の形質的特徴は、山東省での調査の結果、周代までは確実にさかのぼれることがわかりました。この結果を踏まえて、今後の次ぎの課題を解決するための調査研究を行って行こうと考えています。

直接の渡来地はどこか、

形質的起源はどこまでさかのぼれるか・そしてそれはどこの地域か、

大陸の文化と人骨をみていると、南北間の流ればかりでなく、東西間の動きもあるようでこれも軽視できません。

「黄河と長江の二大河川に沿ってヒトと文化が西から東へ移動した可能性があるのではないか」と考え、両河川の源流がある青海省から出土した古人骨を、1997年から1999年まで青海省と共同で研究し、弥生人の源流を深ってみたいと思います。

【 渡来系弥生人 と 縄文人をルーツとする弥生人の特徴 】



渡来系弥生人
北九州・山口タイプ
土井ヶ浜人
【弥生中期】



縄文人系弥生人
西北部・南九州タイプ
佐賀県詫田西分遺跡
【弥生中期】



縄文人
長崎県脇岬遺跡
【縄文後期】

【西日本の主な弥生人 人骨出土地と渡来人のルート】

「渡来人登場 - 弥生文化を開いた人々 -」展資料より 1999.4. 22



【渡来系弥生人と縄文人をルーツとする弥生人の特徴】



4. 古代日本と中国や朝鮮の交流と鉄の伝来

gaya1print.htm

弥生時代 日本と中国・朝鮮半島との間には化ば都な交流があり、これらの交流・日本への渡来を通じて日本・日本人のルーツである弥生文化・弥生人が成立した。

弥生時代の農耕文化を支えた農耕器具や日本成立への戦乱を乗り切る武器として『鉄器の伝来』もこれらの交流を通じてもたらされ、『たたら』製鉄として昭和の世まで約 2000 年の長きに渡り、連綿と日本を支えてきた。

この弥生・古墳時代の鉄器・製鉄技術の伝来についての記述について、思いつくまま調べている。

1999. 5. 2. 神戸にて M..Nakanishi

中国ではすでに紀元前 5 世紀には鉄器文化が花開いており、戦乱・民族の移動交流を通じて四方に広がっていった。春秋戦国時代以来中国で繰り返された戦乱が朝鮮半島に作用し、日本にも渡来の民を通じて影響し、この過程で日本にも鉄器が伝えられたと考えられます。

「三国志」魏志韓伝によると紀元前 2, 3 世紀中国の政策や動乱の影響を受け、朝鮮半島の社会や政治が移り変わり、大勢の人々が移動・移住したと伝えている。

朝鮮北部から陸路ばかりでなく、山東半島・遼東半島周辺の朝鮮半島西岸ばかりでなく、朝鮮海峡を渡り、日本にも集団で渡った民がいたこと想像され、日本と中国・朝鮮半島の交流が活発にあったと考えられている。

また、魏志韓伝にはこの紀元前 2,3 世紀から紀元 1 世紀にかけて、「弁辰の国は鉄を産し、韓・(ワイ)倭 皆がそれを求めてくる」と記している。そして、大和朝廷の成立する 3 世紀には南朝鮮の弁韓・辰韓地方から鉄の王国伽耶諸国が成立し、これら諸国と日本との活発な交流を通して、鉄製品の輸入・本格的な製鉄技術の移入が始まり、『大和の国・日本』の成立に大きな影響を与えた。

日本書紀によれば、出雲国でヤマタのオロチを退治したスサノウノミコトはこの戦乱の南朝鮮からの渡来した集団の長と伝えている。

司悠司は小説『霸王スサノオ伝説』でこのスサノウを伽耶国の王子として製鉄技術を持って先に渡来していた集団(ヤマタノオロチ)を滅ぼし、さらに次

々と土着豪族を斬り従えて出雲・大和を平定し、ついには日本統一をはたす大ロマンを小説に書き上げている。

真偽は別にして、当時の日本と朝鮮諸国との交流・鉄の役割等を生き生きと



小説に仕上げている。

朝鮮とのかかわりは人・文化・鉄のみならず 言葉・文字に至るまで想像を広げればいくらでも広がって行く。万葉集も古来朝鮮のことばとして解釈すると非常に理解しやすいとも聞く。

史実とはかけ離れているかも知れないが『たたら』を key word に時代をみると古代のみならず、実にスケールの大きな口マンを秘めている。今は山奥の奥の奥の谷あいのどん尽きにあるなにもない『たたら』遺跡に立ってその時代時代について色々想像をめぐらすのも楽しい。

それは何も古代に限らない。

1999. 5 .2.夜 神戸自宅にて 中西睦夫

表 古代日本と中国・朝鮮の交流と鉄の役割

奥出雲横田町 ホームページ資料より)

西 暦	和 暦	時 代	内 容
B C 600		縄 文	インドやエジプトで鉄器文化隆盛
B C 500		弥 生	中国で鉄器文化隆盛
B C 27		弥 生	天日槍命 鉄器類を天界に献上する (日本書紀)
57	建武中元 2		国使節が後漢に行き金印を授かる
239	景初 3		卑弥呼が魏に朝貢し「親魏倭奴国王」 の称号を授かる
252			済の使節が鉄器財宝類を大和朝廷に献上する
324		大和・古墳	高麗より鉄楯・鉄的が大和朝廷に献上される
538			仏教伝来
593			聖徳太子摂政になる
645	大化 1 年	飛 鳥	大化の改新
670	天智 9 年		水碓により鉄を冶す
687	持統 1 年		新羅より大和朝廷に金・銀・鉄が献上される。
659	斎明 5 年		出雲大社造営さる
701	大宝 1 年	奈 良	大宝律令制定この頃、備後八郡の調(税金) として「麻布・鋤・鉄」が収められている
733	天平 5 年		出雲国風土記が撰せられる この頃、既に奥出雲仁多郡に製鉄あり
794	延暦 13 年	平 安	恒武天皇、都を平安京に移す以後明治維新 まで都となる
800 頃			この頃、刀剣鍛冶技術が確立。名刀が多く 造られる。 中国地方の租税(調)は鉄・鋤が中心となる

佐古和枝氏 「海を渡ってきた人々」より

渡来人もたらした鉄

絵で見る考古学



鉄器の伝来と渡来人

日本列島に稲作の文化がもたらされてしばらくたったころ、青銅器と鉄器がほとんど同時に日本に入ってきたと思われます。鉄よりやわらかい青銅器は、細かな模様や形を鑄出した祭の道具になりましたが、銅よりも硬鉄器は、実際に切ったり削ったりする道具として用いられました。

日本の弥生時代と同じころ、朝鮮半島の南部の伽耶地方では鉄器の文化が栄え、日本列島にも鉄がたくさんもたらされたようです。

でも錆びたとき銅よりも残りにくい鉄は、発掘調査をしてもなかなか見つかりません。

地中で腐ってしまいやすいというだけでなく、実際に使う道具として利用価値が高かったので、何度も砥石で研ぎ直して、使いづらいほど小さくなるまで使ったために残りにくいのかもしれません

参考資料 朝鮮 三国時代 伽耶の鉄

鉄の古代王国 伽耶国の精巧な鉄製品【5世紀】

日本等との交易に用いられた鉄てい



鉄製の甲冑



鉄製甲冑【5世紀】

鉄製の武具と馬飾り



よみがえるる古代王国 『伽耶文化展』より
於 京都国立博物館 1992.8.28.

by M.Nakanishi 1999.5.4. 第1版

たたら吹き製鉄



日本書紀伝承による 1～2 世紀頃の日本

5. 『ヤマタノオロチを退治したスサノオノミコト』

susano1print.htm 1999.5.3.



1～2 世紀の日本は統一の前夜 多くの国に分かれ戦乱が続いていた。
中国・朝鮮半島においても戦乱が続き百済・伽耶・新羅等の国々が覇権を争い、
それらの戦乱をのがれ、朝鮮海峡を渡り日本へ来る渡来人集団も少なくなかった。

1999.5.3. M.Nakanishi 記

日本書紀・後漢書 倭伝 の伝承記述

スサノウノミコトが舞い降りたという鳥上の峯 (船通山)



「日本書紀」の伝承

「一書に口はく、素囊鳴尊、その子五十猛神を帥みて、新羅国に降到りまして、曾戸茂梨の處に居します。すなわち興言して日はく、「この地は吾居らまく欲せじ」とのたまひて、遂に埴土を以て舟に作りて、乗りて東に渡りて、出雲国の簸川上に所在る鳥上の峯に到る」

ある書にいわく、
スサノオの尊は、その子供のイタケルの神を連れてソシモリというところに住んだ。
しかし、スサノオの尊は、「わたしはこの地には居たくないと思う」とおっしゃって埴土で舟を作り、それに乗って東に渡り、出雲の国斐伊川の川上にある鳥上の峯に至った。

『日本書紀』よりー

「後漢書」倭伝の記述

「桓・靈の間、倭国大いに乱れ、更々相攻伐し、歴年主なし」
後漢の桓帝・靈帝の在位の期間、倭国は大いに乱れて
互いに攻め合い何年もの間主がなかった。
『後漢書 倭伝』より

奥出雲国 簸川〔斐伊川〕の流れ と ヤマトノオロチ

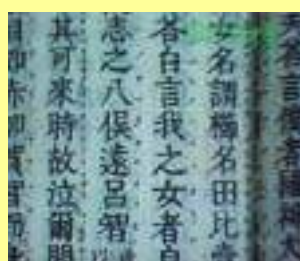


『八俣の大蛇』は蛇行する『斐伊川』ともこの川の上流域で行われた『たたら』衆および『たたら炉』から流れ出る『溶銑』の象徴とも言われる。

また 船通山のふもと鳥上では、今も技術伝承を兼ねた『たたら吹き』製鉄が行われ、刀剣の材料として、得られた『玉鋼』が全国の刀匠たちに配られている。(日刀保たたら)

やまたの大蛇退治と草薙の剣

日本書紀の伝承



「期に至りて大蛇あり。頭尾各八岐あり。眼は赤酸醬のごとし。松柏、背上に生ひて、八丘八谷の蔓延れり。酒を得るに及至りて、頭を各一の槽におとし入れて飲む。酔ひて睡る。

時に素婁鳴尊、すなわち所帯かせる十握剣を抜きて、寸にその蛇を斬る。尾に至りて剣の刃少しき欠けぬ。故、その尾を割裂きて視せば、中に一の剣あり。所謂草薙剣なり」

その時刻になって、ヤマトノオロチがやって来た。オロチの頭と尾はそれぞれ八俣に分かれており、眼は赤ほうずきのようにであった。背中には松や柏がぴっしりと生え、多くの丘や谷にまで広がっていた。酒を見つけると、頭をそれぞれ八つの桶に突っ込んで飲み、酔って眠ってしまった。

そのとき、スサノオの尊は、腰にさしていた十握の剣を抜いてオロチをズタズタに斬り殺した。

オロチの尾を斬ったとき、剣の刃が少し欠けたため、その尾を裂いて見てみると、中に一振りの剣があった。これが草薙の剣である。

『日本書紀』より

6. 出雲と朝鮮・新羅との関係

・ 日本誕生とたたら 歴史雑感 -

susaprint.htm

新羅の前身である弁・辰韓にふれた「魏志東夷伝」に「国から鉄が出、倭などみな随ってこれを取る」という記述がある。

この事は古代朝鮮に製鉄技術があり、それを日本の前身である倭からも取りに行くなどの交流があったことを示している。

また、その後の日本誕生にかかわる出雲スサノオ伝説とも絡み、非常に興味深い。

そのほか新羅王の冠の飾りに出雲が主生産地としてよく知られていた勾玉が使用されていることも興味深い。

出雲スサノオ伝説

当時 朝鮮半島では部族・民族間の戦い繰広げられ、難を逃れた多くの人たちが渡来人として日本にやってきた。

スサノオノミコトもその一人で新羅系の人たちと共に日本に逃れ、出雲に来て、すでにやってきて、農耕の民と争っていた先住のたたら民を討ち、国を治め出雲の王となった。その後、百済系の人たちの大和朝廷に国を譲った。

スサノオノミコトが鉄を目指して朝鮮半島 当時の新羅から日本にやって来たともいわれている。

出雲人の祖先は一体どこから来たのであろうか？

出雲は新羅から船を迎日湾に浮かべると海流によってたどり着くことの出来る場所である。

当時から大勢の移民が出雲に流れ着いたか、意図的に渡来していたと考えられる。

一方出雲と対峙していた大和朝廷は百済系と言われており、「記紀」等の記述から、出雲を新羅系と認識していたと考えられている。出雲では砂鉄が取れ、縄文時代の中期頃からすでに素朴な鉄生産が行われていたという記述もある。倭から弁・辰韓に鉄を取りに行った人々の情報の中に出雲の鉄のことが含まれていたとしてもあながち妄想ではなからう。



(慶州：天馬塚にある天馬図)
崇高な文化をこれ一枚で感じることができる



よみがえる古代鉄の王国
伽耶王国展より 1992.8.9.

「日本人のルーツと Iron Road」の接点を求めて

『弥生人の源流を探る -西から東へ-』

【完】

3.

岡山県 富村 鍛冶屋谷 たたら遺跡

1999. 3. 12. 訪問 tmsn.htm



1. 富村鍛冶屋谷 たたら遺跡
2. 『初花 - ほとばしるたたら溶鉄の造形 - 』

1. 富村 鍛冶屋谷 たたら遺跡

岡山県の山奥に備前・吉備のたたら遺跡を尋ねた。吉井川沿いは古くから砂鉄の出るところ。

吉井川の源流・鳥取県と岡山県の県境の富村に鍛冶屋谷たたら遺跡を訪ねた。

津山から県境に向かって車で約一時間。途中には昔鏡作りの渡来人がいたと言う鏡部町をとおり、吉井川沿いを奥津温泉に抜ける街道を進み、山へ向かって細い一本道を進む。山間の道のあちこちでフキノトウが芽を出す暖かい3月の日でしたが山又山、途中からは残雪の残る峠道を分け入った人里端なれた山の中、富村 鍛冶屋谷のたたら遺跡は雪の中にひっそりと眠っていました。



岡山県/鳥取県の県境近く 山また山の中 富村 鍛冶屋谷 たたら遺跡

どこもそうであるように、この遺跡も山又山の山奥の村のそのどんつきの山の斜面の林の中に大きなたたら製鉄の痕跡を示していた。

富村は古代よりたたら製鉄が行われた場所といわれるが、この遺跡は津山藩営大倉山鉄山のひとつで江戸時代から明治の半ばまで製鉄の行われた遺跡と言う。

吉井川河口近くには鉄さびの深いこげ茶の味わいを持つ備前焼の里や備前長船 日本古来の刀鍛冶の

郷『長船』などがあり、そして古代吉備王国、源流にはたたら山・鏡部の郷とこの流域が古来より栄え、その原動力が鉄との深いつながりにあったに違いない。

北に出雲の王国 東にたたら製鉄伝来の播磨の国千草 国産み神話の淡路島そして日本の中心大和。

『もののけ姫』の鉄山もこんなところか・・・と。

明日は娘のいる米子へ行って、それからヤマタノオロチ伝説の奥出雲 船通山・金屋子神社を訪ねる予定。

1999.3.12. 記

***** 富村 たたら展示館 *****



***** 富村 鍛冶屋谷 たたら遺跡 *****



4.

7世紀 畿内王権の蝦夷征伐の兵器庫

「行方製鉄」遺跡を訪ねる

福島県原町市 金沢製鉄遺跡

1999.11.13. hrmci.htm by Mutsuo Nakanishi



- 4.1. 7世紀 畿内王権の蝦夷征伐の兵器庫「行方製鉄」遺跡を訪ねる
- 4.2. ヒタカミ「日高見(北上)」の鬼 蝦夷(エミシ)の雄アテルイ
- 4.3. 8世紀 蝦夷と戦った畿内王権の前線基地「多賀城遺跡」

4.1. 7世紀 畿内王権の蝦夷征伐の兵器庫 「行方製鉄」遺跡を訪ねる

福島県 原町 金沢製鉄遺跡



朝日新聞 「日本の原像」の記事 福島県原町市金沢製鉄遺跡とその上に建つ発電所

今日は 久しぶりに家内と二人 昼の常磐線 快晴の空に映える太平洋の海を眺めました。 朝日新聞大阪版夕刊に「日本の現像 鉄器登場」が連載され、福島県原町市に「日本誕生」にかかわった大規模な製鉄遺跡の有った事を知り、日立にいる姉を訪ねがてら家内と二人で出掛けた。

東京から常磐線の特急で約4時間。日立から太平洋を眺めながら、勿来・常磐を過ぎて福島県にはいり、山間から東に太平洋 西に阿武隈山地を望む盆地にはいる。

「相馬馬追い祭り」で有名な相馬盆地の中心に原町市がある。

この原町市の北の外れ相馬市に隣接した金沢地区の太平洋に面した丘陵から、東日本最大の製鉄遺跡群が出土した。

7世紀後半の奈良時代 日本統一へ向けて、坂上田村麻呂ほか東北征伐が行われたが、その兵器製造所

として武器製造の拠点として 日本統一に重要な役割を果たした「陸奥の国 真吹郷 行方の製鉄」である。

遺跡は東北電力の原町発電所の中にあり、連絡もとらずふらっと出掛けた為残念ながら中に入れず。発電所の建っている外から遺跡群のある丘の周辺を歩き眺めてきました。

発電所の建設により、海岸周辺は良く整備された美しい静かな公園となっていた。太平洋とはるか遠くをゆく船をまた日の出を見るには絶好のポイント。太平洋に面してこの遺跡の上に建つ、東北電力原町発電所とそれに隣接して太平洋の荒波に洗われる海岸北泉海浜公園 砂鉄の海岸で遊んで帰りました。

後日東北電力 原町発電所の石田純一氏より、丁寧なお手紙とともにこの製鉄遺跡発掘の記録資料やビデオまた 鈴木啓氏「宇多・行方の製鉄をめぐって」等多くの貴重な資料を送っていただいた。

1. 金沢製鉄遺跡 東北電力 原町発電所 資料より
2. 金沢製鉄遺跡の特徴
3. 砂鉄の舞う浜 北泉浜 福島県原町市北泉海浜公園
4. 北泉浜で 浜砂鉄が描く模様
5. 「iron Road 鉄の道」

朝日新聞 「日本の原像」より

日本の原像
第9期 鉄器奇場

東北に王権の兵器製造所

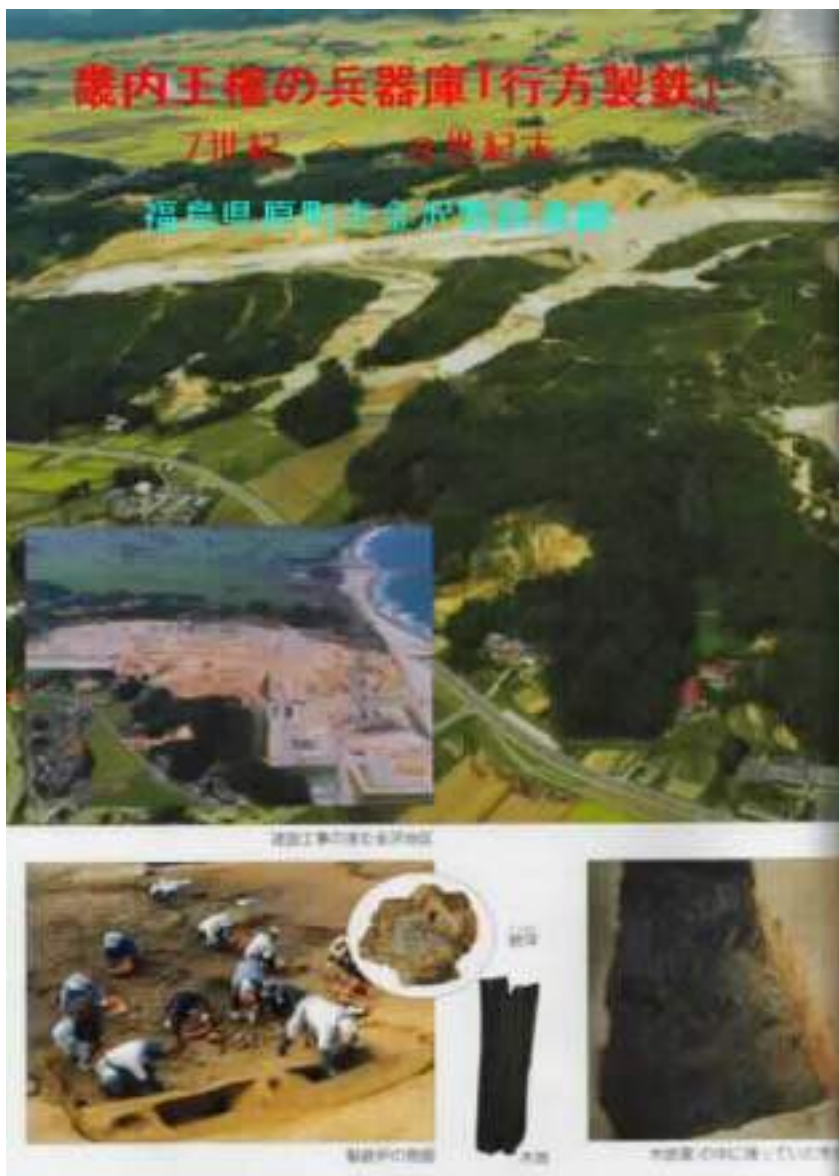
「日本の原像」が明らかにした古墳時代後期の、東北地方の兵器製造所。この遺跡は、東北地方の中心地である山形県に位置し、大規模な鉄器製造施設であったことが明らかになった。この遺跡からは、大量の鉄器が出土し、その中には、王権の兵器製造に用いられたものと推定されるものも含まれている。この発見は、東北地方の鉄器製造の中心地であったことが明らかになり、東北地方の歴史に重要な役割を果たしたことが明らかになった。

この遺跡は、東北地方の中心地である山形県に位置し、大規模な鉄器製造施設であったことが明らかになった。この遺跡からは、大量の鉄器が出土し、その中には、王権の兵器製造に用いられたものと推定されるものも含まれている。この発見は、東北地方の鉄器製造の中心地であったことが明らかになり、東北地方の歴史に重要な役割を果たしたことが明らかになった。

この遺跡は、東北地方の中心地である山形県に位置し、大規模な鉄器製造施設であったことが明らかになった。この遺跡からは、大量の鉄器が出土し、その中には、王権の兵器製造に用いられたものと推定されるものも含まれている。この発見は、東北地方の鉄器製造の中心地であったことが明らかになり、東北地方の歴史に重要な役割を果たしたことが明らかになった。

1. 金沢製鉄遺跡

東北電力 原町発電所 資料より



万葉集 14巻 3560首

「真金吹く丹生の真朱の色に出て
言はなくのみそ音が悲ふらくは」



8世紀蝦夷征伐と行方製鉄遺跡

「たたら」遺跡の多くが山深い奥地の谷あいにあるのに対し、この金沢地区製鉄遺跡群は海岸に面した丘陵にある。すぐそばに背後の阿武隈山地から流れ出て、太平洋の荒波に洗われ、堆積した浜砂鉄の宝庫 泉・北泉の浜がある。

この明るい丘陵の谷間に7世紀から8世紀末にかけ、大規模な製鉄炉や鍛冶炉・炭焼き炉など数々の製鉄鍛冶が営まれた。

当時 奈良時代 畿内王権が着々と日本を統一をめざし、その勢力を東北にまで拡大、蝦夷征伐を盛んに行っていた。

この行方製鉄はその「王権の兵器庫」として重要な役割を果たした。

坂上田村麻呂の蝦夷征伐により 蝦夷勢力が討ち果たされ、胆沢城(現在の一関市)が築かれ、東北が平定されると兵器の需要の低下とともにこの行方製鉄も衰退してゆく。

「真金吹く丹生の真朱の色に出て

言はなくのみそ吾が恋ふらくは」

この歌は原町市金沢の「真吹郷 行方製鉄」を歌ったものであると鈴木啓氏は述べている。
万葉集に読まれるほどの有名な大規模な製鉄所であった事がしのばれる。

「宇多・行方の製鉄をめぐって」より

2. 金沢製鉄遺跡の特徴

石田氏からいただいた資料によるこの遺跡の全盛期 たたら炉は縦型炉から箱型炉に進化し、踏み鞆を有していることに特徴があり、その踏み鞆のあとが完全な形で出土している。

この踏み鞆の採用により、製鉄量は大幅に増大したことは想像に難くない。

この踏み鞆を持つ箱型炉が全国へ波及して行き、時代が下るに従って天秤鞆を持つ大規模なたたら炉へと進化して生産量を大幅に伸ばしていた。

このように「たたら製鉄」や「鍛冶」として「鞆」は極めて重要で、後年これらの繁栄を祈願する祭りを「鞆まつり」と呼び、今も続いている。

江戸時代 紀伊国屋文左衛門が嵐について 江戸へ運んだみかんは江戸の鍛冶師たちの「鞆祭り」の供え物として必須のみかんであったと言われている。



踏み鞆と箱型炉の復元



出土した踏み鞆と箱型炉 8世紀

3. 砂鉄の舞う浜 北泉浜 福島県原町市北泉海浜公園



北泉浜で きらきら光る砂鉄



砂鉄の浜で 白砂が風に幾筋も舞う

発電所の正門のすぐ横は松林におおわれ、綺麗に整備された北泉海浜公園。海岸にはきっと砂鉄があるはずと砂鉄を探しに行きましたが 本当に印象的な美しい白浜で黒い細かな砂鉄が白砂に混じって 実に綺麗な紋様を描いていました。

見渡す限り太平洋の中 荒波にもまれて沢山の若者が大きな波にサーフィンを楽しんでいる一方 誰もいない砂浜では、波にもまれた細かい砂鉄が 美しい砂鉄の風紋を作り、その上を細かい白砂が風によっていく筋も 流れて、家内と二人風の中に立って見とれていました。

4. 北泉浜で 浜砂鉄が描く模様





風に舞う砂鉄が描く風紋

5. 「Iron Road 鉄の道」

7世紀から8世紀東北にあった蝦夷国・出羽国・津軽国 畿内王権の蝦夷地征伐で次々と畿内王権に組み入れられ、日本国が誕生した。

これらの国には 恐らく北のまほろば 三内丸山遺跡・亀が岡文化などに代表される縄文人やオホーツクの民の血が濃く流れていたに違いない。

これらの国と弥生人の血を色濃く持つ畿内王権とが会いそして日本国の完成へ。

戦いに使われた蝦夷の刀は日本刀の原型となった「蕨手刀」。それが原型となって刀は突く武器から切る武器へと変身し、戦いの主力武器へ。

この蝦夷と畿内大和政権との戦いの武器調達を担った鍛冶の主力が、この金沢の製鉄遺跡。

ここでも 「Iron Road・鉄の道」が歴史の重要な転換点の役割を演じ、出会いを演出している。

この日本誕生に役割を演じ、縄文と弥生人融合を演出した浜の砂鉄を紙にさっと包んでポケットに入れ、この浜を後にした。

私にとっては 空白だった鹿島・房総から三陸海岸の間の部分 阿武隈山地・陸奥のたたら遺跡との最初の出会いだった。

原町は相馬馬追いで有名な町であるが、日本誕生に関わった製鉄の重要な町でも有る。

真金吹く 陸奥の行方 福島県原町市金沢 真吹郷

「真金吹く丹生の真朱の色に出て 言はなくのみそ吾が恋ふらくは」

1999.11.13. 福島県原町市 北泉海岸・金沢地区製鉄遺跡にて

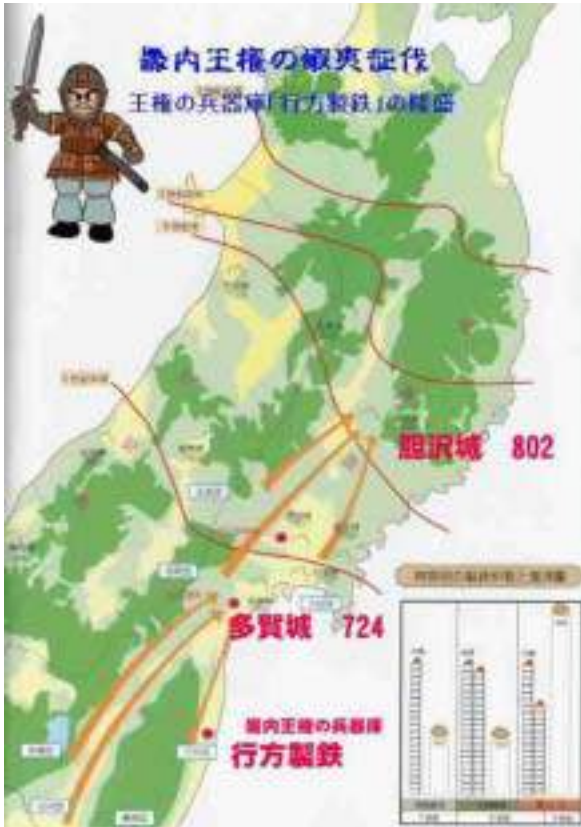
4.2. 日高見(北上)の鬼 「蝦夷(エミシ)の雄 アテルイ」

佐藤清忠氏著 「ヒタカミの鬼アテルイと田村麻呂」より抜粋

<http://yositsune.ichinoseki.ac.jp/SATOK/pr/ezo/oni.htm>

1999.11.27.採取

htkmi.htm by Mutsuo Nakanishi



東北電力 原町発電所発行「真金吹く陸奥の行方」より

「それ以前にも、紀古佐美(きのこさみ)率いる約5万朝廷軍をわずか千数百の兵で打ち破り、遁走を余儀なくしたこともあった蝦夷の雄 アテルイ 774年から38年間続いた蝦夷征伐戦争で、前沢・衣川付近でひと頃は約10万の田村麻呂率いる朝廷軍の侵入を迎えた。

日本を二分した畿内政権と蝦夷との戦いの戦場が日高見(北上)一関から始まった。

8世紀末の10万の大軍が、胆沢平野へとなだれこんできたのだが、胆沢の巨星、アテルイはひるまず、戦い大軍を翻弄した

しかし801年、初老の域に達したアテルイは、朝廷軍が現水沢市に造った胆沢城(後の鎮守府)を目の当たりにし、田村麻呂に最後まで残った500の兵を連れて降伏し、都に連れてこられた。

朝廷はこの天才指揮官らを田村麻呂必死の懇願に関わらず斬首してしまった。

みちのく民衆のこころ、怨念の歴史は、この時から始まった。

さまざまな伝説が生まれ、今日までも、奥浄瑠璃や祭の形で語り継がれてきた。

佐藤清忠氏 「ヒタカミの鬼-アテルイと田村麻呂」より抜粋

畿内政権が行方(現在の福島県原町市)に大規模な製鉄所を持ち大量の武器の製造を行っていたが、対抗する蝦夷国も日本刀の原型になった蕨手刀(わらびてとう)の量産技術をもっていた。憶測では、渤海など大陸との交易や出羽や津軽との交流により、採鉱、燃料調達、製鉄の技術を持っていたものと推定される。

目立った戦争経験がない蝦夷国が朝廷の十分の一以下の兵力で抵抗でき、民の心を結集できたのだろう。



畿内政権と戦った蝦夷国アテルイの武器 蕨手刀の分布

4.3. 8世紀 紀元724 蝦夷と戦った

畿内王権の前線基地 「多賀城遺跡」

2000.1.20. tgjyo.htm by M.Nakanishi

多賀城は仙台平野の東北端に位置し、海拔4mの低地から50mを越す丘陵地まで起伏に富んだ地域を占めている。

周囲は約900m四方の不整形に土塀や柵木列がめぐり、その中央に約100m四方の政庁がある。その周辺には多くの役所や兵氏の住居などがある。

佐倉歴史民俗博物館にかざられたこの復元模型は780年の伊治公皆麻呂の乱で焼失後に復興された平安初期の姿を示している。



4. 7世紀 畿内王権の蝦夷征伐の兵器庫 「行方製鉄」遺跡を訪ねる

【完】

5.

山陰 古代鉄の王国 - 伯耆の国 -

『鉄の伝来をもたらした古代 山陰 鉄の王国の出現』

・日本誕生に役割を演じた古代山陰の iron road -

sanin.htm by M.Nakanishi 2000, April

- 5.1. 『鉄の伝来をもたらした古代 山陰鉄の王国の出現』
・日本誕生に役割を演じた古代山陰の iron road -
- 5.2. 『古代 鉄の集散地 妻木晩田弥生遺跡』・鳥取県淀江町・大山・
- 5.3. 『溝口の鬼伝説』と伯耆の国の製鉄地帯

山陰 鉄の王国 - 伯耆の国・ Iron Road

5.1. 『鉄の伝来をもたらした古代 山陰鉄の王国の出現』

・日本誕生に役割を演じた古代山陰の iron road -



1. 出雲青銅器文化の終焉と鉄の王国の出現



365本の銅剣 16本の銅矛 6個の銅鐙が
各々まとめて埋められていた
出雲荒神谷遺跡



まとめて出土した
銅剣 365本



出土した16本の銅矛
と6個の銅鐙

弥生後期一世紀ごろ、出雲には銅剣・銅鐙に代表される青銅文化圏が開く巨大な山陰・出雲王国があった。そして、出雲荒神谷で、大量にまとめてうずめられた銅剣が発見されたのを最後に銅剣をもった青銅器の文化権が出雲から忽然として消えた。

その後、この地方には韓国に多くの例がある突出角を有する大きな方墳が出現する。

またこの四隅突出方墳墓には多くの鉄製品が副葬されている。

この文化の交代が起こる同時代の遺跡からは 大量の石のつぶて・鏃や石剣などの武器が発見されており、この地域で弥生後期一世紀頃 大きな戦いがあったと考えられる。

これら 出雲の青銅器文化や鉄の伝来を告げる四隅突出方墳墓に代表される山陰・出雲王国の形成には日本海を大陸から渡ってきた渡来人が深く関わっていたことは疑う余地がない。

出雲神話に見られる『やまたの大蛇』伝説もこれら渡来人を含めた新住民と先住民の争いの構図が読み取れる。

特に一世紀後半頃から 3 世紀にかけて、強力な鉄製の武器・農耕具を持った渡来人が大陸・朝鮮半島から日本海沿岸の各地に次々に現れ、先住の民と融合しながら、山陰から北陸地方(当時越の国)にかけての日本海沿岸に鉄と稲作など農耕を持つ強力な王国を作った。

2. 奥出雲 ヤマタの大蛇伝説と船通山 出雲鉄の王国の出現

出雲仲仙寺古墳 四隅突出墳丘墓



3. 伯耆の国 鉄の王国 妻木晩田弥生遺跡・淀江・溝口

伯耆の国 優美な姿をみせる大山を背景に島根半島・弓ヶ浜を望む日本海沿岸淀江の地にも王国が出現した。

日本海を望む小高い丘に大陸との密接な関係を示す多数の四隅突出墳墓群ならびに多数の鉄製品が発見される妻木晩田遺跡とそれに続く古墳遺跡群である。

時代がくだり日本が誕生した白鳳時代には淀江廃寺遺跡が発見されている。



まさに 畿内・大和に次ぐ、強大な文化圏があったことがわかる。 鉄の日本伝来と深くかかわった伯耆の王国である。

また、伯耆の国の『たたら製鉄』の源流となり、遠く背後にそびえる船通山(鳥上山 ヤマトタケルの伝説の地)から流れ出た日野川が大山の山麓を縫って流れ下り、この淀江の地で日本海に注いでいる。伯耆の国の母なる川にふさわしい大河である。

この日野川沿い 大山の西山麓 伯耆溝口は古代の一大製鉄基地であったことがわかってきた。この伯耆溝口には、古代たたら製鉄 製鉄技術を持った渡来人と大きな関わりを持つ「鬼伝説」が伝えられており、同時に鉄滓が出土する古代製鉄群が発見されている。

渡来人と強い関わりのある四隅突出方墳墓群・大量の鉄製品の出土そして一大製鉄基地の存在を示す製鉄遺跡群。これらは古代早くから伯耆の国に製鉄の技術が伝来し、それを基礎にした「鉄の一大王国」があったことを示している。娘が嫁いで 米子に住んだのを機会に幾度となく、この淀江の地を訪ね、鉄を日本にもたらした渡来人 古代伯耆の王国に思いを馳せた。

2000.3.25. by M.Nakanishi

参考 鉄器登場 朝日新聞 夕刊

日本の原像

第9部 鉄器登場

日本海沿岸に続く「道」

相模湾の海流が流れてきた。伯耆の国に伝来した鉄器は、大山の山麓に注ぐ日野川沿いに、古代の一大製鉄基地を築いた。伯耆の国に伝来した鉄器は、大山の山麓に注ぐ日野川沿いに、古代の一大製鉄基地を築いた。

伯耆の国に伝来した鉄器は、大山の山麓に注ぐ日野川沿いに、古代の一大製鉄基地を築いた。

日本海沿岸に続く「道」。伯耆の国に伝来した鉄器は、大山の山麓に注ぐ日野川沿いに、古代の一大製鉄基地を築いた。

伯耆の国に伝来した鉄器は、大山の山麓に注ぐ日野川沿いに、古代の一大製鉄基地を築いた。

5.2. 「古代 鉄の集散地 妻木晩田弥生遺跡」

・鳥取県淀江町・大山町・

mkbnda1print.htm by M.Nakanishi April,2000



妻木晩田遺跡は鳥取県大山町と淀江町にまたがる丘陵にある弥生時代後期(いまから2000年～1700年ほど)を中心とする大集落遺跡群です。

16ヘクタールの調査区で、800軒をこえる建物からなる大規模な村と、山陰地方独特の四隅突出墓 21基もみつかりました。



四隅突出墳丘墓



遺跡から弓ヶ浜



遺跡から日本海

この地域は、大山の北なだらかな斜面の先端部、日本海に面する淀江町の東の丘陵地帯にあり前面には古代に淀江の潟湖があった淀江平野、さらにその向こうには広大な日本海が広がる大陸との交通の盛んであったところで、周囲の山には古墳が多く築かれ、またその東部には壁画の断片が出土した淀江廃寺・真名井の泉と呼ばれる白鳳時代から絶えることのない大山の湧水がある白鳳の里があり、古代から開けた王城の地の一つです。

妻木晩田遺跡 鳥取県淀江町・大山町



妻木晩田遺跡は洞ノ原遺跡、妻木山遺跡、妻木新山遺跡、仙谷墳墓群、松尾頭遺跡、松尾城遺跡、小真石清水遺跡という7つの遺跡の総称で、遺跡の範囲は調査された部分だけで約16ヘクタール、吉野ヶ

里遺跡のほぼ4倍の広大な遺跡です。

それぞれの遺跡は住居が密集する地域、倉庫の密集する地域、広場、祭殿や有力者の館のある特別な地域があります。判明しているだけで、竪穴住居358軒、掘立柱建物355棟があり、また四隅突出墳20基も見つかっています。



妻木晩田遺跡と 吉野ヶ里・池上遺跡の比較

これらの遺跡は丘陵一帯に分布し、それらがひとつずつ別個の役割を持っていたと見られ、それがひとつの王国ともいふべき集合体を形成している点で、従来の弥生遺跡観の見直しを迫る重要な遺跡です。いままで発掘された弥生の集落は、吉野ヶ里遺跡など従来の弥生遺跡では、環壕の外側つまり、集落のそとに重要な倉庫群が発見され、不思議に思われていましたが、この妻木晩田遺跡のあり方から見て、弥生の集落はもっともっと広大に広がっていた可能性が出てきました。

吉野ヶ里遺跡をはじめ池上曾根遺跡にしても、今想像されているより広大な規模の集落であった可能性があります。

妻木晩田遺跡は、弥生時代における日本海沿岸部の様相を知りうる遺跡であると同時に、わが国における弥生の集落観の見直しという問題を提起した重要な遺跡です。

またこの遺跡は今日まで一切破壊を免れてきて、約二千年前の弥生の原風景をすべて見ることのできる希有の遺跡でもあります。

妻木晩田遺跡 インターネット ホームページより

この遺跡の居住域からは、200点を超える鉄器が工具・農機具を中心に発掘され、日本海側では群を抜く多さです。

また 鋳造品も含まれ、直接・間接的に大陸から持ち込まれたものも多いと想像されており、この地域が鉄の集散地として 大陸や日本各地と強い交渉力を持つ一大拠点であったことがうかがえます。

「鉄と四隅突出墳丘墓」に代表される大陸からの渡来人と既に日本にいた人達が出合い、融合して王国を築いて行った「鉄伝来の道 Iron Road」が見て取れる重要な遺跡でもあります。

(「発掘された日本列島'99」より 千葉県松戸博物館 2000.1.21.)



古代山陰の製鉄遺跡群



妻木晩田遺跡出土鉄器製品

私をはじめ妻木晩田遺跡のある丘陵に登ったのは 2000年1月の冬の午後。あたり一面銀世界。妻木晩田遺跡も遠望する淀江平野も白銀の中にすべて埋もれていました。

周囲の森の中に囲まれて細い白い道で点々とつながる真っ白な丘と雪から頭を出している切株とが妻木晩田遺跡であることを示していました。

丘から丘へ本当に広大な村があった事が実感されます。

環濠や一つの丘の上に独立してある小さな村との弥生集落からはほど遠い広大な集落群である。

高い丘の上に立つと眼下の雪の平原の向こうに島根半島の山々と真っ青な日本海が広がり、大陸へとつながる道が見て取れました。季節は違いますが、丁度青森「山内丸山遺跡」もこんな風でした。



森に囲まれ、大山の姿は見えませんが、大山に向かって南へこの丘を抜けて行くと大山の山裾の谷間には点々と続く古代伯耆の国の大製鉄地帯「伯耆溝口」。

古代鉄の渡来人もこの森の中を抜け、大山の山麓へ散っていったに違いない。また 大山山麓の各地で精錬された鉄がこの地に運び込まれ、日本各地に運ばれて行ったであろう。

はるか西の大陸・幾多の弥生人が日本海を向いて整然と眠る土井が浜 ・出雲・奥出雲の国東をみると丹後・越の国 そして この弥生よりもっと古い縄文の王国「津軽 山内丸山遺跡」南には 大山の山合を縫って 吉備の国 そして畿内へと... 。

根拠はないが 鉄と共に古代人が歩いたと想像すると楽しくなる。

真っ青の空の下 誰もいない白銀の遺跡で一人足跡をつけ、楽しんで帰りました。

冬の妻木晩田遺跡 2000.1.29.

mkbnda2print.htm by M.Nakanishi



米子から 雄大な雪の大山を眺めながら、higy way を東へ約 10 分 日野川を渡ると雪原がひろがる淀江平野。 大山・溝口・津山へ曲がる米子道をやり過ぎすと雪原の向こう大山の山裾に帯のように黒くつながっている丘陵とその前に大きな櫓が見えてくる。 白鳳の里と古代の古墳群のある丘陵地帯である。この丘陵のひとつが妻木晩田遺跡であり、その西には淀江廃寺のあった丘が連なっている。この丘陵へばりつくように、古代から栄えた妻木・淀江・真名井の里がつながっている。



淀江のインターで下り、南へこの丘陵に向かって突き進む。淀江高校の横の山合の道を丘の中に突き進むと妻木晩田古墳の丘陵である。 ほどなく妻木晩田遺跡への上り口を上がると森に囲まれて幾つもの平坦な丘が雪にうもれている。丘を取り囲む樹木の緑と雪原 静かな「妻木晩田遺跡」である。



小高い山之上に「弥生の森」の看板が見える。誰もいない雪原の雪の上に足跡をつけながら遺跡の中心部に入っていった。小高い丘へ登って行くとそこからは淀江平野の向こうに日本海が広がっていた。

『日本誕生』の前夜 鉄とともに大陸からやってきた渡来人がつくったと想像する弥生の大集落。鉄の集散の一大拠点として、多くの人がこの丘にやって来たに違いない。

『山陰・伯耆の古代鉄の王国・妻木晩田遺跡』は雄大な伯耆富士を背に日本海と弓ヶ浜をみおろす小高い弥生の森の雪にひっそりとうずもれていました。



雪に埋まる妻木晩田遺跡

山陰 古代鉄の王国 - 伯耆の国 -

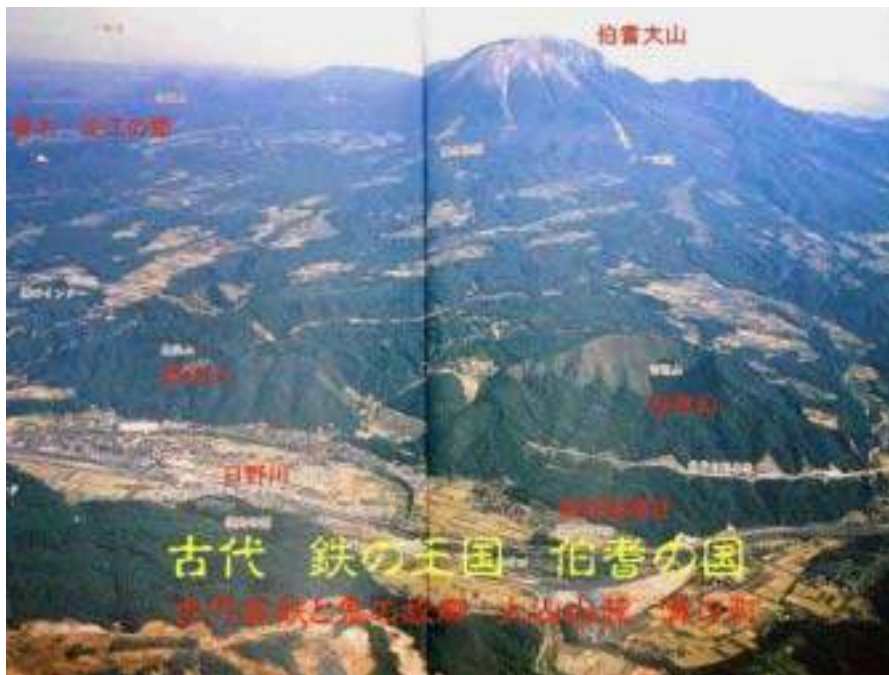
5.3. 溝口 鬼伝説と伯耆の国の製鉄地帯

・日本最古の鬼伝説から・

2000.3.10.

孝霊天皇 鬼伝説 伯耆 溝口

mzgciprint.htm by M.Nakanishi



大山山麓の「伯耆 溝口」は古代伯耆の国の一大製鉄地帯。

中国山地の山奥から流れ出て大山の山麓を縫い日本海へ流れ出る日野川。この日野川が大山の山裾から平野部に出る山合が伯耆溝口。この日野川沿いの山中は砂鉄の宝庫。

この溝口の地では古代から、この川や山中の砂鉄と山中の樹木を焼いて作った木炭を使って、製鉄が広く行われてきた。

この山間の溝口を抜けるとそこは大山をバックに日本海まで、淀江・妻木の平野・丘陵が大きく広がっている。この淀江の地は古代より、大陸から多くの渡来人がやって来て栄えた王城の地。

大山の山裾の丘陵地帯の前に広がるこの平野部は 古代広々とした湖が日本海に通じていたという。この大山山麓の丘陵地帯に古代からの数々の遺跡・古墳が眠っている。かつては大陸から数多くの人達が淀江の湖を通してここに新天地を求めてやって来た。

稲作・鉄の技術も大陸の多くの文化とともにこれらの人たちと一緒にやって来た。

妻木晩田弥生遺跡そしてその後の白鳳時代に続く数々の古墳群・淀江廃寺遺跡みんなこの丘陵の上にある。

白鳳の郷と呼ばれる古墳群のひろがる丘陵の上に立ったのは 梅雨の6月の朝。

眼前には緑一色の田畑がひろがり、その向こうには真っ青の日本海・島根半島の山々が霧雨に煙っていた。丘の下の里には きれいな湧き水が音を立てて流れ、水車がまわる水の里。

王城の地は今本当に静かな日本の原風景。

孝霊天皇 鬼伝説 伯耆 溝口 ・楽楽福神社 古文書より・

伯耆の国日野郡溝口村の鬼住山に悪い鬼 が沢山住み着いていました。

この鬼達は近くの村々に出ては人をさらったり、金や宝物・食べ物を奪って人々を苦しめていました。これを聞かれた孝霊天皇は、みずから軍勢を率いて鬼住山の南のこれより少し高い笹苞山(さすとさん)に登り、鬼住山の鬼達をことごとく退治されました。

天皇が山に登り、布陣された時、人々は笹巻の団子を献上し、士気が大いに上がったといいます。

それで、この山を笹苞山(さすとさん)と呼ぶようになりました。

鬼をおびき出す為、山麓の赤坂というところに団子を三つ並べたところ、弟の鬼『乙牛蟹』が出てきて討たれました。

兄の『大牛蟹』は大いに怒り、手下を束ね一層暴れ、容易に退治することが出来ません。

ある晩 眠っている天皇に「笹の葉を刈って山のように積上げなさい。そうすると風が吹いてそれらを舞い上げ、鬼を遅い退治出来るでしょう」とのお告げがあった。これを聞いた天皇がその通りにすると三日目の朝、猛烈な南風が吹き、積上げた笹を「あれよあれよ」と鬼の住処の方へ、巻き上げて行きました。天皇はここぞとばかり、全軍を叱咤して、舞いあがった笹の後を追ひ、鬼退治に向かいました。

笹の葉に巻きつかれ、また枯葉が燃え、鬼達はなすすべも無く、麓に逃げて降参しました。

人々は大変喜んで 麓宮原の地に笹で社殿を吹き天皇を祭りました。

これが楽楽福(ささふく)神社のいわれです。

淀江平野と白鳳の郷



鬼伝説はこの製鉄技術と関わった渡来人と深く関わっている事が日本各地の多くの事例で良く知られている。この溝口の『鬼伝説』も同様に古代製鉄 製鉄技術をもたらした渡来人と深く関わっている。古代の伯耆国の大製鉄地帯「日野川・溝口」につながる淀江の地は古代日本の大陸への前線基地。そこには大陸との密接な交流から生まれた縄文・弥生の妻木晩田遺跡・白鳳の淀江廃寺と続く独自王国勢力と大和朝廷の勢力との何らかの交渉があったに違いなく、この『鬼伝説』がそれを伝えているのかも知れない。

淀江の湖を通過してやって来た渡来人が日野川の砂鉄と出会い自分達の持っている製鉄技法を発展させ

て行った。鉄と炭を求めて 大山の山中に入っていったに違いない。

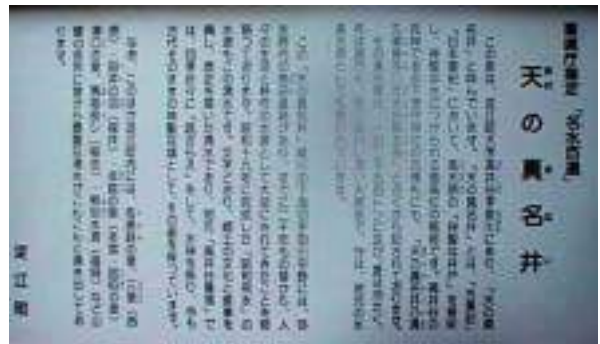
楽楽福(ささふく)の「ささ」は「砂鉄」を「福」は「吹く」と関係があるといわれ、「たたら」製鉄との関係つまり、鉄の技術を持ってやって来た渡来人と先に定住した農耕の民との争いの様相が色濃く見えます。しかし、稲作の鉄の鍬なくしては発展しなかったであろう。このような産鉄の民が日本の到る所で「鬼」としてえがかれている。

時の権力者は鉄を得て、さらに巨大になって行ったに違いないのにそれを支えた産鉄の民が「鬼」とはいかにも理不尽に思う。

もっとも、やはり古代津軽の製鉄地帯であった岩木山山麓の村には、鬼が村の開墾の水路を一夜にして作ってくれたとして 節分には「福は内鬼は内」と祝う村もある。

また 伝説の大男 映画「もののけ姫」に登場した「ダイダラボッチ」も「たたら製鉄」と関連づける説もあり、この時には「ダイダラボッチ」は村人を助けるユーモラスな大男と描かれることが多い。

淀江廃寺 & 真名井の泉



また、この溝口の鬼伝説には異説があって、この鬼退治を姫を母とする孝霊天皇の皇子『鷲王』であるとも言われている。この妻木の地が大陸からやって来た鉄の渡来人と深く関係づけられる妻木晩田弥生集落遺跡の地であることを考え合わせると、この鬼退治伝説の主人公 孝霊天皇やその皇子『鷲王』が大陸からの渡来系の人達であるとの説も一層真実味を帯びてくる。

妻木晩田遺跡や古代の古墳が広がる白鳳の郷の丘に立って、日野川沿いに広がる淀江平野から日本海を眺めると日本古代の想像がどこまでも広がって行く。

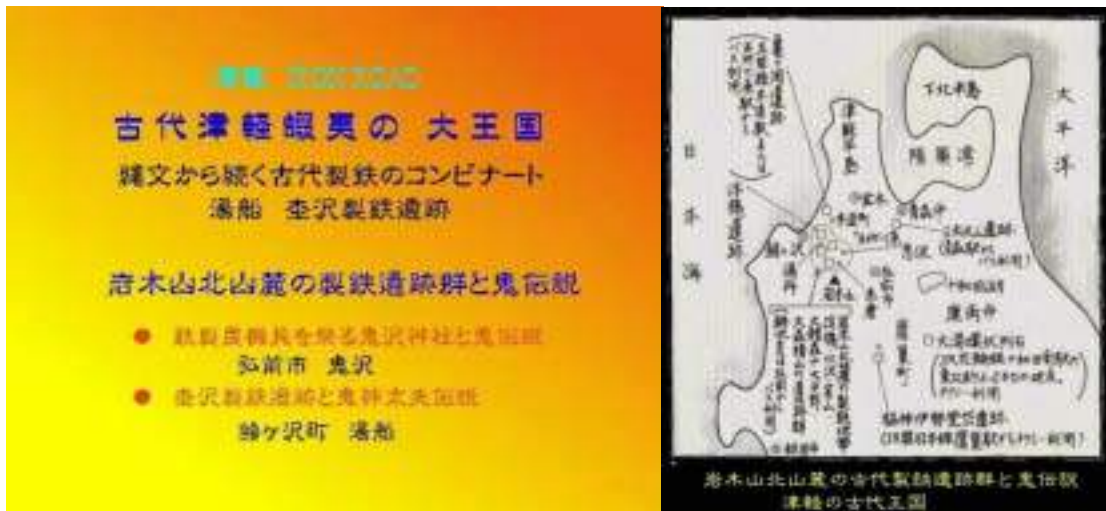
鉄の産出地帯「溝口」の古代鬼伝説が、古代この地で栄えた「伯耆 鉄の王国」を支え、日本誕生に大きな影響を与えた事を伝えている。

山陰 古代鉄の王国 - 伯耆の国 -
『鉄の伝来をもたらした古代 山陰 鉄の王国の出現』

〔完〕

岩木山北山麓の製鉄遺跡群と鬼伝説

tgruoni.htm by M.Nakanishi 2000.3.5.



- 6.1. 鬼伝説と古代製鉄
- 6.2. 岩木山北麓 鬼沢 「鬼神社」と「鬼伝説」
- 6.3. 空沢製鉄遺跡群 鱒ヶ沢町湯船 と「鬼伝説」
- 6.4. 中世の交易都市 安東氏の拠点 十三湊



【岩木山から津軽半島から北海道を望む】 【北海道側から十三湖・七里長浜・岩木山を望む】

岩木山の頂上から 北を見ると眼下に、点々池・湿地が広がる広大な津軽平野「北のまほろば津軽の王国」が望める。北山麓には鬼伝説をもつ古代一大製鉄基地 鱒ヶ沢から弘前の幾多の沢筋がひろがっている。その向こうには、広々と開けた平野部が広がり、数々の縄文遺跡がある森田村そして五所川原・弘前・青森の市街の東西のベルトが伸び、陸奥湾を望む青森のはずれには、縄文の巨大都市山内丸山縄文遺跡が見える。

その奥の津軽半島に目を転じると日本海にそってまっすぐに北に伸びた砂鉄の浜『七里長浜』が見える。その海岸の湿地帯・池塘群の丘には亀ヶ岡縄文文化と呼ばれる縄文遺跡がちらばり、その奥には中世安東氏の繁栄を支えた貿易港 十三湖・十三湊が見え、竜飛岬を隔てて北海道 かつてのオホーツクの王国の地が見える。

津軽へ初めて行って<もう 30 数年経つが、何時行っても新しい発見の有る津軽。

原色と太い線で描かれるあの躍動感あふれるねぶた絵とねぶたのリズム 津軽三味線の響き 恐山

のイタコ。そして、地吹雪までも観光資源としてしまう。古代からの津軽王国の歴史が今も続く活力のある地域である。

津軽へ初めて行って もう 30 数年経つが、何時行っても新しい発見の有る津軽。しかし、日本書紀によれば、この津軽の蝦夷と大和朝廷軍とは戦闘を交えたというよりも、和睦によって、大和朝廷の支配下にはいったものであると言われる。

独自の文化をもった勢力圏 津軽王国が弥生時代～中世までずっと独立性を保って存在してきたという。

弥生時代後半から 6,7 世紀にかけて、大陸・朝鮮半島からやって来た渡来人技術集団によって伝来した鉄器・製鉄技法が日本で活発に取り入れられ、製鉄も行われるようになり、それらを手に入れた各地の王国 文化圏が日本統一をめざして覇を競い、その中から大和朝廷・日本が誕生した。

そして日本の大半を統一し、東国毛野・常陸国まで進出してきた大和朝廷は 8～9 世紀初には、東北部蝦夷征伐に乗りだし、大量の鉄製武器が動員された。

既に紹介した福島県原町に存在する製鉄遺跡群はまさに大和朝廷蝦夷征伐の兵器庫として隆盛を極めた大製鉄遺跡である。また、畿内河内の古市台地の大製鉄遺跡群をはじめ、京都府丹後半島弥栄町の製鉄遺跡群 吉備・出雲・そして伯耆など中国山脈各地や九頭竜川流域の越の国など日本各地の製鉄遺跡群もこの時代隆盛のひとつのピークを迎える。

大陸からつながってきた『鉄の道・Iron Road』が日本誕生を演出した流れである。

話を津軽に戻すと『鉄の道・Iron Road』は古来早くから、日本海 海路 津軽にもつながっており、日本列島の北の端で大きな独自文化圏を築いてきた。ただ、日本・大和朝廷の敵方勢力圏から外れていた為、北海道と同様 未開の土地と切り捨てられていたにすぎない。

事実 岩木山北山麓が古代の大製鉄地帯であったことが その地帯に伝わる鬼伝説と多くの製鉄遺跡群によって判ってきている。



津軽 鬼の故郷 岩木山と岩木山神社

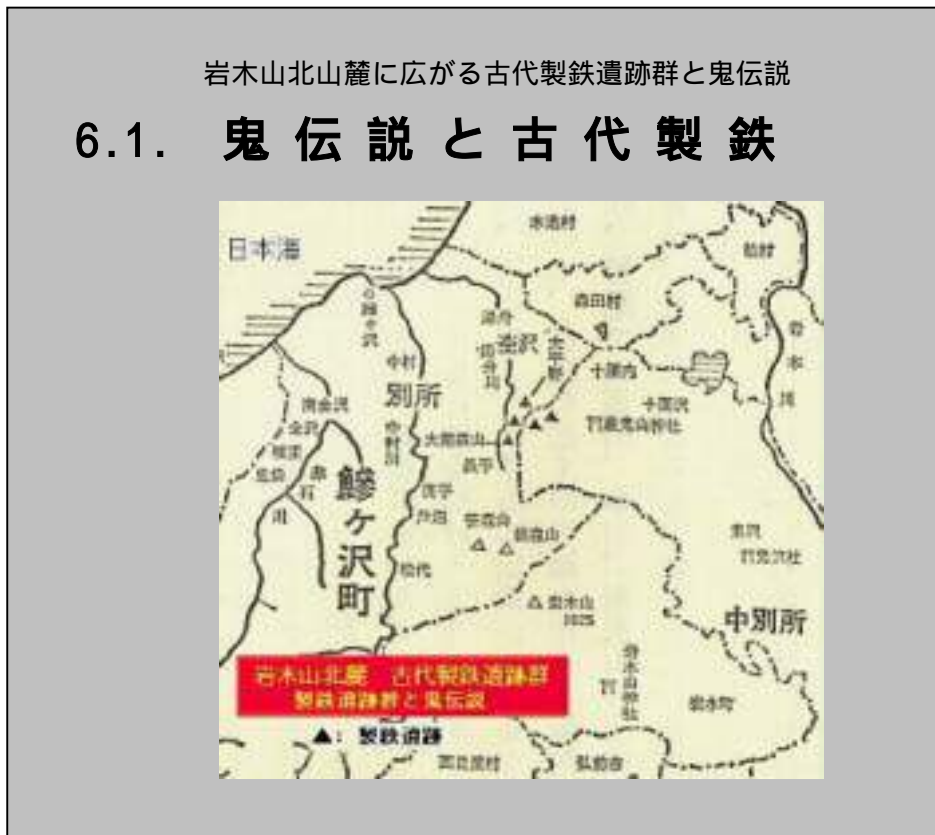
この製鉄遺跡から発掘される炉の構造が、この時代大和朝廷の支配下にあった製鉄遺跡の炉とは少し異なっており、伝播の道が少し違っていると言われている。また、柴田弘武氏らの本によるとこれら鉄の技術を持った東北の集団がその後の時代に俘囚として、日本各地でたたら製鉄に従事し、たたら製鉄の伝播に大きな役割をはたしたことが示されている。当時 奥州・津軽の製鉄技術の優秀性が大和朝廷でも認められており、完全に津軽を征服しなかったことと合わせるとあまりきっちりとした証拠は見えていないが、津軽に巨大な鉄の王国があった。証拠であろう。

昨年秋、津軽を訪問し、岩木山に登り、縄文文化の花開いた津軽半島西海岸を歩き、鉄の痕跡を探した時にはその痕跡は見つけれなかった。しかし、山内丸山遺跡・亀ヶ岡縄文文化のスケールにふれ、また、「ねぶた」のあの山車の迫力、そして 現代の青森の明るさとエネルギーに圧倒され、ここにも古

代日本誕生にかかわった「Iron Road」が伸びていると想像していた。

岩木山の北麓一体が古代の大製鉄遺跡群であり、また、製鉄と関係深い「鬼伝説」の伝わる土地であることを知ったのはつい最近であり、いつも津軽王国の存在を意識していたものの、製鉄遺跡の存在を知り、また、じっくりと岩木山麓を歩いたことと合わせ、やっと津軽 鉄の王国『津軽鉄の道・Iron Road』の存在が実感として結びついた。

雪が消え、暖かい花の季節には、是非 この岩木山北麓に広がる古代製鉄の地を訪ねたい。



岩木山から岩木山北麓にかけての一带では、多くの鬼伝説が伝承されており、同時に古代の大製鉄遺跡群や鉄滓が数多く発見されている。鬼伝説と古代製鉄遺跡との関わり合いは日本各地で見られ、鬼伝説の有る所 かならずや古代製鉄と何らかのつながりがあったことが、製鉄遺跡や鉄滓の発掘や地名等から判って来た。吉備の桃太郎伝説 丹後の大江山鬼伝説 伯耆の国大山山麓溝口の鬼伝説 北上山地地・一関の鬼伝説 そして津軽岩木山北山麓の鬼伝説などいずれも古代製鉄の技術を持って渡来した産鉄の民との関わりが深い。

この伝説に登場する「鬼」とはいったい誰か？。

製鉄の民が真っ赤な顔をして、髪を振り乱しながら鉄を打っている様子が鬼と映ったのかもしれない。製鉄には鉄を精錬するための炉の場所として、風が吹きあがる谷間や山すそが必須であり、大量の炭の必要から森林の伐採が必要で、製鉄炉が築かれると山が丸裸になってしまう。鉄生産に付随した森林の大量伐採と 砂鉄・鉄鉱石採取のための山を切り崩しと川流し等による山の荒廃により起こる自然災害により、農耕の民との争いもたえなかったと想像される。山深く入った産鉄の民は山と里人との争いを通して 山の民=「鬼」 悪者として描かれるこ

とが多い。しかし、時には里に下りてきたこの産鉄の民が開墾を促進し「開拓の祖」と善者にもなった。これらが鬼伝説として、また 地名として今に伝えられている。

一昨年 大ヒットした映画「もののけ姫」の記憶は新しい。

また、各地に残る大男「ダイダラボッチ・ダイダラ坊」の伝説や「河童」伝説も産鉄の民・渡来人との関わりがあるとの説があるが、よく判らない。

6.2. 岩木山北麓 鬼沢「鬼神社」と「鬼伝説」 弘前市 鬼沢



鬼神社 社殿 多数の農耕具献額を掲げた鬼神社正面 農耕具の献額

弘前市から岩木山を左手に見ながら鱒ヶ沢町に向かう県道を行くと「鬼沢」という地名が見えてきます。この集落には、「鬼神社」があり、鬼が御神体として祀られ、農業の守護神として地域の人々の信仰を集めています。この地の鬼神社には、『山から下りてきた鬼が、一夜にして荒地に一大水路を作り上げ、農耕の民の開墾を助けた』との鬼伝説が伝わっています。2月の節分、この地域の人たちは今も「鬼は内、福は内」と言い、鬼を悪者ではなく、自分達の守護神として祭っている。

鬼神社のご神体は鉄滓を数個積上げたもので、古くから石の仏様として大事に祭られてきたという。また、神社拝殿正面の頭上には奉納額が並んでいるが、それら全部が全部、農耕具だというのが非常におもしろい。

このように鬼沢神社はこの地が古くからの製鉄地帯である事を含め、鉄との関わりが非常に深く、これがまた、『鬼伝説』とも結びついている。

岩木山にいた沢山の鬼たちが山麓に流れ出る赤倉川の流域に移り住み、この鬼沢の鬼もこの赤沢の鬼が下りてきたといわれている。岩木山から赤倉に下って行く途中には 今も「鬼の土俵」などの地名が残っている。

赤倉の山にいた製鉄の民が真っ赤な顔をして、髪を振り乱しながら鉄を打ち、農具を作っている様子が、村人には鬼と映ったのかもしれない。

津軽 岩木山麓 鬼沢に伝わる「鬼伝説」

青森県 弘前市 鬼沢

昔々このあたりはやせた荒地で、作物の実りはきわめて悪かった。そこへ、岩木山の赤倉から下りてきたという鬼が現れ、せっせとこの荒地を耕し始めた。村人達は、これを見て、ただの鬼ではないと思いい、開墾の困難と農業用水の必要を鬼に訴えた。

すると鬼は、それでは力を貸そうと言ったきり、姿を消してしまった。翌朝になって村人たちが行ってみると荒地には、一筋の水の流れが勢いよくほとばしっているではないか。

村人たちは、さっそくその水を田に引き、以後、その水は干ばつの時も決して枯れることはなかったという。

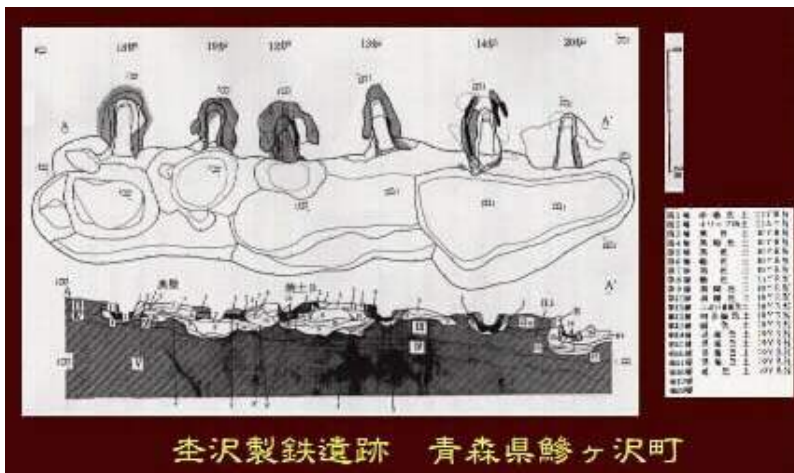
村人たちは、非常に喜んで、鬼に感謝するため、神社を建立して「鬼神社」と名づけ、村の名前も「鬼沢」としたという

6.3. 空沢製鉄遺跡群 鱒ヶ沢町湯舟 と「鬼伝説」



青森県鱒ヶ沢町から南に広がる岩木山北山麓の一带は鬼神伝説を持つ古代から続く一大製鉄地帯の中に、鱒ヶ沢湯舟で発見された空沢製鉄遺跡がある。

数基単位で整然と並んだ製鉄炉跡 134 基とともに鉄滓・羽口や炭焼がまなどが発見された。



空沢製鉄遺跡 青森県鱒ヶ沢町

【青森県鱒ヶ沢町 教育委員会 資料より】



傾斜地の斜面に長さ 1m 前後 幅 50cm 弱 高さ 30cm 程度の製鉄炉が数基づつ整然と並び、その前にこれらの前庭部には共用される廃滓ピットと作業場がある。

このような一連の製鉄炉をもつ製鉄場が 9 群 total 30 数基の製鉄炉などが発掘されている。

大半が、10 世紀平安時代の製鉄炉遺跡であるが、このような小型の製鉄炉が整然と並び製鉄場を基本とする製鉄遺跡は、同時代日本中央に見られる製鉄遺跡にはない独自の形式を有する遺跡である。

また この一帯は縄文時代から続く製鉄地帯であり、数々の縄文遺跡もあり、本遺跡も古い製鉄遺跡の上に築かれていることから、この地での製鉄はもっと時代を遡れるといわれている。

このように独自の形式を持つ製鉄遺跡が発見されたことからこの地が古くからの津軽蝦夷の王国を支えた一大製鉄基地と考えられる。

湯舟の鬼神太夫伝説

鯉ヶ沢町



湯舟 中央の杉木立の上にお宮がある

湯舟 湯舟神社

昔 鬼神太夫(鬼)と呼ぶ剛力の刀鍛冶がいました。

桂山の刀鍛冶長者の娘を愛して、娘をくれるようにと申し込んだ。

困った長者は一策を案じ、一晩の内に拾腰(本)の刀を鍛えたら娘をやると約束した。

すると、鬼神太夫は一晩の内に、全部刀を鍛えて持ってきたが、

長者が一本盗んで鳴沢川に捨ててしまった。

それで、鬼太夫は刀が一本足りず、娘を貰えずあきらめて、

「十腰無い十腰無い」とつぶやきながら、さびしく去っていった。

それで、それ以後この地を「十腰無い」がなまって「十腰内」というようになった。

その後、鬼長者の妹娘と結婚した鬼神太夫の弟が、ある日のこと

鍛冶場の片隅に残っていた玉鋼を見つけ、刀鍛冶の兄が打ったものであると打ち明け、

その玉鋼を氏神として八幡様に祭った。

長者が亡くなる時姉娘には形見として湯舟(鉄を冷やす水を入れた船)をやり、

分家させた。また、妹娘には金敷(鉄を打つ台)をくれた。

それが湯舟村 金敷村の起こりとなった。

また、長者が刀を捨てた刀が浮いた所を「浮太刀」と言うようになった。

今の「浮田」である。

なお、鬼神太夫の打った刀の一本が今も岩木山 巖鬼神社に祭られているという。

「ふるさと あじがさわ」より

増補 蝦夷と製鉄遺跡の発見

一地名も伝説も鉄づくめ——岩木山ろく一帯

製鉄史の研究をしている「たたら研究会」（本部・広島大学）の穴沢義功委員によると、古代の製鉄炉の数はこれまで岡山県内の遺跡（古墳時代）の五十九基が最高、製鉄技術が普及発展した奈良・平安時代では本沢遺跡が最多になる、という。しかも、同遺跡では、古いものを焼した上に新しい伊を築いており、相当の長期間、鉄を生産していた、とみられる。

岩木山ろくには製鉄遺跡が多い。本沢遺跡の南約四キロの鯉ヶ沢町・大平野遺跡と大前森山遺跡からは平安時代の製鉄炉跡がそれぞれ、三、四基出土。山ろく周辺の森田村や五所川原市では、鉄を加工する鍛冶場が多数見つかった。

しかも、山ろくは砂鉄の産地。鯉ヶ沢町の郷土史家、坂井冬樹さんによると、二十年ほど前まで、赤ん坊の頭大の金葉（かなくそ）製鉄したあとのクズ（くず）が山中にゴロゴロころがっていた。鉄が不足した鉄時中は、本沢遺跡近くの鳩沢駅から貨車で搬出するほどだった、という。

鯉ヶ沢町内には、鉄にちなんだ地名が多い。同遺跡がある地区の地名「湯舟一」は「熱した鉄を冷やす舟の入った舟」。隣接地区の「小塚敷」は「金敷」（鉄を打つ台）が転じた、とされる。刀鍛冶の若者を取り上げた伝説「鬼神太夫」。遺跡近くの神社のご神体は、巨大な鉄の塊……と鉄づくめなのだ。

平安時代、坂上田村麻呂らが蝦夷を征討し中央政府の勢力圏は次第に北上したが、東北北部は帰還せず蝦夷の反乱や、陸奥の豪族・安倍氏と中央から派遣された東国の武士団の衝突（前九年の役）など戦乱が相次いだ。岩木山ろく一帯の「製鉄コンビナート」が、武器や農具に使われた鉄の、北日本における供給源だった可能性が高い。

空沢製鉄遺跡の特徴

中央と違う伊の型、高い生産力をしめず
平安時代の「製鉄コンビナート」が八日までに岩木山ろく・西津軽郡鯉ヶ沢町湯舟の本沢（もくさわ）遺跡で見つかった。付近には製鉄・鍛冶（かじ）の遺跡のほか、鉄にちなんだ伝説、地名が多い。今回の発見は、岩木山ろく一帯が当時、「蝦夷（えみし）の地」だったとされる東北北部の鉄生産の「拠点」の一つで、北日本の鉄製品の供給源だった可能性を強く示している。

発掘調査に当たった東北文化財調査センターによると、製鉄炉、木炭窯、鍛冶場、住居、それに戸の跡といった「製鉄工場」と工人たちの生活の場がまとまって出土したのは、県内では初めて。二十三基前後の炉跡はトンブ相の斜面の土を掘り出してつくられていた。

今回発掘された製鉄工場遺跡の範囲は、東西約三十メートル、南北約百二十メートル。南側に製鉄炉群が六列並び、さらに燃料を生産する木炭窯跡が三基あった。北側には、十九棟の住居と三基の鍛冶場を配置。製鉄炉群の斜面の上方には相い構、住居部分の南方には幅三メートルの大きな溝が走っていた。相い構は製鉄炉への水の侵入を防ぐためのもの、大きい溝は防衛用だった可能性があると、としている。

多い製鉄や鍛冶の遺構

- | | | |
|------------------|----------|-----------|
| 空沢遺跡 製鉄炉跡調査報告 | 青森県 鯉ヶ沢町 | 教育委員会送付資料 |
| 鯉ヶ沢 鬼伝説資料 | 青森県 鯉ヶ沢町 | 教育委員会送付資料 |
| 「謎解き日本古代史の歩き方」 | 彩流社 | |
| 柴田弘武著 「鉄と俘囚の古代史」 | 彩流社 | |

6.4. 中世 津軽安東氏の拠点 十三湊

・活発な国内各地・大阪との交易 & 鉄の積出・
jyusanprint.htm by M.Nakanishi 2000. 2. 22.

十三湊は十三湖と日本海にはさまれた砂州上に発達した港町。鎌倉時代には既に港町が存在し、室町時代には安東氏の居所としても大いに栄えた。

「津軽船」と呼ばれる船便で中央と結ばれる一方、当時の最北端の港として、北の世界とつながるターミナルとしての役割をはたし、中国との交易をはじめ、国内外の物産がこの地に集まった。

輸入陶器や安東氏の館跡や町屋などが発掘されている。

縄文時代の一大文化圏として脚光を浴びた津軽がその後大和朝廷の支



配下に入ったものの遠く未開の土地として、歴史の世界からは消えてしまう。
 大和朝廷の影響の及ばない中で、独立の勢力として文化を育ててきたとおもわれる。そして、中世 安東氏の日本海交易による繁栄により、世界の物産が集まる大交易港湊町として脚光をあびた。
 またこの時代 鉄の積み出し港としても栄え、津軽岩木山周辺の古代製鉄の流れが連綿と引き継がれ、この時代においても 津軽が製鉄の大基地であり、安東氏の勢力もこの鉄の生産によるとも言われている。

私が昨年秋、再度 十三湊を訪れたときには、台風の嵐の中。

荒れ狂う日本海に抗して砂州がひろがり、その内海・十三湖 十三湊では数多くの船が嵐のおさまるのを待っていた。天然の良港である。

日本海の荒波と風が吹きすさが北の端にあって、十三湊の繁栄の理由が判ったような気がした。

もっとも、十三湊はその後の大地震と日本海が吹き寄せ体積する砂によって 浅くなり また放棄され、現在ではひっそりとした津軽の一漁 港となっている。

本年 1 月 千葉県松戸市の博物館で催された『日本列島発掘'99』展で昨年 発掘調査された十三湊旧跡から出土した数々の物産を見た。中国の磁器はじめ、日本各地の品物が広くこの北の端の十三湊に集められ、また各地に散って行く。出土品の多用さと豪華さから、当時の十三湊の繁栄振りがよく判かる。



十三湊遺跡より
 発掘された公益品の数々



「発掘された日本列島展」より 松戸博物館

6. 古代津軽 北の鉄の大王国【1】

岩木山北山麓の製鉄遺跡群と鬼伝説

〔完〕

7.

『 秋田・青森 縄文 の ストーンサークル 』 探 訪

・ 縄文人の心を考える これも iron road -
oyu0print.htm 2000.11.1. by M.Nakanishi



秋田県 鹿角市 大湯ストーンサークル	青森県 青森市 小牧野遺跡	青森県 青森市 山内丸山遺跡	秋田県 鷹巣 伊勢堂岱遺跡
-----------------------	------------------	-------------------	------------------

【 内 容 】

1. 縄文の心を考える これも「Iron Road」
2. 縄文のストーンサークル
 - a. 「大湯 環状列石群 野中堂遺跡 & 万座遺跡
 - b. 青森市 小牧野遺跡」探訪
 - c. 山内丸山遺跡の「ストーンサークル」と「墓の道」探訪
 - d. 「伊勢堂岱遺跡のストーンサークル」探訪
3. 「縄文人の心を映すストーンサークル」
4. 岩木山北山麓 鬼伝説の郷から 縄文人へ

7.1. 縄文のストーンサークル これも Iron Road

この夏 東北芸術工科大 赤坂憲雄教授の講演「縄文人の心を表すストーンサークル」の事に感激。是非その現場に立ちたいと8月「秋田大湯の縄文のストーンサークル」を訪ねたのにつづいて、9月この山内丸山遺跡お月見の会訪問を機会に秋田鷹巣の伊勢堂岱遺跡・青森小牧野遺跡そして一番古い山内丸山遺跡のストーンサークルをも見てきました。

静かな森の中、縄文人の心に触れたいと誰もいない遺跡の中にどっぷり浸かって帰りました。

【青森・秋田 縄文のストーン サークル】



青森山内丸山遺跡

青森小牧野遺跡

秋田県鷹巣 伊勢堂岱遺跡

秋田大湯
野中堂・万座遺跡

津軽・秋田の鬼は「産鉄の民」。

「津軽の赤鬼」「ねぶた」を象徴する「赤」も縄文から繋がる「赤」のながれでは・・・。

何の根拠もないが、心情的に東北に惹き付けられ、せつせと東北がよい。山内丸山のあの櫓を赤に塗ってとイメージしている人達も知りました。発想が根拠を引出してくるのでは・・・。

弥生人が鉄を手にして なんて考えなくても あの縄文のストーンサークルを絆として、平和に暮らしていた人達が或日 鉄を手に入れて・・・。

そこから 時代が激動の世に変化して...そして人間観も変わってきて・.....。

「ストーンサークルが縄文人の心・人間観を映すのなら 鉄が弥生のそしてその後の日本人の人間観を強引に変えて行ったか・・・。」これも時代を介して流れる日本の「Iron Road」。

青森から秋田に広がるストーンサークル・縄文とその後の弥生・産鉄の民遺跡その重なりが日本人の精神構造・多様性の源泉は・・・。

「たたら民」を描いた映画「もののけ姫」の舞台 白神山地が日本海に落ち込む五能線の荒々しい海岸を眺めながらそんな事を考えていました。



五能線 秋田・青森県境海岸



世界遺産 白神山地

五能線の中から 秋田・青森県境の荒々しい海岸を眺めつつ

2000. 9. 17. 夕 by M. Nakanishi

7.2. 縄文のストーンサークル walking

A. 『秋田県鹿角市 大湯 縄文のストーンサークル探訪記』

『野中堂遺跡』と『万座遺跡』



[oyu1.htm](#) [oyu2print.htm](#)

2000.8.4. by M.Nakanishi

7月の初め、東京で「東北学」を提唱する山形芸術工科大学の赤坂憲雄教授の講演の言葉に深く感銘を受け、是非とも、大湯縄文のストーンサークルの場に立ちたいというのが、今回のwalking目的の一つだった。

「東北を理解するには縄文のストーンサークルに立たねば...」とちょうど「津軽ねぶた」にも抱いていた一種あこがれにも似た気持ちで、まぶしい太陽が照りつける夏の午後 秋田県鹿角「大湯環状列石群ストーンサークル」を訪れた。 2000.8.4.



「穢れ」を知らぬ縄文人・「戦いのない」縄文人のメッセージ。

「縄文人の心を映すストーンサークル」縄文人の意識・人間観が縄文の村の形態を生み、この「縄文のストーンサークル」を作った。

「日本人のやさしさの痕跡がここにあるのではないだろうか...」

また「東北の風土がこれを起点にしているのではないか...」

2000. 7. 7. 赤坂憲雄氏 山内丸山縄文発信の会 東京・縄文塾講演から

1. 弘前駅から奥羽本線特急に乗って大館へ

列車は奥羽山脈山脈の中に分け入り、約1時間で大館につく。「大館で花輪線に乗換え十和田南へ」と考えていたが、都合の良い列車無し。特急が留まる駅とはいえ、駅前には本当に閑散としている。時計が止まって一切がストップしているような何とも不気味な感じ。

大館といえば、「秋田まげわっぱ」の中心都市と考えていた私は本当に戸惑った。後で判ったが、街の中心は駅から南へ川を渡った新市街地に移っている。国鉄の駅ではなく郊外や駅ではないショッピングモールなどを中心に展開する新市街地に今の日本の都市の縮図を見る。それが、本当に地方へ行くほどはっきりしている。駅から500mほど先にバスセンターを見つけ、そこからバスで鹿角花輪駅へ行く事にした。それでも約1時間待たねばならない。



【鹿角花輪盆地と米代川 ストーンサークルにはこの川の上流側支流の河原石が使われた】

2. 大館から鹿角花輪駅へ

バスは米代川沿いに奥羽山脈の中に分け入って行く。交通の便から言うと本当に山奥である。南側は八幡平の山々 北側は十和田湖や八甲田の山々に挟まれた花輪盆地の中心に鹿角市がある。そして、この盆地の中、花輪線十和田南駅や鹿角花輪駅から十和田湖へ上がって行く途中の高台に大湯ストーンサークルがある。

能代川は大河である。奥羽山脈の中に曲がりくねりながら川と並行してバスは進む。あちこちでアユ漁をしている多くの人達の姿が、まわりの山々の景色とあいまって美しい。自然が主役。そんな中へどんどんバスが入って行く。最も鹿角市 JR 花輪駅近傍は八幡平や八甲田・十和田などへの中心基地として大きな新市街が展開されていた。

恐らく新しいスタイルの観光都市に見えた。

花輪駅からタクシーで約15分。市街地を抜け、八甲田の山々へ向かって幾つかの丘陵地を登った高台が「大湯ストーンサークル」であった。午後3時。雲があるが、真夏の太陽が西の空に輝いていた。

縄文のストーンサークル

3. 「大湯 環状列石群 野中堂遺跡 & 万座遺跡」

oyu5.htm



【中堂遺跡】

【万座遺跡】

広い草原の中、北へ八甲田の峰に向かって真っ直ぐ伸びる一本道を挟んですぐ、両側に整備された万座・野中堂の縄文遺跡がある。写真で見なれた日時計状列石と二重の環状列石が配された野中堂遺跡がすぐ傍にあった。道をへだてて、反対側は広い草原であり、その中には沢山の石が環状に配された大きなストーンサークルがある。

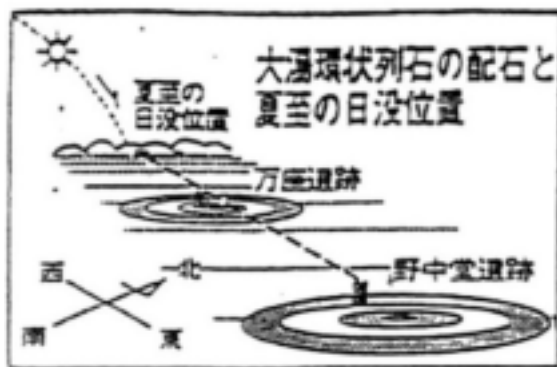
このストーンサークルの向こうに復元された幾棟かの住居が見え、ストーンサークルを中心に広い緑地公園として、整備されている。また、道を隔てて存在する野中堂遺跡では、ストーンサークルの周辺部の発掘調査が進行中であり、竪穴住居跡の存在が期待されているが、まだはっきりしない。

この野中堂遺跡と万座遺跡のストーンサークルの中心やストーンサークルのシンボル日時計状列石はほぼ一直線に並んでおり、この直線上の先に夏至の太陽が沈むという。

早速野中堂遺跡の日時計状列石の後ろにまわって、両遺跡が一直線に並ぶ位置に立って見る。

夏至ではない今の時期では太陽の位置と両遺跡が並ぶ位置とは随分離れているようだ。

しかし、縄文人が太陽の運行をきっちり知っていたというのは事実らしく、現代と縄文時代の地軸の傾きの補正等を入れるとほぼこの仮説は正しいという。



どちらのストーンサークルも内帯・外帯二つの円環状の列石があり、この帯の間にストーンサークルのシンボルと言われる一組の日時計状列石が空に向かってそそり立っている。また、ストーンサークルの環状に積まれた列石は 平面で見ると漫然と並べられているようにみえるが、どちらの遺跡もきっちりとした石組を有し、この石組の下からは墓が発掘され、西北西を向いて整然と埋葬されているという。これらストーンサークルの外側には四本柱の建物そして竪穴式住居が取り囲んで整然と建っていたという。

縄文人達は米代川の河原から大量の石をこの丘に運び上げ、この集落の中心にストーンサークルを作り、集落の村人が死ぬとこのストーンサークルで石組みの墓を作り、弔い祭りを行なったに違いない。おそらく村中総出であつたらう。

「死者と共に暮す生活意識」これが、縄文人の特徴ある人間観といわれる。この草原の一角にすわり、かつて在った縄文の村と暮しをイメージする。このストーンサークルは何をイメージし、何を今に語りかけているのか??? 色々の事が頭によぎるが、よく判らない。遠く山に囲まれた森のなかで、ストーンサークルを中心に自然と調和して、穏やかに暮す森の民・集団があつた。それが日本人のルーツ。

4. 縄文のストーンサークルの地に立って



ストーンサークルは何を示しているのか 考えるのは勝手。

実に気分爽快な午後になりました。

このストーンサークルの前に座り、まわりを眺めているこの気分が日本人気質の第一歩。なにか日頃の喧騒から逃れた気分がそうさせるのか実に気持ちが良い。墓場にいるという暗い印象を想像するが、全くそんな気持ちも無し。山々に囲まれた草原の上で自然を満喫。 ついでながら、また、この草原で一人の若者に会いましたが、「神戸から来たと……」

グルット見まわしても 10 人の人影も見えぬこの奥羽山脈の奥 神戸から遠くはなれたこの鹿角の地に神戸の 2 人が入る。全くの偶然であるが、人の動きとは面白い物である。 また、逆にこのストーンサークルには人を惹きつける何かがあると観じた次第。

一度ここに 1 日座っていて、訪れる人達のに「何を求めて 何処から…」と尋ねて見たら面白いと思う。日本人の奥にある何かが見えてくるかもしれない。

「死者と共に暮す」との生活感覚は本来キリスト教など一神教にある感覚といわれる。

多神教ではあまりない感覚といわれる。仏教・神教「ヤオヨロズノ神」の日本の底にまた別の感覚がある。まさに日本そのものの多重性。そんな中であって「ねぶた」そしてこの「ストーンサークル」 また「いたこの口寄せ」といい、何か日本人の琴線にふれるところが東北にはある。

精神的な日本人の気質形成の場に古くストーンサークルが一役買い、根強く今に生きていると考えたい。歴史民俗博物館の辻誠一郎氏のいう「日本の多様な植生がそこに住む日本人の多感多様な気質を育んだ」とすれば、その生活の場としてのストーンサークルが「縄文の生活を通して日本人のやさしさの気質を育てた」のではないだろうか ??

大河米代川を遡り、奥羽山脈の奥深く 白神・八甲田・八幡平の山々に囲まれた花輪盆地の高台の草地にすわりこんで、ぼんやりと一人暮れ行く自然の風景を眺めていると縄文の時代にタイムスリップして、ゆったりとした気楽な気分になる。

何を考えるでなく、約 30 分 万座遺跡の広大な草原にすわってストレス解消の精神浴でした。



この遺跡の草原では今、当時の樹木が沢山植えられ、縄文の森が育てられている。2,3 年先 さらに 10 年近くを必要とするかも知れないが、くり林など深い森に囲まれて、ストーンサークルを中心に復元された竪穴住居が立ち並ぶ縄文の村が静かに待っているかもしれない。

残念ながら、雲が出て 夕日の沈むのを見ることが出来なかったが、暮色が深くなって大湯のストーンサークルから、バスで鹿角花輪駅へ。そして 高速バスで盛岡へ。

気分爽快。初めて見た「山々をバックに立つ日時計状の列石と環状列石群」さらには「津軽岩木山山麓

の原生林の鬼とネブタ」が「静」と「動」として頭の中で駆け巡っている。
 奥羽山脈の奥地から流れ出した大河米代川沿いの流域・大湯にも、時代が下ってくると弥生の人々が住み、
 そして「たたら 鉄」の遺跡があるという。
 「山が人を呼ぶのか 川が人をゆぶのか 山川あるところ人有り」「IRON ROAD」がここにも通っていました。

2000. 8.4. 盛岡からの新幹線の中で by M.Nakanishi

縄文のストーンサークル walking

B. 「青森市 小牧野遺跡」探訪

kmkinoprint.htm 2000. 10. 1. by M.Nakanishi



【 青森市 小牧野遺跡 縄文のストーンサークル 】

1. 「青森市 小牧野遺跡」縄文のストーンサークル
2. 「青森 小牧野遺跡」解説小牧野遺跡紹介文より 青森市教育委員会資料抜粋



【青森市 小牧野遺跡 その概要】

1. 「青森市 小牧野遺跡」 縄文のストーンサークル walking



小牧野遺跡近傍



小牧の遺跡の位置



小牧野遺跡入口の道標

9月16日 早朝 タクシーで小牧野遺跡を訪ねた。

街の人に聞くと「あそこはバスもなく、車でないと行けぬ」と言われたが、後から考えると丘の下まではバスが走っている。【もっとも 2時間に1本程度で便利の悪いことには変わりなし。】

青森の市街から八甲田に向って タクシーで約30分。青森空港のある丘陵と一つ西側の丘陵で、もう青森の市街から外れ、南へ八甲田の酸湯へ向う山裾の丘陵地に小牧野遺跡は存在する。

荒川と入内川に挟まれた丘陵地で、背後に大きな八甲田の山々が見える。野沢の小さな集落で、酸湯へ向う幹道を離れて、人里をから林の中の丘陵へと続く一本道を登り、丘陵へあがったところ一面の畑が続く中に小牧野遺跡への標識があり、その向こうに小牧野遺跡の森が見えた。

早朝朝7時すぎの朝靄の中を一人誰もいない小牧野遺跡の中に足を踏み入ると、山内丸山遺跡の人の列が嘘のように静まり返った森の中に凄量の石組で作られたストーンサークルが眼に入ってきた。

大湯や伊勢堂岱遺跡のストーンサークルが平板状にストーンサークルが形成されているのに対し、周辺の樹木に包まれて、その特徴ある石組みが少し傾斜をつけて土地を掘り込み、立体的に立て掛けた状態で円環が続いている。



国史跡小牧野遺跡の石碑



日時計状列石



二重の円環の石組

小牧野式石組

円環の右の方には日時計状列石〔山内丸山の岡田康博先生「はひまわり状」という〕が本ストーンサークルの象徴として立っている。ストーンサークルの日時計状列石の右側の周辺部は林になり、丘陵地の崖となって下へおちこんでいるのであるが、この林の中に多数の土坑墓が発掘されていた。

朝靄につつまれ、このストーンサークルの中心にひとり立っていると朝霧がその幕となって「これから始まる一大古代激」を棧敷で待ちうけている感じがしてならなかった。

恐らく 古代には、幾つも並ぶこの丘陵地の何処かで、まだ見つからない集落の人達が、八甲田の山を背にこの小牧野のストーンサークルを毎日眺め、葬祭の時には 幾つもの兄弟の村の人達が一同にこのストーンサークルにあつまり、弔い、お互いの絆を確かめあつたに違いない。環境の変化で大きな集落が維持できなくなり、分村する時にこのストーンサークルが現われてくると言われている。

「このストーンサークルの各位置が元の村の円環の集落の居住位置を現わしているとしたら、

このストーンサークルに自分の定席があり、それが天空・宇宙においても定席があるとしたら。」

自然発生的に円環にこだわった縄文人がそこに自分達のステイタスを見出して行ったのではないだろ

うか... ..

だとしたら あの小牧野式と呼ばれる列石の配列もそれぞれ個性があるはず

もうここまでくれば妄想かも。

野球や映画の開始前の期待に満ちたあの想像・あのイメージのふくらみ..... ..

「霧がはれ、もう幕があくかな... ..」とゆったりとした落ち着いた気分の早朝 walk でした



ストーンサークル



朝霧のストーンサークルを背に



日時計状列石

縄文のストーンサークルは墓場と関係しているが、全く暗さなし。

現代の都市にある公園墓地がそれまでの寺などに隣接した暗い墓場のイメージ`を払拭しつつあるのも広く考えれば現代のストーンサークルか?

昨日見た山内丸山遺跡の林の中のストーンサークル形成の原型なども重ねイメージをふくらませながら、林の中の丘陵地を野沢の集落までゆっくり下り、バスで青森へ。

2000. 9. 16. 早朝 青森 小牧野遺跡で M. Nakanishi

資 料

青 森 市 小 牧 野 遺 跡

青森市教育委員会資料より抜粋

aokmkinoprint.htm by M.Nakanishi 2000.10.1.



小牧野遺跡は青森市野沢字小牧野に所在し、今から約4,000年前の縄文時代後期前半に作られた環状列石を主体とする遺跡で1995年には国史跡指定を受けている。

勘定列石は、こぶし大から50?60cm位の大きさの河原石を用いて作られた直径3mの中央帯、29mの内帯、35mの外帯の3つの輪からできています。

内帯と外帯は細長い石を縦に、その両側に平らな石を3?6個積み重ね、これを繰り返すことによって形作られており、その石の総数は2,000個にもなります。

この配列は「小牧野式」と呼ばれる特徴を持っており、これらの石組み配列の下には墓がなく、ストーンサークルの石組みの下に墓がある大湯のストーンサークルとは異なります。



【朝霧の中の小牧野遺跡 ストーンサークル 2000.9.16. 朝】



【 特徴あるストーンサークル円環の列石 小牧野式列石 2000.9.16. 】

調査は今もつづいていますが、これまでの調査によると、周辺部には環状列石を形成してきたと考える集落の存在はもとより、列石構築期の 竪穴式住居跡の存在も確認されていません。また、環状列石の周辺からは、土坑基群（墓域×食料貯蔵用の土坑群（貯蔵施設） 遺物の捨 場が検出されています。〔周辺の貯蔵施設は、列石を作っている期間やそこを使用、管理する期間に必要な食料貯蔵施設であり、捨て場はその時に廃棄されたゴミ処分場であったと推測されている〕

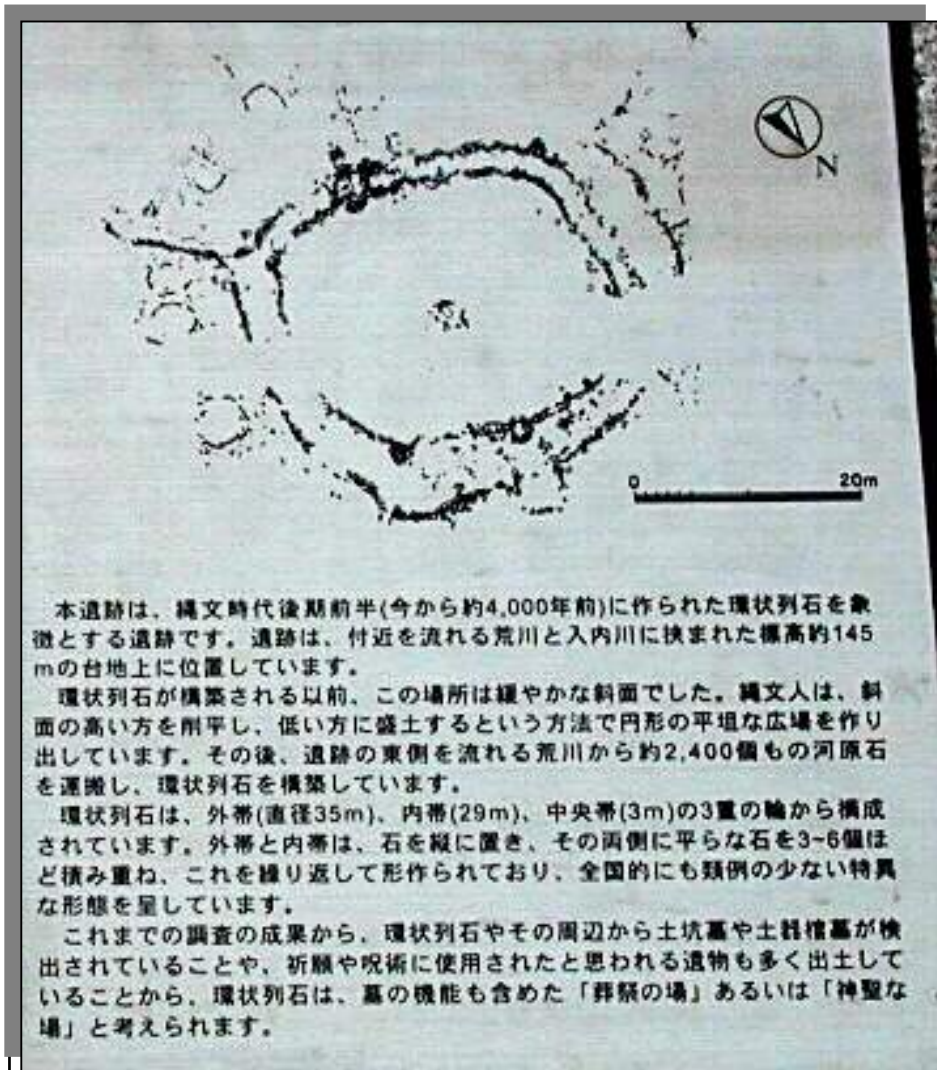
これらの事やから祈願や呪術に使用されたと思われる遺物も多く出土していることから、環状列石は、墓の機能も含めた「葬祭の場」あるいは「神聖な場」と考えられています。

このストーンサークルは傾斜した台地を造成して平場を作り出した後に作られています。どのようにしてこの土木工事が行われていたのかも興味深いところです。

また、この遺跡からは朱塗りの土器や土偶なども発見されています。

このストーンサークルの謎を追って小牧野遺跡では現在でも調査が続けられている。

【ストーンサークルの周辺部 森の中で続く発掘調査 2000.9.16.】



青森市では、今後この小牧野遺跡を、発掘調査の成果をもとに、縄文人の世界観を視覚的に理解できるような遺構や縄文時代の植生等を考慮した環境などを復元し、当時の歴史や自然の一端を肌で体験できるような「史跡公園」の整備を目指しています

縄文のストーンサークル」の原型

C. 山内丸山遺跡の「ストーンサークル」と「墓の道」 探 訪

snsnaiprint.htm 2000.10.15. by M.Nakanishi



青森山内丸山遺跡と「墓の道」

1. 岡田康博先生の見学会
2. 「日時計状石組」
3. 「ストーンサークル
4. 「墓の道」

縄文中期の巨大縄文遺跡 青森市「山内丸山縄文遺跡」。その発見は今までの日本の縄文観を変えようとしています。

縄文人の心・人間観を映すと言われる「縄文のストーンサークル」。

山内丸山遺跡にもその原型といわれる「ストーンサークル 環状配石墓」があり、岡田康博先生の案内で見学することが出来ました。

10.15.午後山内丸山遺跡にて

1. 三内丸山遺跡岡田康博先生の見学会

山内丸山の集落から東に伸びる「縄文の道」が既に発掘調査され、その道の両側には土坑墓が並び縄文の「墓の道」である事が明らかになっている。

この「縄文の道」とは別に山内丸山の集落の中心部から南へ伸びるもう一本の縄文の道が最近発見されている。

この道も「墓の道」でその周辺からは土坑墓が多数発見されると共に、伊勢堂岱遺跡や小牧野遺跡等に見られる縄文のストーンサークルの原型というべき環状配石墓が幾つも発見された。

今回の山内丸山遺跡訪問の目的は、昨年に続いて山内丸山遺跡の中で「縄文の月見の宴」に参加することと縄文のストーンサークルの原型となった山内丸山遺跡の「ストーンサークル」を見ること。

9.15.午後 この山内丸山遺跡の岡田康博氏の案内で2000年に新たに調査されているところ

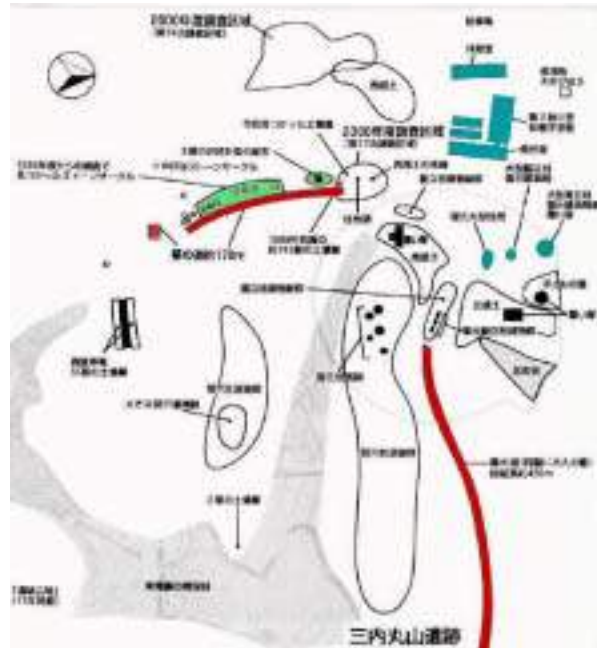
とその中心にあるストーンサークルのある「縄文の道」を案内してもらった。

発掘者である岡田先生に直接発掘の様子と共に縄文の人達の生活・墓場のイメージなどを直接聞いた事は本当にラッキーでした。

2000年の西盛土の端部発掘調査区域で住居跡の調査が進められたが、その住居跡のすぐ南側から多数の土坑墓が密集して見つかった。そのすぐ横のところから南へ縄文の道が伸びている。

また、この道の入口に近いところで日時計状の組石が3基みつき、更に今は登り勾配の林の中に続くこの「縄文の道」を歩いて行くとストーンサークルが幾つも見つかった。そして更に遺跡の端までこの道は続いている。

集落から東西に伸びる道と同様性格的には「墓の道」である。この端のところ縄文のこの道の断面が見られた。



東西に伸びる「墓の道」とストーンサークル



山内丸山遺跡と「墓の道」の位置

集落から墓場を南北に伸びる黄土色の「縄文の道」が貫いている。その道の入口の所には幾つもの土坑墓・板囲いの墓に囲まれて日時計状の

組石があり、この墓の道を登って行くと木立の中に山内丸山遺跡のストーンサークルがひっそりありました。



岡田氏は縄で区切られた中の青いカバーのかけられた発掘部にみんなを招き入れ、「ひょい」とカバーを開けて、本当にまじかで発掘された部分を丁寧に発掘の意味をはなしてもらった。

黄土色した縄文の地層と黒のそれ以後の地層のフォツとした違いをかぎわけ、立体の形を掘り起こし、縄文の遺物を浮かび上がらせて行く。

縄の外からは見えない「土器のかけら」土の色の違いで見分ける「土坑墓の穴」など見過ごしてしまうところが足元にある。

こんな真近で次々と発掘の中を自由に見学・解説してもらったことはなかった。

つい先だっても、ある遺跡で「縄の中にはいるな」「外からでも、写真とるなら事前に教育委員会で許可もらってこい」と本当に「遺跡はだれのもの・・・」と疑いたくなる経験した後だったので、この岡田先生の見学会にはビックリ。山内丸山遺跡に繋がる人達 本当は皆さんえらい学者さんなのでしょうが、同時に一般の人の考えも貪欲に吸収し、新しい視点で考えるとい

った姿勢 山内丸山遺跡研究者の気風と聞きましたが、岡田先生はそんな気風を作ってこられた中心人物。市民参加型のイベントが次々行なわれている遺跡・「遺跡から月見をして縄文を考えよう」などちょっと遺跡に繋がる学者の発想とは違う良さ。それが山内丸山遺跡にはあり、一般人である私など、訪れるたびに、親しみの中に、新しい発見とエネルギーを得られる原因。

ちょっと感傷的に「縄文のストーンサークル」を捉えていた私でしたが、今回の見学会で岡田先生からストーンサークルを眼前にして縄文の中味の中味を間近で解説してもらったことで、新しい視点がぼくにも出来ました。ほんとラッキーでした。

市民や一般の人も参加できるこの山内丸山遺跡にその中心となる「縄文研究のナショナルセンター」が早くでき、新しい発想の中で、新しい縄文感がきずきあげられることを強く期待しています。

2000.9.15. 中西 睦夫

2. 「日時計状配石」 (ひまわり状配石)

snsnnai2print.htm



日時計状配石

真中の棒状の石がサークルの中心に立っていたと推定されている。



西盛土の端 住居跡・土坑墓等発掘現場

(左端に青いシートがかけられているあたりが日時計状配石が見つかったあたり)

西盛土の末端の西側に広がる住居跡の発掘調査が推進されているがその地域から多数の土坑墓がみつかった。兆度南側に広がる丘の裾のあたりである。当初 このあたりも住居跡が発掘されるとかんがえられていたが、思いもかけず、多数の土坑墓や板囲いの墓が発見され、ここを通過して南北に伸びる「墓の道」が南の丘に向かって斜面をのぼっていく。この登り口のところに日時計状石組が発見された。兆度山内丸山遺跡の集落から墓場に入る入り口あたりである。



岡田先生はこの配石を「日時計状配石」とは呼ばず、「ひまわり状配石」と呼ぶ。言われて見ると其の方が近いとも思える。真中に少し他より大きな細長い石が見えるが、配石の真中に立っていたものと思われる。ここでは3基の日時計状配石が見つり、山内丸山遺跡の勢力が最も強かつ

た縄文中期 5000 年 4500 年前のもの。この山内丸山遺跡の時代に続く縄文後期には大湯や伊勢堂岱遺跡・小牧野遺跡にみられるような大きなストーンサークルがあらわれ、ストーンサークルにアクセントを添えるがごとく、この日時計状配石が円環の傍に一基立っている。

山内丸山遺跡のような巨大な縄文集落が形成された縄文後期に続く時代に、これら巨大集落は小さな集落へと分散して行く。

この過程で集落とは別のところに巨大なストーンサークルがこの「日時計状組石」を伴って現われてくる。

山内丸山遺跡では、この日時計状配石の周辺にはストーンサークルではなく、多数の土坑墓があり、この墓場並びに墓場を南に貫く「墓の道」のモニュメントのごとくこの日時計状配石が建っている。もっとも この配石から「墓の道」を南に登って行ったところで、規模は小さいが7基の円環状配石墓「ストーンサークル」が道の片側に並んで発見されている。

縄文のストーンサークルに必須の日時計状配石と環状列石とが、ここで揃って出てきている。

この「ひまわり状組石」近傍の「墓の道」の両側には道路に直角に頭を西にした多数の墓が並んでいるという。



日 時 計 状 配 石

西北西は死者と関係する方向？ 沈む太陽に向かって並んで居るのか？ また、この南北の墓の道と太陽や周りの山々との関係は????この南北の道は「岩木山」が眺められる方向でもある。

3. 「墓の道」に並ぶ「ストーンサークル・環状配石墓」

・「縄文のストーンサークルの原型」・

snsnai3print.htm



「日時計状組石」のところから今は林の中を南北に伸びる「墓の道」

山内丸山遺跡のストーンサークル 環状配石墓は林の中のこの道の傍に並んで見つかりました。

山内丸山遺跡の墓場を南北に貫く「縄文の道」。日時計状組石のところから、この登坂の道を林の中に登って行くと、そこにストーンサークルがありました。小牧野や伊勢堂岱遺跡のストーンサークルから較べるとはるかに小さく石の数も少ない。しかし、この環状の配石のまわりからは多数の墓穴が見つかり、墓であることは間違いない。



山内丸山遺跡の環状配石墓とその中の墓穴 林の中にあるその山内丸山遺跡のストーンサークルに立って見るとあの数十メートルを越える環状の列石とは異なりその規模は小さく、環状配石の環の直径は4~5メートル程度。確かに環状に石が配されている事が良く解るが、石の数も少なく 不ぞろいである。あの日時計状組石があるかどうか 良く解らない。

その時は気がつかなかったが、本に載せられた山内丸山遺跡のストーンサークルの写真を見ると円環に配された組石の中に他の石よりも大きく細長い石が一つあり、これはやっぱり円環のところ立っていると想像され、円環と円環の脇に立つ日時計状石の両方がこの環の中に揃っている。でも、少し時代が早いといっても 小牧野遺跡や伊勢堂岱遺跡のストーンサークルと印象が大きく違う。

圧倒的に石の量が少ない。こんなストーンサークルが「墓の道」の片側に沿って幾つも発見されている。

岡田先生の話によれば、「このストーンサークルは一機につくられたのではないだろう。人がなくなるとここに墓をつくり、石を回りに配する。また次にと次々と墓が作られるに従って石が運ばれ、長い時間を経過してこの環状に配石が作られた。時には古い墓の石を並べかえることもやられたに違いない」と。山内丸山の人たちは、まだ、このストーンサークルその物には意識しておらず、墓場の墓の配列としか認識していなかったと思う。人を葬るその時々円環の一部のところに墓をほり、石を積む。長い時を経て、円環が作られていった。

恐らく山内丸山遺跡の人々にとっては、円環に次々人を葬って墓を作っていくことは意識していたとしても、円環そのものには意味を見出していなかったのでは？ これで納得。

山内丸山遺跡のような巨大な縄文集落が形成された縄文後期に続く次の時代には、これら巨大集落は小さな集落へと分散して行き、この過程で集落とは別のところに巨大なストーンサークルが「日時計状組石」を伴って現われてくる。

「縄文のストーンサークル」として知られる巨大な環状列石を有する小牧野遺跡・伊勢堂岱遺跡や大湯のストーンサークルなどである。環状の列石の下には墓穴がない場合もあり、環状列石その物が純粹に墓穴の組石とは考えられない。つまり円環そのものに意味があると考えられてる。もっともこれらストーンサークルの内部や一部周辺から墓穴や甕棺が発掘され、共同墓場としての機能も有している。

「この縄文のストーンサークル 環状列石は何を意味するのか？」は今も謎ではあるが、次のように考えられている。

「かつて同じ祖先を持ち、同じ集落に住んだ人達が、小さな集落に分散して行く過程で、巨大集落の墓場にあった共同墓地「環状列石墓」のストーンサークルを思い出し、集落は分散しても、祖先を同じくする絆として、一同が会する広場・墓場並びに祭式・祭を行なう場所としてこのストーンサークルを集落とは別に作った。

周辺から良く見える川筋の丘陵地を選び、大きな土木工事を行ない整地したところにまわりの山々や太陽の運行など自然と関係ずけて、川から多数の石を運び上げて、環状に組石の列を作り大きなストーンサークルを作った。

山内丸山遺跡に見られる環状配石墓の形が、さしてそこに葬られている祖先への敬愛の念の意識が次の時代にお互いの絆を確かめ合う場のイメージをクリアーにして巨大なストーンサークルをつくっていった。まさに「縄文のストーンサークル」の原型が山内丸山遺跡の環状配石墓・ストーンサークルで見られる。

【 山内丸山遺跡の最も高い場所 】



遺跡の最も高い高台
西の岩木山を望む



遺跡の最も高い高台
ここにも竪穴住居



山内丸山南盛土 集落の中心部

山内丸山遺跡では別々に幾つもあった環状列石墓とひまわり状組石。縄文人の心の支えとして たえず、環の意識があり、また 祖先と一緒に生活するとの意識がり、集落の中時には中心に墓があった。争いのないやさしさの象徴が円環であるとも聞く。縄文の人達が無意識に持っていた円環のイメージが長い年月をかけて 祖先を祭る墓場のストーンサークル そして墓場の象徴としてあった日時計状列石が円環の傍に添えられた。

それが次の時代 幾つかの集落に分散して行く時に、この円環の墓場を同じ祖先を持つ集団の絆を確かめる場としてよみがえらせ、通の墓場・祭式の広場として、丘を削り、巨大なストーンサークルを一機に作り、年に何度となくここに集まり、祭式をおこなった。

ここに縄文の人達の心の象徴としてはっきりと「ストーンサークル」が意識されていく。

東北芸術工科大の赤坂憲雄氏は「縄文の人達の間観 しいては日本人の間観の原点がこのストーンサークルを通して考えられる」という。

山内丸山遺跡の一番高い丘の上へのぼると南に八甲田の峯峰・西に遠く岩木山 東北に下北の峯峰いずれも特徴のある山々がのぞまれ、これら山々に囲まれた台地の林の中に山内丸山の巨大遺跡がみえる。実に素晴らしい自然に囲まれた土地で人々は争いもなく豊かな縄文の時代を育んで行った。

縄文の文化観を変えたこの場所は同時に縄文人の間観・精神そして 日本人の考え方の原点を作った遺跡でもある。

2000.11.1. by M.Nakanishi

4. 山内丸山遺跡 南北に伸びる縄文の「墓の道」

snsnai4print.htm



山内丸山遺跡 南北に伸びる「墓の道」

西盛土の北の端 竪穴住居に隣接して密集した土坑墓があり、3基の「日時計状配石」がある。ここから南の丘へ丘を巻きながらの「墓の道」が伸びている。この「墓の道」の片側には7基の「環状配石墓」が並んで発見された。今から約5000年前 B.C.3000 縄文中期 山内丸山遺跡が最も栄えた時代である。この「墓の道」の断面が切り取られているところへ岡田先生の案内で行った。



集落の中心から南北に伸びる「墓の道」 断面

「黄土色した縄文の地層」とそれ以後の時代の「真っ黒な地層」とがはっきり区分して見える。岡田先生の説明によると 道の部分と自然堆積の部分の差の見分け方は次の通りである。



「縄文の道」の部分では「黄土色 黒色」の変化がはっきりしているのに対し、自然のままの堆積の場合 両方の土が交じり合うため、「少しぼけた黄色」になる。」と。地層の断面の「黄土色」の部分を追って行くと黒と黄土色の混じったぼけた色の境界部と両者の色が交じり合わず はっきり

道の部分 | 縄文時代の表土部

黒い土の下にある黄土色縄文の土【縄文の道断面の拡大】

「黄土色」した境界をもつ「縄文の道」の部分とに分かれる。

4~5M の巾で自然の地層から少し掘り込んで道が作られている。つまりこの縄文の「墓の道」はまわりよりも低く掘り込んで南北に伸びている。「なぜ道が掘り込んで作られたのか」定かでないが、岡田先生の説では、「掘り込むことで雑草などがはえにくくなったのでは?」といわれている。

山内丸山遺跡では 広い「縄文の道」が集落から東西・南北の二つの方向に伸びていた。

また、この道の傍には墓が点々と作られた「墓の道」であったことが判って来ている。

東西の道は南北の道にくらべて 少し広く巾 7~10M 程度 南北の道は 4~5M 程度である。また 東西の道には点々と土坑墓が並ぶのに対し、東西の道には傍らに密集して沢山の土坑墓がある所そして日時計状配石 環状配石墓が並び、この2本の墓の道では様相が少し異なっている。

山内丸山遺跡ではこの色々なタイプの墓の存在から「もう縄文のこの時代には階級が存在していたのでは?」と岡田先生は考えている。

また、延々と土坑墓続く「墓の道」。

なんの根拠もないが、この「墓の道」そのものも「ストーンサークル」の環状列石ではないか?

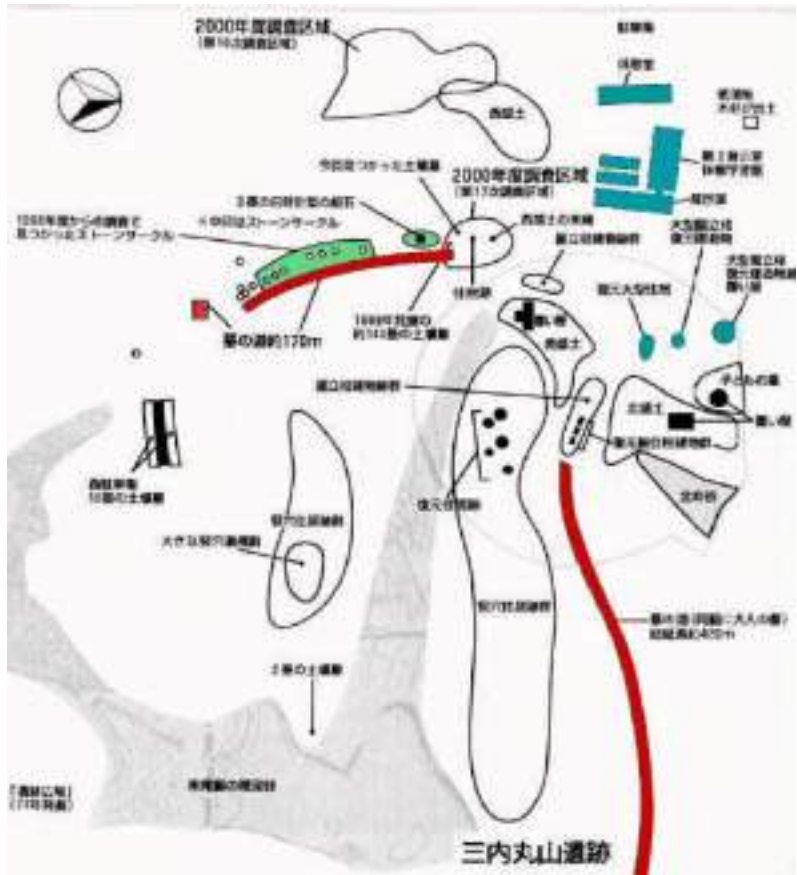
集落からでた東西・南北の2本の「墓の道」がぐる

っと墓場や居住区を巡り、ひとつにつながるとすれば「環状につながる墓地 ストーンサークル」そのものではないか.....

何となく「墓の道」を考えるとそんな気持ちになってきた。

まだまだ、勉強不足で考えが及ばないが、縄文の丘に立ち、ゆったりとあかねにそまってゆく夕日をながめていると気分爽快 リフレッシュされた気分になってくる。

本当に静かではあるが、いつもパワーを与えてくれる遺跡である。



「縄文のストーンサークル」の原型
山内丸山遺跡の「ストーンサークル」と「墓の道」 探訪
「完」

縄文のストーンサークル

D. 「伊勢堂岱遺跡のストーンサークル」探訪

秋田県鷹巣町 2000.9.15.

dodaiprint.htm by M.Nakanishi 2000.11.1



米代川の上流 鹿角市大湯のストーンサークルから 少し下ってきた秋田県鷹巣町に大きな「縄文のストーンサークル伊勢堂岱遺跡」が発掘されている。

大湯のストーンサークルの環状列石には墓整然と並んであるのに対し、青森県小牧野遺跡の環状列石では、特徴てきな石組でストーンサークルが構成され、その下には墓がない。これらの中間的な性格を持っているのが伊勢堂岱遺跡のストーンサークルと言われている。

8月に大湯のストーンサークルに行ったときには行程の調整つかず、行くのをあきらめた遺跡である。

9月15日 青森 山内丸山・小牧野遺跡のストーンサークルを回るスタートとしてまず、この伊勢堂岱遺跡から訪問する事とした。前回交通事情に泣いたので今回は飛行機で鷹巣町を訪問し、それから車で青森へ出ることとした。



地図を見ると能代市・鷹巣町・大館市の兆度中間の丘陵地に「秋田北空港」があり、この空港からすこし鷹巣の方へ行った丘陵地の端 米代川に隣接して伊勢堂岱遺跡が見える。この空港開設の取付け道路を作る過程で本遺跡が発見され、発掘頂さが続けられている。

八幡平・秋田駒ヶ岳から北へ流れ出た米代川が山間を抜け鹿角で行く手を阻まれ、ここで北からながれてくる川とここで合流して、大きく西に流れをかえる。そして、大館・鷹巣と山間の盆地を縫って能代で日本海に注ぐ。

大湯のストーンサークルはこの米代川が大きく西に流れをかえる鹿角の合流点のすぐ上の丘にあり、今回訪問した伊勢堂岱遺跡はそこから約40km西へ下った鷹巣町の外れの丘の上にある。

日本海沿岸にいた縄文人が縄文後期約4000年前にこの米代川を遡って内陸に移り住んで行ったに違いない。前回大湯へ行った時も感じたのですが、山間をぬって流れる米代川はスケールの大きい大河で

ある。鹿角の盆地といい、鷹巣の盆地といいまわりは山又山。川沿いの台地に集落を構え、森と川の恵みで生活が成立っていた。古代には食料を得る重要な川であると同時に重要な交通路であったろう。米代川にかかる橋から見る伊勢堂岱遺跡は盆地から見ると一番よく見える一等地である。

朝一番の飛行機で秋田北空港へ。正解でした。空港から鷹巣町の方へタクシーで約 15 分のところ。鷹巣の街から米代川を渡った田園地帯 米代川を見下ろす丘陵地の高台に遺跡がありました。

もっとも 遺跡を見学した後、鷹巣の街から青森へ行こうとしましたが、それが全くだめ。汽車午後までバスも全くなし。

鷹巣は昔は秋田内陸の奥の奥と思っていましたが、やっぱり今もってダメ。特に青森へは奥羽山脈錠が関の峠を超えねばならず、また盛岡へは十和田・八幡平の山々が壁を作っており、県境の壁の凄さ今もって感じました。東京へ帰る方が近いです。

1. 「伊勢堂岱遺跡 ストーンサークル」探訪



台地の北の端に入口があり、西へ向って 真っ直ぐ丘に登って行く広い幅の道がつけられ、遺跡の丘に登って行く。恐らくこの道が空港から鷹巣へのアクセス道路になる予定だったのだろう。この広い道を昇って行くと平らに整地された広い台地があり、この左右に良く整備された環状列石 A,C がありました。右側の環状列石 A は 25Mx30M。左側の環状列石 C は直径 40M。そしてこの列石のまわりには整然と掘立柱建物が整然と並んで発掘されている。



【伊勢堂岱遺跡 環状列石 A&C 遺跡入口側から】





【 伊勢堂岱遺跡 環状列石 A&C 遺跡奥から 】

どちらの遺跡も大量の石で円環が作られているが、石の大きさ形はばらばら。
特に列石 C では大きすぎて環状が把握しにくい。この掘立柱建物跡も同時代の大湯や小牧野遺跡と同じく生活の兆項はみられず、やはり集落は別の場所にあったと考えられています。

環状列石 A



環状列石 C



きっちりと整備され、遺跡の詳細な説明板が建てられており、ゆっくり思うがままに歩く事が出来ましたこの遺跡のストーンサークルもまわりの森によって視界がさえぎられ、あたかも縄文の森がそのまま再現されているような静けさの中にある。

道具のなかった時代に大規模な土木工事をほどこし、このような環状列石の墓をきずき、集落の人を自

分達の祖先が集っているここに埋葬し、折にふれ、祭を行ない、祖先を同じくする人たちの絆を強くしていたと考えられる。このストーンサークルを中心とした祖先との絆 集落の人達との絆 それが「縄文の人達の心」を知る大きな手がかりといわれている。

これら ストーン サークルを作った集落は大湯・小牧野の場合もそしてこの伊勢堂岱遺跡の場合も解明されていない。どこに集落があったのか 非常に興味のある所である。

誰もいない森の中 一人たっているとひょいと宇宙人でもあらわれてくるような錯覚に陥る。

2000.9.15. 秋田県 鷹巣町 伊勢堂岱遺跡にて

7.2. 縄文のストーン サークル 探 訪 【完】

7.3. 『 縄文人の心を映すストーンサークル 』

oyu6.htm by M.Nakanishi



鹿角市 大湯のストーンサークル

そもそも 縄文のストーンサークルとは何なのか... ..

ストーンサークルはこの米代川沿いの海岸段丘の上など東北地方を中心に日本各地で縄文後期の遺跡として発見されている。

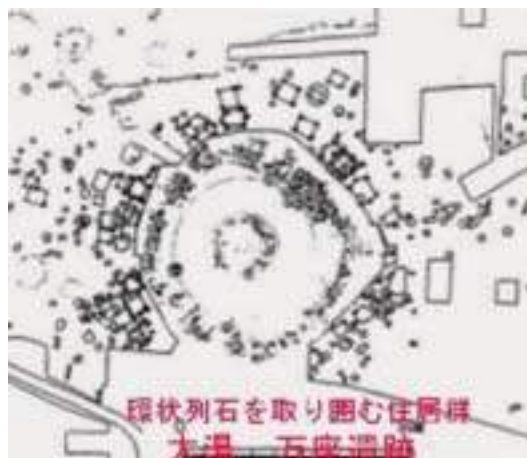
昔から多くの説があったが、今はほぼ墓地および墓地を中心とした祭りの場とする説が有力である。

また、縄文人が天体の運行を知っており、ストーンサークルの形態や場所そして日時計状の石組など星や太陽の運行を知っていて、ストーンサークルを作ったとも言われている。

数多くのストーンサークルが発掘され、円環の中や石組の下から墓が見つかり、縄文人の暮らしと直結した墓場または祭祀の場と考えられている。

赤坂憲雄氏はその講演の中で、「数々の縄文のストーンサークルから、縄文人の心の奥を読み取ることが出来る。それがずっと受け継がれ、日本人の心を形成しているのではないかと... ..」と講演。

縄文人の人間観とストーンサークルの形態の変化について、ご自分の研究の結果を解説され、深く感銘を受けた。縄文人の集落では、ストーンサークルが形成される縄文後期以前から、集落の中心部に広場があり、その広場を中心に同心円状に生活空間が広がっている。竪穴式住居が取り囲み、貯蔵穴やゴミ捨場などがある。墓場もこの同じ、生活場所の中にあり、死者と共に生活をする。



大湯 万座遺跡

ストーンサークルを取り囲む建物群

そして、縄文後期 集落が大きくなってくるとそれらの集落が分化して行く過程でストーンサークルが色々な形態を取って現われてくる。

米代川の河岸段丘にある秋田県伊勢堂岱遺跡やこの大湯万座遺跡などの縄文のストーンサークルではストーンサークルの円環の石組みや内環と外環の間などから墓が発掘されている。

そして、このストーンサークルの周辺部からは円環状に規則的に並んだ竪穴住居あとや土器など多様な遺物が発見されている。発見された住居跡が生活の場であったかどうかは非常に興味のあるところであるが、現状では生活の痕跡は見つかっていない。死者を弔う祭礼の建物跡と考えられている。

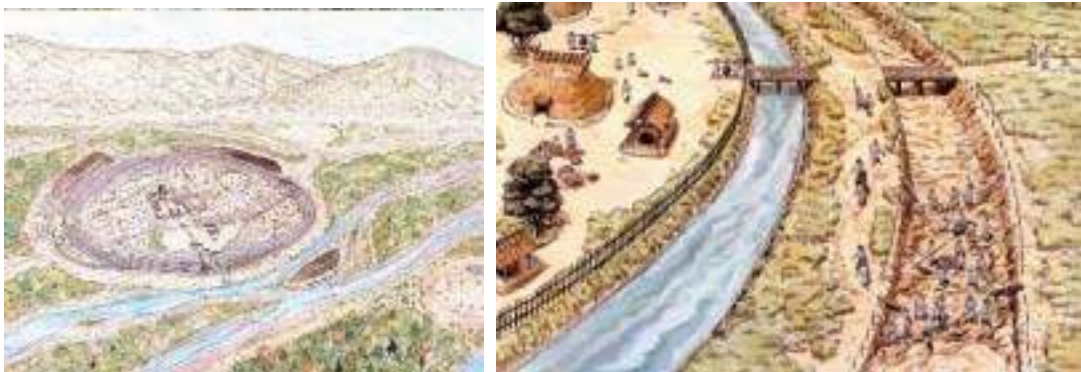
生活の場の中心に墓場が置かれていた時代から 集落分化の時代に集落統合の精神的中心として墓場を持ったストーンサークルが置かれる。

このストーンサークルの広場では分化した集落の人達が集まり弔いの祭や祭礼が祖先の霊と共に進められてきたと考えられている..

縄文人の意識・人間観として「先祖・死者に対する敬愛の念」「定住をはじめた縄文人の仲間意識」がストーンサークルを作り、「誰でも受け入れる争いのすくない穏やかな生活」それがストーンサークルの形になって完成されたのでは・.....と考えたい。

(赤坂氏の講演をそんな風に受け取った。)

一方、 弥生の村村では、環濠で囲まれた生活の場とこの環濠の外に墓場があり、生活の場と墓場とははっきり区別されており、そこには大きな人間観の差がある。



【環濠で囲まれた弥生の村】

青森小牧野遺跡でも、生活の場とは異なる場所にストーンサークルが作られている。その場所は二つの川に挟まれた尾根筋の高台を意図的に削って作られている。恐らくは集落からは、何時も墓場を意識出来る場所として選択し土木工事を行なったに違いない。

例えば 集落が大きくなり、分化する時のもう一つの形態として、生活する場所とは別に、そのそれぞれが共に集い、祭祀を行なう共通の場として形成されたものと考えれば弥生の墓場の考え方とは大きく異なっている。「生」の世界と「死」の世界の分化がはじまったと考えるにしても、その根本はむしろ大きくなった集落の意識を繋ぐ絆として、また、祖先を弔い祭る墓場と一緒に生活するとの意識の中で、墓は特別な場所として意識の中の村の中心にあったのではないだろうか...

年に何回かこのストーンサークルに人達が集まり、祭祀を一緒に行なった場であったに違いない。死者に対する「穢れ」のイメージが全く見られないと言われる縄文人の人間観がこの縄文のストーンサークルと自分達の集落の住居配置に結実しているといわれる。

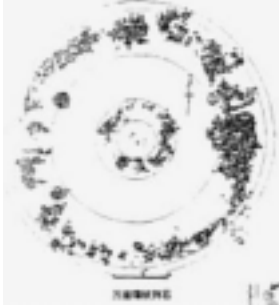
環濠によってはっきりと「生」と「死」の世界を区別し、「死」の世界を「穢れ」と意識した弥生人の人間観とははっきり異なり、したがって、弥生人の生活が始まるとこのストーンサークルも消滅する。「円環の不思議な魅力」 縄文人の心のふるさとの思いがこのストーンサークルこめられているような気がする。

「争いや穢れの意識のない」縄文人と「戦い・争いが始まり、穢れ・差別の感情が生じてくる」弥生人との間には、気質・人間観の大きな変化がここに生じている。

「日本人のやさしさの秘密がこのストーンサークルにあると考える人は多いし、また、東北に今も残る座敷墓の風習なども同じ流れと理解できるのではないか?」と赤坂憲雄氏は講演された。

【 縄文のストーンサークルと石組 】

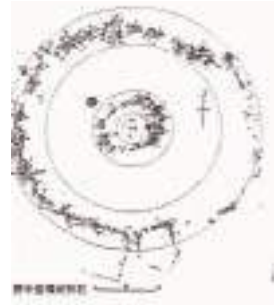
万座遺跡



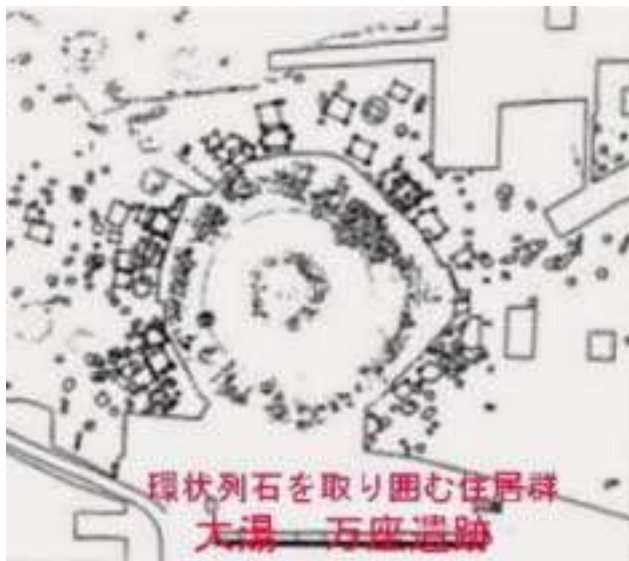
〔大湯 ストーンサークル〕



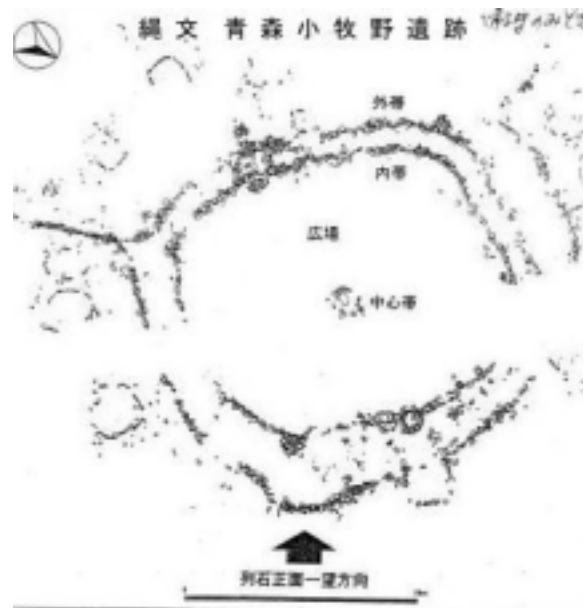
野中堂遺跡



【 ストーンサークルの二つのタイプ 】



ストーンサークルを取り囲む竪穴住居群
〔円環の下に墓がある type〕



b. 住居跡がない 青森小牧野遺跡
〔円環の下に墓がない type〕

7.4. 岩木山北山麓 津軽の古代製鉄地帯

鬼伝説の里から 縄文人へ

oyuprint.htm

東北の縄文人が作ったストーン サークル。 祖先を敬い自分達の村の絆の中心にあったストーン サークル。 このストーンサークルが多数ある東北 秋田・津軽は次の時代『産鉄の民』のふるさと。 縄文から弥生へ。 ストーン サークルを作った縄文の民と鉄を持ち込んだ弥生の民との出会い そして紛争。 そんな中から 各地に残る産鉄の民の『鬼伝説』。

縄文の民は『穢れを知らない争いのないやさしい民』。 一方 各地に残る多くの鬼伝説の中で 津軽の鬼伝説は農耕の民やその土地の民と交流をもつ『心やさしい鬼』。 縄文から弥生への移行の中で 脈々と続く『日本人の心・日本人の精神的支柱』がこの土地で 鉄を媒介に醸成されていったのではないだろうか・・・ 人っ子一人いない静かな森の中 ストーン サークルの中に立つと不思議に岩木山北山麓の『鬼のふるさと』が思われてならなかった。

弘前から鱒ヶ沢にかけて岩木山北山麓の幾重もの沢筋は古代の大製鉄地帯であり、『津軽の鬼伝説の里』と重なる。

弘前市鬼沢・鬼神社 「弘前市赤倉・岩木山赤倉口」 「弘前市十腰内・巖鬼山神社」「鱒ヶ沢市湯舟・湯舟神社と空沢製鉄遺跡」などである。

前の晩に「弘前ねぶた」を見学したが、真っ暗な中で笛と太鼓のリズムにあわせ躍動する「ねぶた絵」の迫力はその色とあいまって、灼熱の鉄のイメージがびったり。

思っても見なかった「鬼沢のねぶた」に何の根拠もないが、古代渡来人がこの津軽の地で起こした製鉄の祭と重ね合わせていた。まだ、朝もやの中にあるこの岩木山北山麓の沢筋の村村を訪ね昔に思いを馳せた。

何処からこの製鉄の民はやって来たのか また この地の鬼伝説が通常の「悪い鬼」ばかりでなく民を助ける「良い鬼」の伝承をしているのは 津軽に住んできた人達のやさしさか.....。

だとしたら それはこの地が早くから「争いのない排他性を持ち合わせぬ」縄文人が開いてきた土地だからだろうか・・・.....。

原生林の中、誰もいない巖鬼山神社に一人立ちそんな事を考えていた。

「縄文人の系譜が連なる産鉄の民」東北にそれを感じている。

岩木山の北山麓鬼伝説の郷 何処までも続くリンゴ林の中の本道が弘前へひきかえした。

今回の東北 walking の締めくくりは 秋田鹿角「大湯の縄文のストーンサークル」探訪。 ねぶたが飾られた弘前駅を鹿角花輪へ向かった。

【秋田・青森 縄文 の ストーンサークル 探 訪】

【完】

8.

「弘前ねぶた」と岩木山北山麓「鬼伝説の里」

「鬼沢・鬼神社」・「十腰内・巖鬼神社」

2000.8.3-4 onisawaprint.htm by M.Nakanishi

【鬼沢のねぶた】



【岩木山 赤倉口】



8月東北は祭の季節。

弘前ねぶたと秋田・大湯のストーンサークルに接したくて、8月3.4日の休みを利用して日朝早く東北へ飛出した。今回津軽 walking の目的は古代の製鉄地帯であり、ねぶたの発祥の地でもある岩木山山麓弘前・五所川原のねぶたを見て、古代製鉄のエネルギーをねぶたに感じる事が目的。

赤坂先生編集の「東北学2」に鬼沢・鬼神社の祭礼のきれいな写真が紹介されているのを発見。ねぶたを見て、岩木山北山麓の古代津軽の大製鉄地帯に伝わる鬼伝説と関係する鬼神社・巖鬼神社を訪ねる予定を組んで出かけた。

2000.8.3, M.Nakanishi 訪問記

【 内 容 】

1. 「弘前ねぶた」
2. 「鬼沢のねぶた」出陣へ
3. 岩木山の鬼伝説
4. 鬼神社 巖鬼山神社を訪ねて

8.1. 弘前ねぶた



8月3日夕方 盛岡-弘前の高速バスで弘前に到着。駅には「弘前ねぶた」が飾られ、観光客を迎えてくれるが、もっと混雑を想像していたが、予想外。

むしろ青森「ねぶた」観光列車が出たり、駅員はそのPRに忙しい。もっとも、五所川原・弘前とも「ねぶた」で宿をとるのはむづかしい。やっと弘前公園の近所の街中の旅館に宿が取れた。

五所川原の「ねぶた」は高さのあるおおきな「立ちねぶた」として有名でひそかに見ることに期待していたが、今日は前夜祭で火は入るものの運行なしとのこと。ゆっくり弘前のねぶたを見ることにした。



午後7時夕闇せまる弘前城のお堀端から運行がはじまった。例の「ねぶた」の囃子とともに扇型のねぶたが一斉に動き出した。

巨大な太鼓の上にも打ち手がまたがり、太鼓の上下から打ちたたき凄い音とリズムをだしている。

津軽じょっぱり太鼓というそうだが、この強烈な音とリズムを伴走に中国三国志等の絵が描かれた「ねぶた」が多次から次と繰り出される。

その数50を越える連。ねぶたの総数優に100を越える。



弘前ねぶた

弘前の「ねぶた」は扇形で、一つの連では、小さなねぶたを先頭に大小幾つものねぶたを出し、一番最後に大きなねぶたと大きな太鼓とその打ち手を先頭にした囃子方が続く。

それらのねぶたの大きさに応じて その引き手・担ぎ手も小さな子供達から大人まで、いろんな年齢の人が一つの連を組み行進する。

このねぶたの共同運行に参加することを「出陣」という。街や集落のあちこちに「出陣」の登りがひるがえり、それぞれの街が、「ねぶた」を出していることをほこっている。

日が落ち暗くなると引き手や周りの建物の影が消え、囃子の主役である太鼓とねぶただけが浮かび上がり、太鼓を中心とした囃子に乗って、時々「トウリヤートリヤ」の声が掛けられる。また、表には三国志等を題材にしたねぶた絵が描かれ、裏面には美人画が描かれる。このコントラストもおもしろい。この表・裏面の絵を見せる為、この扇型の部分を引き手が回転させると見物している人達からパチパ



と拍手がおきる。青森ねぶたのあの「ハネコ」はいないが、太鼓のリズムは強烈だし、都会では消えた津軽の街のエネルギーを感じると同時に実に美しく楽しい祭である。また、弘前の街の性格から来るのが良く判らないが、殆どの連が地域・地区の連で、他の観光化した祭に見られる企業の連とそのPRの連は少なく、絵もほぼ伝統のねぶた絵にまとめられており、手作り・地域の人みんな楽しんでいているといった風が色濃く守られている。例えば幼稚園のグループが沢山出陣

していたが、小さなねぶたに子供達の今のキャラクタがまじっているが、ほほえましく全く違和感がない。



次から次と連がくりだし、横丁を歩くと運行に参加するねぶたが順番待ちであふれている。少し離れて町をみると祭りのさなかであるが、どこも普通にいつもとかわらずと言った風。街も人も特別な風ではなく、みんな楽しみで仕事を終え、ねぶたに参加するため、三々五々集まっている。そうでないといつまで7日間もつづかない。

また この祭はどこかの神社の祭礼といったものでなく、みんなで夏を楽しんでいる。後で知ったのであるが、街の中心部だけでなく近郷の集落もみなそれらの集落で準備し、この弘前の街の中心の運行に参加すると言う。

運行の丁度真中あたりで、明日出かける「鬼沢」集落の連が「鬼伝説の里・ねぶた」として登場。びっくりした。地図で言うともう弘前の外れ、街から岩木山の麓を鱒ヶ沢の方へ車で約30分のはず。随分遠く離れているのに。

後でわかったのだが、鬼沢の里は今も「鬼」を大事にするおおきな集落であった。

観光化せず、周りの集落も含め、老いも若者もそして子供たちもみんな、年に一回、弘前の街の中心にあつまって楽しむ手作りの祭それが「弘前ねぶた」。

都会では消え去った地域のつながりを強く感じました。

8.2. 「鬼沢ねぶた」出陣



丁度運行の真中あたり、「鬼伝説の里 鬼沢」と浮かびあからせねぶたを先頭に「鬼沢ねぶた」の連がやって来た。大きな連である。

私の頭の中では、何の根拠もなく、津軽のエネルギーを「ねぶた」と「たたら・鬼伝説等古代からの文化」とをだぶらせて考えていたが、ストレートに「鬼沢の集落が鬼伝説の里として」ねぶたの運行に加わっている事に意外で少なからず感動した。



鬼沢は弘前の街から西へ鬼が住むと昔から伝えられる岩木山北山麓の赤倉山麓を鱒ヶ沢へ続く一本道を車で約30分。古代の集落遺跡や古代の大製鉄地帯の端にあり、次の鬼伝説があり、さらに4,5扣進むと弘前市の端「十腰内」。

この十腰内から鱒ヶ沢にかけては既に紹介した古代たたら遺跡が残る古代たたら中心地であり、古代遺跡ばかりでなく、有名な鬼伝説「鬼太夫伝説」や地名に古代たたら製鉄の基地としての痕跡を色濃く残している。

8.3. 岩木山の「鬼伝説」

【岩木山北山麓赤倉側 古代製鉄地帯の鬼伝説】

1. 鬼沢の「鬼伝説」

**** 津軽 岩木山麓 鬼沢に伝わる「鬼伝説」 ****

青森県 弘前市 鬼沢

昔々このあたりはやせた荒れ地で、作物の実りはきわめて悪かった。

そこへ、岩木山の赤倉から下りてきたという鬼が現れ、せっせとこの荒地を耕し始めた。

村人達は、これを見て、ただの鬼ではないと思い、開墾の困難と農業用水の必要を 鬼に訴えた。すると鬼は、それでは力を貸そうと言ったきり、姿を消してしまった。

翌朝になって村人たちが行ってみると荒れ地には、一筋の水の流れが勢いよくほとばしっているではないか。

村人たちは、さっそくその水を田に引き、以後、その水は干ばつの時も決して枯れることはなかったという。

村人たちは、非常に喜んで、鬼に感謝するため、神社を建立して「鬼神社」と名づけ、村の名前も「鬼沢」としたという

節分に豆をまかないという

2. 鬼神太夫伝説

***** 岩木山北山麓の「鬼太夫」伝説 *****

鱒ヶ沢町 湯舟 湯舟神社 弘前市 十腰内 巖鬼神社

昔 鬼神太夫(鬼)と呼ぶ剛力の刀鍛冶がいました。

桂山の刀鍛冶長者の娘を愛して、娘をくれるようにと申し込んだ。

困った長者は一策を案じ、一晩の内に拾腰(本)の刀を鍛えたら娘をやると約束した。すると、鬼神太夫は一晩の内に、全部刀を鍛えて持ってきたが、長者が一本盗んで鳴沢川に捨ててしまった。

それで、鬼太夫は刀が一本足りず、娘を貰えずあきらめて、

「十腰無い十腰無い」とつぶやきながら、さびしく去っていった。

それで、それ以後この地を「十腰無い」がなまって「十腰内」というようになった。

その後、鬼長者の妹娘と結婚した鬼神太夫の弟が、ある日のこと

鍛冶場の片隅に残っていた玉鋼を見つけ、刀鍛冶の兄が打ったものであると打ち明け、その玉鋼を氏神として八幡様に祭った。

長者が亡くなる時姉娘には形見として湯舟(鉄を冷やす水を入れた船)をやり、分家させた。また、妹娘には金敷(鉄を打つ台)をくれた。

それが湯舟村 金敷村の起こりとなった。

また、長者が刀を捨てた刀が浮いた所を「浮太刀」と言うようになった。

今の「浮田」である。

なお、鬼神太夫の打った刀の一本が今も岩木山 巖鬼神社に祭られているという。

「ふるさと あじがさわ」より

なお、このような鬼太夫伝説はほかにも日本各地にあり、鍛冶屋などが、実在の名刀 工などに鬼神の名をつけた伝説を作り広げたと言われている。

8.4. 赤倉山山麓に鬼神社・巖鬼山神社を訪ねて



岩木山北山麓のリング畑



鬼沢・鬼神社



十腰内 巖鬼山神社



赤倉口近傍 岩木山

1. 十腰内 鬼の総元締 巖鬼山神社
2. 鬼伝説の里 鬼沢 & 鬼神社

8月4日の早朝 弘前から鱒ヶ沢まで、岩木山北山麓に広がる赤倉側のに残る鬼伝説を訪ねるため、バスターミナルへ行った。予想していたとは言え、「一番奥の巖鬼山神社のある十腰内を通る鱒ヶ沢行 次は2時間後。鬼沢までは、約1時間後にある」との返事。

まあ、「岩木山山裾 鱒ヶ沢への1本道。何本かバスがあるかも」の淡い望みはダメでした。「バスだと約1時間。タクシーで約30分。」の話をついにタクシーにする。

タクシーの運転手氏に「岩木山の赤倉の集落を通して 一番奥の十腰内の巖鬼山神社に行き、引き返して鬼沢の鬼神社でおろしてほしい」と目的を伝えると「まあ 物好きな」と笑いながら「それでも 1年に数組 同じように鬼伝説やたたら製鉄遺跡を訪ねて、この赤倉側から鱒ヶ沢まで案内する」と。

岩木山北山麓は古代から開けた土地。この地では、岩木山の峰の一つで昔から鬼が集団で住んでいるといわれる巖鬼山(赤倉山とも言う)がその急峻な山裾を津軽半島にむかって伸ばしている。

そして、昔からこの赤倉山側の山裾から巖鬼山を通して頂上への険しい道が通じ、その入り口近傍の十腰内の山合の地に岩木山神社の元宮である巖鬼山神社がある。

岩木山神社のある百沢口が開かれるまではこの赤倉側の道が岩木山への本道で、古代より広く人々の信仰を集めている。

このあたり幾筋も伸びる沢筋からは古代から製鉄がおこなわれ、鉄滓や製鉄炉跡等が発見され、この地が古代津軽の一大製鉄地帯であることが判って来た。

その中で、十腰内から山裾の沢筋をすこし鱒ヶ沢の方に下った鱒ヶ沢町湯舟は十腰内や巖鬼山神社と共に、鬼神太夫の伝説の中心地である。

また数々の製鉄遺跡も発見されている。

鉄滓や羽口とともに100を越える製鉄炉や木炭炉の跡等が発見された空沢遺跡はここにある。

参 考 津軽岩木山北麓の古代津軽の大製鉄地帯と鬼伝説

う鬼伝説の里「鬼沢」は十腰内から3つほど集落を弘前の方へ戻ったところ。この鬼をまつる鬼神社は巖鬼神社を本社とする末社。

このように岩木山北山麓赤倉側の山合には、鬼伝説が広くつたわり、古代から渡来した産鉄の民が鉄の王国を築き、大和勢力と対峙する蝦夷の本拠地であったと推定されるが、まだ確たる証拠はない。

1. 十腰内 鬼の総元締 巖鬼山神社



弘前から街を出て、岩木川を渡り、岩木山山麓にさしかかるあたりからは、一面のリンゴ畑。リンゴの実をつけているもののまだ、青く熟した真っ赤な実になるには数ヶ月かかるだろう。

リンゴ畑の一本道を走るが、岩木山は霧の中で全くみえず。出発して 15 分ばかりすぎると岩木山の外周道路にでて、山麓が見えるほどに山が近くなる。赤倉の集落である。岩木山の輪郭が霧の中に薄っすらと見え、霧で埋まった幾筋もの谷筋・沢筋がみえ、いよいよ山の中に入ってきた。

赤倉から 10 分ほどさらに走り、鱒ヶ沢への道と別れ、巖鬼山神社への別れを山の中へと原生林の中に入っていくと谷筋の出口に巖鬼山神社が立っていた。



巖鬼山神社の中は鬱蒼とした谷間の森で、小さな社殿の横には千年を越える杉の巨大樹が天空にそびえ、古代から鬼伝説の世界をずっと眺めてきたに違いない。

本殿のすぐ西側の沢筋には、「龍神」がまつられている。深い樹木につつまれたこの沢筋からは一筋のきれいな水が流れおち、龍神とが重なり、産鉄の民が古くからこの谷筋でも、「製鉄をやっていたのでは?」と思えるような沢すじ。

おそらく境内の 2 本の杉の巨大樹はそれをじっと見てきたのでは・・・と想像を膨らませている。

誰もいない鬱蒼とした原生林の中にひっそりと「巖鬼山神社」がありました。
でも「鬼の総元締の神社にしては明るい」と感じました。



千年杉の巨木 原生林につつまれた本殿 千年杉と本殿 本殿そば龍神を祭る沢筋

巖鬼山神社の中は鬱蒼とした谷間の森で、小さな社殿の横には千年を越える杉の巨大樹が天空にそびえ、古代から鬼伝説の世界をずっと眺めてきたに違いない。

本殿のすぐ西側の沢筋には、「龍神」がまつられている。深い樹木につつまれたこの沢筋からは一筋のきれいな水が流れおち、龍神とが重なり、産鉄の民が古くからこの谷筋でも、「製鉄をやっていたのでは?」と思えるような沢すじ。おそらく境内の2本の杉の巨大樹はそれをじっと見てきたのでは・・・と想像を膨らましている。

誰もいない鬱蒼とした原生林の中にひっそりと「巖鬼山神社」がありました。
でも「鬼の総元締の神社にしては明るい」と感じました。

2000.8.4, M.Nakanishi 訪問記

2. 「鬼伝説の里」 鬼 沢 と 鬼 神 社

待たせたタクシーに乗って巖鬼山神社から約 10 数分。弘前の方へ引き返す。来るときに通った道から一筋北側のバス道を2,3の集落の家並をすぎると大きな明るい集落に入った。

山裾の村というより、大都会弘前のベッドタウンといった感じの前後を沢筋で区切られた明るい丘陵。それが鬼沢であった。もっと暗い山合の小さな集落をイメージしていたが、まったく異なる。これだけ大きければ、昨日の大きな鬼沢地区ねぶたの出陣もうなずける。

鬼伝説の鬼神社は、こんな街中の小さな森の中にひっそりありました。

「鬼が灌漑用に堰を築いて水不足をすくってくれた鬼沢」の伝説によって、いまも地域が一つにまとまれる鬼沢といったイメージを昨日の鬼沢のねぶたと重ねています。



鬼神社鳥居 鬼伝説の里 「鬼 沢」の集落 弘前市鬼沢 鬼神社社殿



【鬼神社 社殿正面に掲げられた農機具の献額】

鬼を祭る鬼神社の本殿の軒下には本殿正面も含め、ぐるりと幾つもの鉄製の農機具が献額として奉納されていました。

鉄の農機具を使って一夜にして、堰をきず[°]いて村の人たちを救った鬼の伝説からすれば、鉄の農機具は鬼つまり、産鉄の民の象徴といえます。

また「たたら民」と農民との深い結びつきを現わしているとも言えると考えます。

赤坂憲雄氏編集の「東北学 vol.2」には内藤正敏氏の「赤倉山の鬼神 津軽・鬼神社民俗誌」が収められ、鬼神社や巖鬼山神社などに伝わる貴重な民俗を整理している。

鬼神社では、鉄製の古い農機具がご神体として奉られている事や古くからの神事と鬼伝説との関係やこの地帯の製鉄と鬼や鬼伝説との関わり等が整理されている。

鬼神社の神事の中で、この農機具が吉凶を占うきわめて重要な役割を果たしている事がしめされており、長年にわたり、多くの農機具が献額として奉納されるのもうなずれる。



【鬼神社の神事 & 獅子舞】赤坂憲雄編「東北学2」より

津軽岩木山北山麓の古代製鉄の地を歩いてみて、もっと山奥まで立ち入り、もっと暗いイメージがついてまわると想像していたが、「鬼沢ねぷた」といい、鬼神社と鬼沢の集落といい、十腰内から鱒ヶ沢に連なる製鉄の村村いずれも想像とは別の明るいものでした。案内してくれたタクシー運転手氏いわく「良い鬼の伝説の地」が象徴的でした。

2000.8.4, M.Nakanishi 訪問記

「弘前ねぷた」と岩木山北山麓「鬼伝説の里」
「鬼沢・鬼神社」・「十腰内・巖鬼神社」

〔完〕

9. 山口県の『たたら』遺跡

9.1. 山口県美祢市 河原上 たたら製鉄遺跡

9.2. 福栄村 大板山 たたら遺跡探訪



9.1. 山口県美祢市 河原上 たたら製鉄遺跡

1996.10.10



河原上製鉄遺跡



美祢市と秋芳町の境 たたらの山 花尾山

秋の日差しの強い午後。兼ねてより聞いていた美祢市の北 花尾山へ登る。

この近辺は大理石・石炭だけでなく、銅などの金属鉱山が古くからあり、すぐ近所的美東・秋芳町との境には古い時代に「銭」を鑄造した場所も残っている。

また、この山の南の山の本当に山奥のどん付には「たたら」の地名が 500 万分の 1 の地図に載っている。ひょっとして この地にも「たたら製鉄」の痕跡があるに違いない。

名水百選にも選ばれた花尾山の湧き水「別府池」のすぐ西隣の谷を川沿いに入ってゆく。

さらに、人家も途絶え、道も砂利道 ダムと池を過ぎ、杉林の中をどんどん林道をあがってゆく。

山道になって約 30 分。うっそうとした杉林の中、思いもかけず、山を背に幾段にも組まれた石垣の跡が見える。近くに谷川も見える。各地の沢筋でみた見た「たたら」の跡に近い。近づくと「河原上製鉄遺跡」の白い標識の杭が建っていました。美祿市と秋芳町の境の花尾山の南の山の中で、もう誰も住んでいない奥である。思いもかけずの 美祿でのたたら遺跡の出会いであった。

「かな流し」の谷川もすぐ横にある。

おそらく そんな古い遺跡ではないが、しっかり、山の中に「たたら」場の遺構が残っている。明治・大正・昭和の初期まで、多くの人が行き来をした賑わいがこの山奥まであったに違いない。恐らく何年か前に発掘調査がきっちり行なわれたのであろうが、美祿の街で聞いた事がない。

今は全く山の中に打ち捨てられ、完全に賑わいの在った事も製鉄遺跡があることも完全に忘れられている。「たたら製鉄遺跡」は、どこもそうだが、本当に山奥の奥 かつての賑わいが信じられない場所に大きなたたらの集落が形成されていた。

それが、置き去りにされ、忘れ去られるか、または 開発の波に根底から掘り返され、跡形もなくなってしまうかしているのが、現状。鉄の生産には多くの人に関わり、出来たものが遠くに運ばれたに違いない。それは弥生時代から連綿と続く「人の流れ・文化の流れ」であり、華やかな往来と賑わいがあったに違いない。

今 ここに立ってもまったくそれはわからないが、..... 「たたら」は間違いなくその証人といえる。



1996.10.10. 美祿にて 中西睦夫

9.2. 山口県 福栄村 大板山たたら遺跡

隠れキリシタンの里のさらに山奥の「隠れたたら」

1993.10.17. By M.Nakanishi



1993.10.17. 平成5年 10月17日

1993年の秋 新聞に掲載された記事から、山口県と島根県の県境に近い福栄村の山中に「たたら遺跡」があることを知りました。

山口県は山又山で、私の住んでいた美祢市も丁度日本海と瀬戸内海との真ん中の山の中の盆地なのですが、そこから秋吉台の山を越え、そこから日本海の海岸沿いに島根県益田へ続く低い山並が延々と続く。

この山並の北側 日本海側には 萩 須崎などわずかに海岸沿いの平地があるが、リアス式の海岸がつづく。地層が層状の断崖となって見られるフォルンフェルツもこの須崎の海岸にある。

また、一方 この山塊の南側と中国山地主稜線の山並の間にはさまれて山口から徳地・津和野へと続く狭い平野がある。日本海とこの狭い平地の間にはさまれた低い山並に点々と旭村・川上村・福栄村・むつみ村・阿武町への山村がつながる。



むつみ村鍛冶屋の交差点・キリシタンの隠れ里・大板たたら遺跡への山合いの道

萩市に流れ注ぐ阿武川沿いに阿武川ダムへ遡り、奥長門峡を越えてゆくと福栄村に入る。途中 むつみ村の山間の交差点には「鍛冶屋」の地名があり、最近まで鍛冶屋が会ったという。

瀬戸内・山口市側からも 日本海・萩から福栄村に入るにはどこからも人里端なれた山地を越えてゆかねばならない。北に萩 南西に山口 東に津和野の街を控え、山によって隔絶された土地で 古くは平家の落人伝説 迫害を受けたキリシタンの隠れ里という。実際交通の良い瀬戸内海側や美祢から行くと山又山を越えて越えてのところであるが、山に囲まれた明るい台地が広がっている。



この福栄村を縦貫して流れる大井川を遡って その水源近く人の気配の全く無い山中 鬱蒼とした森に包まれた山裾に「大板山たたら遺跡」がある。

又、この遺跡にいたる途中明るい田圃が広がる台地の集落「紫福」は迫害を受けたキリシタンの隠れ里と言われ、『キリシタンの理想境「至福」の地』からこの来ているといわれる。

キリシタンの隠れ里 福栄村「紫福」

山口のキリシタンといえば明治の初め津和野の乙女峠で殉教した 36 人の信徒が思い浮かぶが、山口は戦国時代キリシタン大名として栄華を誇った大内氏の領地であり、津和野・山口に近い隠れ里であるこの山間の台地には、あちこちにキリシタンの痕跡がある。「紫福」もそんな土地。萩や防府・長府の城下から遠く離れ、山又山を越えて隠れ住んだ土地であったろう。山又山の中で見つけた明るい台地そんな気持ちが「紫福」の名の中に込められているような気がする。

この至福の集落を抜け 大井川に遡ってゆく。全く人家が無くなり、この大井川の支流 山の口川に沿って車で 15 分程遡ってゆくとダムサイトに出る。ここから先はダム湖に沿ってガタガタの石ころ道誰もいない道をさらに山奥へ詰めた突き当りの所に駐車場があり、「大板山たたら遺跡」の看板 少し、山の中に分け入った林の中に大きな石碑がありました。



大板山製鉄遺跡への入口 山の口ダム湖

このダムの水の中に大板山たたら山内の半分が水没している

山の斜面につけられた小道を上ってゆくとその両側に遺跡発掘調査中のビニールシートがかぶせられ、かつてのたたら場三内跡が広がり、その所と頃にたたら屋敷・高殿・炭焼場・鉄池などの名称の小さい札がつけられ、高殿へ登ってゆく脇には地位さな沢の流れがありました。

ほぼ他の場所のたたら場遺跡と同じような状況で林の中にひっそりと覆われていました。

山肌をなでながら林の中を吹き抜ける風のざわめきと沢を流れる水の音そして 時折、甲高い鳥の音がこだまする。自然の中の真っ只中。

後日 わかったのだが、この製鉄遺跡は江戸時代 萩藩の隠密が発見した津和野藩の「隠したらら」という。 この大板山に砂鉄無く、日本海側の港から砂鉄を運び、豊富なこの山の木炭で「たたら吹き」を行なったという。

本当に深い山中に隠れるように存在した理由がこれで納得。

「隠れ山のたたら場 ここで一人取り残されたら大変」の印象とともに、「このたたら遺跡も調査が終われば そのまま 誰も行かず、 また朽ち果て 自然の中にうずもれるのだろうなあ……。ダム湖の紅葉とともにこのたたら場が整備されればいいのだが……。 」と思いつつ、この遺跡を後にしたのを覚えています。

隠れ里の山奥に隠されたたたら場遺跡 それが「大板山たたら」でした。



【発掘調査中の大板山たたら製鉄遺跡 1993.10.17.】



今年 福栄村のインターネットホームページにこの「大板山たたら遺跡」が紹介されているのを見つけ、丁度訪問していた時はこの遺跡整備の為の発掘調査中であり、今はダムサイトに隣接したたたら遺跡公園に整備されている事を知りました。是非 再度訪問しようと思っています。

2001.12.23. 福栄村 大板山たたら遺跡をまとめつつ

「大板山たたら製鉄遺跡 概略」

『福栄村 大板山製鉄遺跡』インターネット ホームページ

<http://www.joho-yamaguchi.or.jp/fukuesho/kanko16.html> より

山ノ口川上流に存在する江戸時代の製鉄遺跡。

「砂鉄七里に炭三里」と言われ燃料の木炭を豊富に生産できる大板山に立地し、また、砂鉄は島根県の三隅町から北前船を利用し、奈古港経由で搬入した。

この遺跡での操業の時期は、江戸時代の宝暦年間(1751～64)、文化年間(1803～18)、安政年間(1854～60)の大きく3期にわたっています。このうち最後の安政年間の建物跡などが現在整備されています。山内と呼ばれる製鉄所には、製鉄炉のある建物(高殿)、事務所(元小屋)、鉄の脱炭加工場(鍛冶屋)、職人の住宅(下小屋)などの諸施設が設置されており全体が柵などで囲まれていました。

この遺跡の存在は萩藩が文化13年に津和野藩にはなった産業スパイの報告書でわかりました。

また、幕末安政年間の操業では萩藩が建造した軍艦庚申丸の原料鉄はここで作られました。

現在では、山の口ダムの建設によりたたら製鉄遺跡三内の南半分が水没しており、高殿や元小屋のある北半分のみが保存されています。

平成2年度から平成4年度の3ヶ年間で遺跡の発掘調査及び保存整備計画策定を行ない、平成5年度から平成7年度の3ヶ年で保存整備工事を施工。

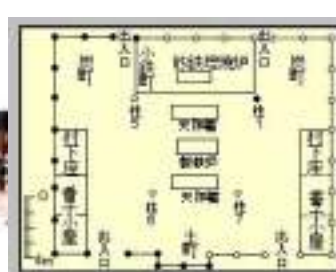
安政年間に操業した建物跡を中心に下記の遺構を保存整備。

高殿敷地の護岸、鉄池、元小屋、砂鉄洗場、高殿、小鍛冶屋、米蔵、庭園及び周辺施設等を整備し、総合説明板、施設の名称や内容を詳細に記入した説明板及び案内板を設置しました。

【整備された 大板山たたら製鉄遺跡 2001.12.23. インターネットより】



たたら炉跡



天秤鞆跡復元



鉄池

10. 丹後国 古代 鉄の王国【1】

天女の通った道は鉄の道「羽衣伝説」

『日本誕生前夜 - 丹後国 の IRON ROAD -』

tngoprint.htm by M.Nakanishi 2000.5.1.

【内 容】

- 10.1. 丹後国 古代 鉄の王国
- 10.2. 「羽衣伝説 天女の通った道は鉄の道」
- 10.3. 弥生時代3世紀の大型墳丘墓遺跡 赤坂・今井墳丘墓遺跡
- 10.4. ガラスの腕輪と大量の鉄剣が出土した大風呂南古墳

【参考】

- 11. 丹後国 古代 鉄の王国【2】「もう一つの邪馬台国」
古代丹後国の大製鉄地帯 弥栄町 竹野川沿いの丘陵地

tngo2print.htm

日本海沿岸に続く「道」

「日本の原像」第9部 鉄器登場

日本海沿岸に続く「道」

弥生時代から古墳時代にかけての鉄器の出土は、日本列島の各地で相次いで行われてきた。その中でも、特に注目されるのが、日本海沿岸に広がる「道」沿いの丘陵地帯に集中的に行われたことだ。この「道」とは、弥生時代から古墳時代にかけての鉄器の産地であり、鉄の産地と交通の要路として栄えた。その中でも、丹後国は鉄の産地として知られる。丹後国は、日本海沿岸に広がる丘陵地帯にあり、鉄の産地として知られる。丹後国は、日本海沿岸に広がる丘陵地帯にあり、鉄の産地として知られる。

10.1. 『日本誕生前夜 - 丹後国の IRON ROAD - 』

天女の通った道は鉄の道「羽衣伝説」



丹後の国 京都府峰山町赤坂。誰にも関係がないが、私の親父の故郷である。この赤坂で昨年弥生の大規模な墳墓が発見されたと聞いてビックリした。赤坂・今井墳丘墓遺跡である。

この地方が古代から開けた土地であり、この町のすぐ東に隣接した弥栄町から製鉄遺跡などの古代遺跡が続々と発見され、もしやと思っていましたが、本当にビックリした。

若くして大阪に出てきた父が生前口癖のように『丹後は山地水明の地...日本の中心』と言っていたのを思い出しています。この『たたら』の WALKING を始めた時には思いもよらぬ展開でただただ繋がり不思議さにビックリ。

日本国誕生の前夜の 3,4 世紀。この時期、大陸・朝鮮半島を含めた各地との交流は活発で、山陰地方では、四隅突出墓と呼ばれる方形の墳丘の四方に突出部を付けた墳丘墓が数多く作られた。その分布は出雲地方を中心に伯耆・北陸まで広がり、山陰の日本海側では出雲を中心とした政治的連携をもった大王国があった。

この時代 丹後には、出雲や他の山陰地方でみられ四隅突出型とは異なる大型の方形墳墓が築造され、数多くの鉄剣が副葬された大型墳丘墓遺跡や製鉄遺跡群の存在はこの地にも大きな独自勢力を持った古代鉄の王国があったことが覗える。



コバルトブルーの鮮やかなガラス腕輪とともに全国最多の十四本の鉄剣で有名になった岩滝町・大風呂南遺跡をはじめ、弥栄町・奈良岡遺跡、峰山町・扇谷、途中ヶ丘遺跡などおびただしい弥生の鉄器、炉の跡などが丹後半島を中心に判明している。

日本海側に点在する古代遺跡・丹後半島の古代製鉄関係遺跡【写真は大風呂南遺跡 出土品】

丹後半島のほぼ中央に大きな築造墳丘を有する峰山町赤坂今井遺跡・扇谷遺跡。

野田川が流れ下る加悦・岩滝町にあり、非常に美しいガラス製の青い腕輪が多くの鉄剣と共にほぼ完全な形で出土した岩滝大風呂南遺跡。そして丹後半島ほぼ中央竹野川が流れ下る弥栄町の奈良岡遺跡・遠所製鉄遺跡を初めとした数々の製鉄遺跡などである。

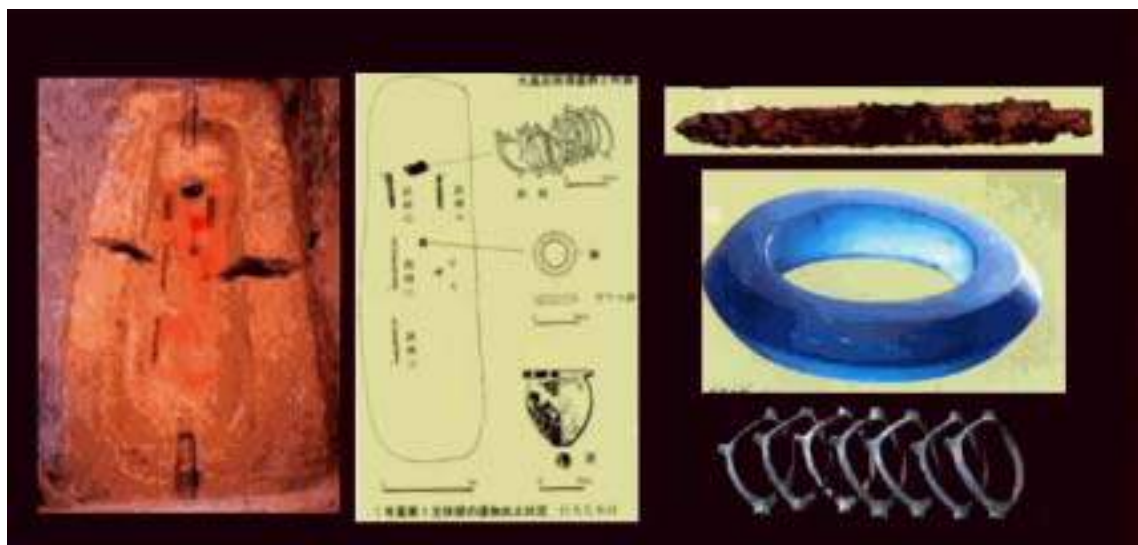
『峰山町 赤坂』は、日本海に面した網野町から山合を通過して峰山へ抜ける街道にあり、古くから丹後半島の険しい海岸を通らず、丹後半島の付け根を横断して岩滝町で若狭湾の海岸に出て畿内へとつながる道である。

網野の街から山間に入り、昭和の初め丹後大地震の郷村の断層地帯を抜け、峰山盆地にでる手前が『赤坂』である。後で知ったのだが、産鉄民の数々の研究をされている柴田弘武氏の本によれば、この『赤坂』にある『...・神社』は古代製鉄に関係のある遺跡と指摘されており、赤坂今井墳丘墓の発見で、この道が『日本海海岸から畿内へと続く古代 IRON ROAD』であるとの意を益々深くしている。

また、この丹後地方には『浦島太郎』伝説や『羽衣』伝説が伝えられており、古くから大陸と独自の交流があり、丹後古代鉄の王国として大きな勢力をもっていた。

大江山に源を発した野田川が流れ下る丹後半島の付け根岩滝町・加悦町近傍にも大風呂南遺跡など多くの古代遺跡が点在し、丹後半島の壁としてそびえる大江山には『鉄』と関係づけられる『鬼』伝説がある。『羽衣』伝説も産鉄の民と深い関係があるとする説〔柴田弘武氏「風と火の古代史」〕もあり、鉄と関係づけられる大きな王国がこの丹後半島にあったことは、疑う余地はなく、その中心地は大江山に源をはさる野田川が流れ下る加悦町・岩滝町近傍と比治山から流れ下る竹野川流域の弥栄町であろう。

【古代鉄の王国 丹後国の二つの中心地 竹野川・野田川流域】



1. 野田川流域 鉄の交易ルートににぎった首長の墓(推定) 大風呂南遺跡とその出土品



2. 丹後半島の中央部 竹野川流域

京都府弥栄町 ニゴレ製鉄遺跡 発掘風景と峰山町 赤坂今井墳丘墓

「羽衣伝説」の天女が舞い降りた比治山一体は大砂鉄地帯であり、天女がこの比治山から下ってきた竹野川沿いには扇山遺跡などの製鉄と関係する遺跡が点在し、そして天女が安住した弥栄町船木の対岸には古代丹後の国の大製鉄所 弥栄町木橋字鳥取の遠所遺跡が存在する。

柴田弘武氏や谷川健一氏が言う「天女が通った道は製鉄の道」まさに竹野川はそれを裏付けている。

若干時期は新しくなるが、大和では前方後円形を呈する纏向型前方後円墳と呼ばれる墳丘墓が出現し畿内を中心に分布。また、尾張では前方後方形の墳丘墓が出現し東海を中心に分布圏を形成。

このように日本各地では、墓の形を共有することによって政治的な連合関係を結ぶいくつかの地域・大王国が出現してくる。

大陸・朝鮮半島から鉄の技術を持って渡ってきた多くの渡来人が、既にいる人達と融合しつつ、全国に幾つかの大王国を作り、そんな中から大和が勢力を伸ばし、他を従え、日本誕生を成し遂げていった。まさに大陸から海を越えてつながる『Iron Load』の道筋が見えてくる。

2000.5.1. 神戸にて M.Nakanishi

【参考】 丹後半島の古代製鉄遺跡



丹後の国 古代 鉄の王国

10.2. 天女の通った道は鉄の道「羽衣伝説」

峰山町に残る「天女」伝説・丹後国 IRON ROAD -

hgrmoprint.htm by M.Nakanishi 2000.5.1.



【 磯砂山頂上にある羽衣伝説の碑 】

丹後地方には『浦島太郎』伝説や『羽衣』伝説が伝えられており、古くから大陸と独自の交流があり、丹後古代鉄の王国として大きな勢力をもっていた。『鉄』と関係づけられる『鬼』伝説の残っている大江山・野田川流域に対し、丹後半島・竹野川流域に伝わる『羽衣 天女』伝説もまた産鉄の民と深い関係があるとする説〔柴田弘武氏「風と火の古代史」〕もあり、この丹後の国の『羽衣・天女伝説』には強く惹かれる。

通常 「鬼伝説」の伝承は古代産鉄民及び古代製鉄遺跡と結び付けられている場合が多く、その代表例としては、ほかに、備前の「桃太郎の鬼退治」 津軽岩木山周辺の「鬼太夫伝説」 伯耆の国 溝口の「鬼伝説」などがあげられる。



そんな中で、柴田弘武氏著「風と火の古代史」を読むと「丹後の天女伝説」各地に広く流布されている大男「ダイダラボッチ」なども「たたら」製鉄の伝承と非常に密接な関係を持っていると言う。

古くから 聞かされてきた丹後の国の「羽衣・天女伝説」が「大陸との交流の伝承」とは思っていたが、古代製鉄と関係が有るとは考えても見なかった。しかし、丹後の国が古代鉄の大王国だったことと考え合わせるとその説にも納得させられる。

峰山盆地のはずれ「羽衣天女伝説」の天女が舞い降りたとの伝承のある比治山一体の山・谷は古くからの大砂鉄地帯である。また、天女がこの比治山から下ってきた竹野川沿いには峰山町の扇山遺跡・赤坂今井墳丘墓遺跡など多くの製鉄と関係する古代遺跡が点在し、さらに弥栄町に入ると多くの弥生遺跡や古代の製鉄遺跡画点存在する。とそして天女が安住した弥栄町船木の対岸には古代丹後の国の大製鉄所 弥栄町木橋字鳥取の遠所遺跡が存在する。

古代史・古代たたらの研究家 柴田弘武氏や谷川健一氏が言う「比治山から天女が川沿いに流浪して下ってきた竹野川はまさに製鉄の道」を裏付けている。

丹後半島の丁度中央にある峰山町に残る「天女」伝説の一つは和銅6年(713年)から天平にかけて献上された「丹後風土記」に記され、文字として残された日本最古の羽衣説話です。

謡曲「羽衣」は、この丹後のお話をもとにして作られました。

そして、もう一つは、口承説話として地域の人々が大切に語り継いできた羽衣天女のお話です

1. 和銅6年(713年)「丹後風土記」に記録されている

丹後国 羽衣 天女 伝説

丹後の磯砂山の中腹にある女池で8人の天女が水浴をしていたところ山麓に住む老夫が1人の天女の衣を隠してまった。

天に帰れなくなった天女は、以後10年間老夫婦の子とし酒を造り、機(はた)を織り、五穀の生産に励み家を富ませたが、老夫婦は、天女がだんだん邪魔になり追い出した。天女は泣く泣く竹野郡の奈具社に向かったという。

むかし、むかし、比治の山の頂に真井という大きな澄んだ池がありました。

その池に八人の天女が舞い降りて水浴びをしていました。それを見た里人の和奈佐という老夫婦が一人の天女の羽衣を隠してしまいました。

天に帰れなくなった天女はしづしづ老夫婦と暮らすことになりました。

天女は酒づくりが上手でこの一杯の酒は万病にききました。この酒は高い値で売れ、たちまちこの老夫婦も比治の里も豊かになりました。

そのうち十年ばかりたち、豊かになった老夫婦は心変わりして天女を家から追い出してしまいました。

嘆き悲しんだ天女は、”天の原、ふりさけ見れば霞立ち家路までいて、行方知らずも”と天を仰ぎながら歌を詠みました。

流浪の旅に出た天女は泣く泣く荒塩の村にたどり着き、その後、丹波の里の哭木(なきき)の村から奈具の里に行き、ここで落ちつきました。

この天女は奈具の社におまつりしている豊受大神で五穀、養蚕、酒づくり神様といわれ、その後豊受大神は伊勢神宮の外宮としてまつられています。

比治の里： 峰山町五箇・久次・鱒留付近 竹野川の支流鱒留川の源流五箇の南端磯砂山(いなさごやま)は比治山とも言い、この山の東側中腹にある女池が天女の舞い降りた真奈井だとされている。

この比治山・鱒留川源流域の山・谷間からは古代から豊富な砂鉄を算出する地帯であることが知られている。

荒塩の村： 峰山町久次だとされている。

丹波の里： 峰山町丹波この地の弥生時代前期末の扇谷遺跡からは鉄斧が出土した。

哭木の村： 峰山町内記 この地にある名木神社にも豊受大神(天女)が祭られている。

奈具の里： 弥栄町船木の里とされている。

竹野川沿いのこの地の対岸には古代の一大製鉄遺跡遠所遺跡がある。

このように伝説の天女は比治の里から竹野川沿いに下流へ流浪の旅を続け、峰山町丹波を通り、船木の里を安住の地としている。この天女のたどった竹野川沿いの道はまさに古代製鉄の遺跡 丹後の国の大製鉄地帯と重なっており、まさに『羽衣伝説 天女流浪の道は鉄の道』である。

2. 丹後地方に伝わる口承説話

羽衣天女 七夕伝説

むかし、むかし比治の山の頂き近くに大きな美しい池がありました。

その池に八人の天女が舞い降りて水浴びをしていました。天女が農業、養蚕、機織りの業をおかげで里は豊かになりました。

そのうち、天女は天が恋しくなって、隠してあった羽衣を見つけて天に帰りました。

その時、三右衛門に七日七日に会う約束をしましたが「あまのじゃく」は七月七日と偽って伝えました。

一年に一度しか会えないと思った三右衛門は天女を慕うあまり、夕顔の蔓を登って天上にあがり、天女に会うことができました。

天女と暮らしたい三右衛門は、天の川の架橋づくりを請け負いました。

橋が完成するまで天女を思いだしてはいけないという約束を破ったとたん、天の川は洪水になって、三右衛門は下界に追い出されてしまいました。

そして、七月七日の夜には天女が天の川のきらめく星となって三右衛門と三人の娘に会いにやってくるということです。



古代遺跡がならぶ弥栄町竹野川流域



峰山町 赤坂今井墳墓遺跡



弥栄町 遠所製鉄遺跡

10.3. 丹後国 古代 鉄の王国 『Iron Road』

赤坂今井墳丘墓遺跡

・ 弥生時代後期 国内最大級の墳丘墓 ・ 京都府 峰山町
akskaprint.htm 2000.March by Mutsuo Nakanishi



京都府中郡峰山町赤坂で、弥生時代後期末（三世紀中ごろ）の国内最大級の方形墳丘墓が見つかり「赤坂今井墳丘墓」と命名された。

当時この地は天然の良港であった浅茂川湖から農耕の中心地である中郡盆地へ至る交通路の途中の谷筋に沿った丘陵地に位置し、南北 37.5m、東西 32.5m の方形で、高さ 3.5m 。周囲に幅 5,6m のテラスがある。

弥生時代の大型墳丘墓には、楯築遺跡（岡山県倉敷市）などがあり、赤坂今井墳丘墓もこれに近い国内最大級の大きさで、被葬者は日本海沿岸の強大な首長の一人だったとみられ、墳墓の規模・形式の差などから、出雲や畿内と違う巨大勢力の存在がうかがえ、「古墳時代に先立つ弥生期に、すでに丹後に強大な大王国権力者が存在し、九州や朝鮮半島、中国との独自の交流、貿易を基盤にしていた」ことを裏付ける遺跡である。



赤坂今井墳丘墓主体部配置図

これまでに見つかった弥生時代の墳墓は、大風呂南墳墓を含めて、墳丘を大きく意識したものでないのに対し、墳丘の築造は、後方の山を切り崩し、新たに盛り土で形を整えている。規模だけでなく

工法上もかなりの労働力を費やしたである。

また埋葬施設の墓壙（こう）は、丘上の平たん面からは六基、テラス部分からは七基の計十三基が見かっている。

岩滝町大風呂墳墓など丹後半島の弥生時代後期のお墓からは多量の玉類や、鉄製品が出土することで全国的にも注目を集めているが、墳丘中央部に位置する最大の墓壙は長さ約十四メートル 幅は八メートル前後とみられ、弥生時代では国内最大。

それ以外の墓壙からは、珍しい舟形や箱形木棺跡のほか、鉄製のヤリガンナ、短刀、鉄鏃（ぞく）（かめ）なども見つかった。

（赤坂今井墳丘墓・今井城跡 峰山町現地説明会資料より抜粋 アレンジ）

by M.Nakanishi 2000.5.1.

赤坂今井遺跡探訪 2000. 8. 26.

私が赤坂今井遺跡を訪れたのは暑い夏の夕方。弥栄町の遠所・ニゴレ遺跡の後に建っている「味わいの郷」を訪れた後 従兄弟の家へ寄った時である。峰山の街中から網野への街道の峠を越えて赤坂の集落に入り、赤坂の集落を抜けてその北の外れの丘の上が赤坂今井遺跡。

丁度発掘調査がされている途中にであった。

網野への街道沿いの祖父たちの墓が在る丘のすぐ北隣の丘で本当に親父の実家のすぐ近所 あまりにも近い場所に遺跡があったのでビックリした。



赤坂今井墳丘墓遺跡遺跡【1】 峰山町

遺跡の北の端の所から遺跡に上がって行くと幾人かの日とが忙しく発掘調査をしている所だった。小さい時から 幾度となく見上げてきた森が「古代 丹後の鉄の大王国を纏め上げてきた豪族の墓」そして通いなれたこの街道が日本海を渡ってきた古代渡来人が海岸から畿内・都へと通った「鉄の道 iron road」と思うと一層感慨深い。小さい時には思っても見なかった事である。遺跡のアポイント取っていないので、周りから眺めていたが、チョット遺跡のスナップ写真を取ろうとすると「カミナリ」が調査員から落ちた。「勝手に遺跡の写真をとるな教育委員会へ行って許可貰って遺跡にこい」と。「まあ なんと閉鎖的な 減る物でなしじゃまをしたわけもないのに・・・」とこれはこっちの勝手な言い分。でも チョットは頭に来ました。

今年はその山内丸山遺跡の開放的な空気を知っているだけに・・・

まあ これからも 峰山町の赤坂には行く機会もあり ゆっくり訪問したいと思いつつつ遺跡を下りた。



赤坂今井墳丘墓遺跡遺跡【2】 峰山町【赤坂今井遺跡 発掘現場 2000.8.26.】

この古墳が作られた3世紀から古墳時代へと時代が下っていく過程で、渡来人が鉄をもたらし、この丹後が一大鉄の生産加工基地となり、大和の国形成の重要な役割を果たした。

今は本当にひっそりしたこの下の街道を当時はにぎやかに多くの人たちがとおり、多くの物産品と共に「鉄」が運ばれたに違いない。まさに日本誕生に大きな影響を与えた「鉄の道 iron road」が思いもかけず身近に現われた。

だとすると 僕のルーツもこの鉄の道に関与した鉄の渡来人の末裔か・・・.....

ほんとうに 親父の実家や墓のすぐ隣の丘なのにビックリ。

2000.8.26. 午後 京都府 峰山町赤坂にて M.Nakanishi

丹後国 古代鉄の王国 『Iron Road』

10.4. 美しいガラス腕輪と大量の鉄剣が出土した大風呂南遺跡

ohfroprint.htm by M.Nakanishi 2000.5.1



大風呂南墳墓群は多くの古代遺跡がある野田川流域の河口近い岩滝町にあり天橋立を隔てて若狭湾につながる阿蘇海沿岸部に隣接する丘陵の上であり、海を見下ろすことが出来る。

発掘調査の結果、弥生時代後期項半から末期にかけて造営された2基の墳墓から5つの墳墓主体部が出土した。特に丘陵先端部の1号墳墓からは豊富な副葬品が出土し、弥生の首長級の墳墓と見られている。1号墳墓では 巨大な木をくりぬいて作られた木棺の内側にはあざやかな朱が塗布され、埋葬者の頭の上側に9本、また両脇とその近傍に4本の鉄剣が置かれ、腕にはめられていたと推定されるあざやかな青色を発するガラスの腕輪が出土した。



また 頭の上側には貝輪系の銅釧や鉄鏃などの武具 勾玉など この時期他の遺跡では類を見ない多数の副葬品が埋葬されており、埋葬されている人物の権力の程が覗える。

10. 丹後 古代 鉄の王国【1】
 「羽衣伝説」天女の通った道は「鉄の道」
 【完】

もう一つの邪馬台国 『和鉄の道 iron road』

11.

丹後国 製鉄コンビナート 遠所遺跡

tngo2.htm by Mutsuo Nakasnishi 2000.5.20.



1. もう一つの邪馬台国 ・丹後の国の重要性・ [tngo2print.htm](#)
*** 丹後の国の重要性 ***
2. 弥栄町 遠所製鉄遺跡 [yskaenjyoprint.htm](#)
*** 丹後の国 古代最古の製鉄コンビナート ***
3. 遠所遺跡と製鉄炉と丹後の国製鉄炉の変遷 [yskafepprint.htm](#)
4. 遠所遺跡原料 高チタン系砂鉄の謎 [yskatiprint.htm](#)
*** 現在の溶接材料につながる高チタン滓系 ***
5. 発掘調査中のニゴレ遺跡探訪 1993.10.10. [yskangreprint.htm](#)

11.1. 『和鉄の道 iron road』丹後国の重要性



古代 丹後の国文化圏と畿内の先進文化圏の交流

畿内から弥生時代の先進的な遺跡が続々発見され、邪馬台国の所在地論争の畿内説を唱える人々の大きな根拠になっている。野洲・守山を中心とした銅鐸文化圏や奈良盆地の大集落で大きな望楼をもった『唐古・鍵遺跡』そして 大型建造を持った『和泉の池上遺跡』などである。

しかし、これらの先進文化を『鉄器』の面から見ると北九州文化圏に較べると圧倒的に鉄器は少ない。それが、古墳時代 大和朝廷の骨格があきらかになると畿内では、巨大な前方後円墳と膨大な鉄器を持って登場してくる。

大和朝廷成立には、明らかに『鉄器文化』が大きな影響を与えているが、『その鉄器文化がどのような

経路で畿内に入り、日本誕生に影響を与えたか』は邪馬台国論争とともに『日本誕生』の大きな謎である。



伊勢遺跡群の独立棟持柱建物跡
滋賀県守山市



奈良唐古・鍵遺跡の望楼
奈良県田原本町



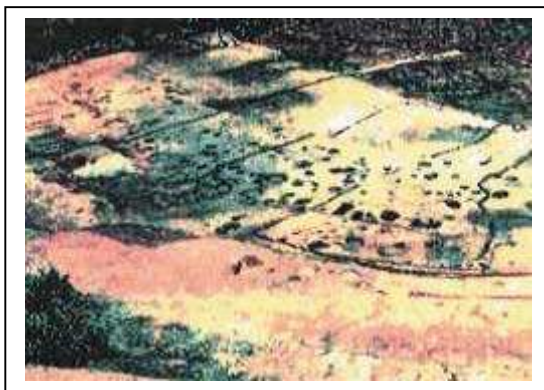
和泉池上遺跡大型構造物
大阪府泉大津市

一方最近の各地での発掘から、日本誕生に役割を演じた「もう一つの邪馬台国『鉄の大王国』」の解明が進み、新しい史実をこの日本誕生・邪馬台国論争に付け加えつつある。

『大陸・朝鮮半島から畿内へ 日本誕生をもたらした鉄の道・iron road』。そしてこの『iron road』に沿って存在した数々の『鉄の大王国』。日本誕生に関わった北九州・筑紫の国 吉備の国 出雲の国などの「鉄の大王国」と共に最近の数々の遺跡発掘から、伯耆・丹後の鉄の王国 そして 越の国の存在が日本誕生に重要な役割を果たしたとして、俄かにクローズアップされてきている。

古代には 北九州から 瀬戸内を経て 大阪湾・熊野から 河内を通過して畿内へ抜ける文化の道 IRON ROAD が常に意識されてきた。しかし、最近の新しい発見から、大陸・朝鮮半島から直接の道も含めて、日本海沿い山陰の「iron road」が重要視されている。

また、これら山陰の国と畿内を結ぶ琵琶湖湖岸の近江の国の存在も重要であることが明らかになってきた。特に畿内と日本海を結ぶ最短距離の位置にある丹後の国には鉄の一大コンビナートが存在し、また琵琶湖北岸の熊野本製鉄遺跡にみられる一大鉄の工房の存在が判り、この丹後の国の鉄が畿内へ持ち込まれ、日本誕生に大きな役割を演じた考えられるに至った。



丹後国 遠所製鉄遺跡群と古代丹後国から畿内への鉄の道筋

日本誕生前夜の時代 丹後では大量の砂鉄を各地から集め、精錬から鍛冶道具作りまで、北九州や出雲・伯耆・吉備を含めても他に例をみない大規模な製鉄コンビナートがあり、ここで精錬加工された鉄が畿内大和政権の強力な支柱として畿内に持ち込まれ、大和政権勢力伝播の柱として使われた。(弥栄町遠所遺跡群)

また、継体天皇は越の国から畿内に入ったといわれており、これも越の国の鉄を背景とした政権交替とする説つもある。

これらが示すとおり「iron road」が大陸・朝鮮から 丹後の国を経て 畿内そして東海・信州方面へとつながって行ったといわれている。



古代の日本海を巡る『Iron Road』と 越の国 製鉄遺跡群

十数年前 茨城県波崎砂丘・千葉県九十九里浜で風に舞っていた膨大な砂鉄の面白さに付かれて始めた「たたら」訪ねての country walk。

対馬 北九州から 中国山地・出雲・吉備を手始めに房総・三陸・久慈そして津軽へ。伯耆・丹後・千種へも 今また 関東・東北へ。

山口県土井ヶ浜の弥生遺跡 多くの異邦人が大陸を眺めつつ何百体も眠っている姿を想像しつつ、日本海に沈む夕日を見て 大陸からつながる道が 出雲のヤマタノオロチ伝説 丹後の羽衣・浦島太郎伝説など大陸文化の匂いを感じつつ線になってつながればなあ...と何とはなしに考えていたが、今、はっきり「iron road 鉄の道」として 日本誕生に大きな役割を演じてきた道としてつながってきた。

大和朝廷成立後も東北征伐の鍵を握った鉄製武器。そして 奈良・平安のあの巨大木造建築群を支えた鉄製の釘や加工治具。刀鍛冶・鉄砲伝来から 近代日本の成立へ。

Country Walk を通じて知った多くの人達との出会いもふくめ、この「Iron Road Country Walk」の楽しみは尽きない。

2000. 5.20. M.Nakanishi

【参 考】

サイバー古代 ホームページ by The Yomiuri Shimbun Osaka Head Office,1998

特集 日本海鉄器ルート「もう一つの邪馬台国」

<http://www.ultra-k.com/kodai/jyo/old/tokusyu/tokusyu.htm>

by Mutsuo Nakanishi , 2000.6.4.

11.2. 丹後の国 古代初の大規模製鉄コンビナート

弥栄町 遠所製鉄遺跡

yskaenjyo.htm by Mutsuo Nakanishi, 2000. 6.4.



1. 古代製鉄の起源

-朝鮮半島から渡来した

「鉄鉱石」精練と「たたら砂鉄」精練 -

弥生時代の確実な製鉄遺跡が発見されていないので、弥生時代に製鉄はなかったというのが現在の定説であります。

しかし、弥生時代中期には、すでに、国内各地で鑄造・鍛造された矛、剣、農具、漁具、工具が増えてきており、中期の中頃には朝鮮半島 南部から輸入された鉄ていを使用して、国内での鍛造(金槌などで金属塊を叩



いて成型する工法)が始まり鉄器の種類や形態にも地方差が現れてきます。

また、弥生時代には、大がかりな稲作が始まっており、これらの生産効率の上昇の為に鉄器が急速に普及し、これら鉄器製造の専門技術者も存在することが出来たと考えられています。

しかし、これら鉄器に加工されたすべての鉄原料は朝鮮半島からの輸入品であったと見られています。古墳時代(3世紀末?7世紀)になると、青銅器と共に多量の鉄器が発見されており、砂鉄を原料とした製鉄炉が京都府丹後半島の遠所遺跡(5世紀末)や岡山県の大蔵池南遺跡(6世紀末)などで見つかります。現在発見されている日本の古代刀(上古代刀)は、稲荷山古墳の鉄剣のような古墳出土のもの、正倉院や石上神宮などに所蔵されているものがあります。

これらの中で、4～6世紀初めのものは百煉刀に見られるような鉄鉱石から生成されたものであり、6世紀以後のものは、砂鉄から作られたものと推定されています。

この様に鉄のルーツには大陸・朝鮮半島に起源をもつ「鉄鉱石」精練と日本で急速に発達した「たたら砂鉄」精練の二つがあり、特に出雲・伯耆・丹後など日本海沿岸でスタートし、その後日本で固有の技術として急速に発達した砂鉄精練・たたら製鉄の起源については謎に包まれています。

この「たたら砂鉄」精練誕生には、5～6世紀にかけて、日本に関係が深く、鉄素材の産地であった任那を含む加羅地域が百済や新羅に押され、鉄の入手が困難になったことが大きな影響を与えたと考えられています。今のところ、確実と思われる日本での製鉄遺跡は6世紀前半まで溯れますが(広島県

カナクロ谷遺跡、戸の丸山遺跡、鳥根県今佐屋山遺跡など)、5世紀半ばに広島県三原市の大成遺跡で大規模な鍛冶集団が成立していたこと、6世紀後半の遠所遺跡(京都府丹後半島)では多数の製鉄、鍛冶炉からなるコンビナートが形成されていたことなどから、5世紀には既に製鉄が始まっていたと考えるのが妥当とされています。

いずれにしても 朝鮮半島から海を渡ってきた渡来工人によってもたらされた製鉄技術がさらに発展し、6世紀頃には広く日本で製鉄が行なわれていました。

古事記によれば応神天皇の御代に百済(くだら)より韓鍛冶(からかぬち)卓素が来朝したとあり、また、敏達天皇12年(583年)、新羅(しらぎ)より優れた鍛冶工を招聘し、刃金の鍛冶技術の伝授を受けたと記されています。この製鉄法は、鉄鉱石による製鉄法で大和朝廷の中枢を形成する大和、吉備に伝えられ、古代日本誕生初期には中枢の最重要な技術であったに違いない。

一方、出雲を中心とする砂鉄製錬の系譜は、やがて、伝来した技術のうち箱型炉製鉄法を取り入れて、古来の砂鉄製鉄と折衷した古代たたら製鉄法が生まれ、6世紀後半には、日本海側で畿内に最も近い丹後の国に製鉄から鉄製品までの大一貫製鉄コンビナートが出現し、数世紀に渡り大々的に畿内へ鉄製品を供給して行く。丹後半島の中央部弥栄町で発見された遠所製鉄遺跡の出現である。

2. 遠所製鉄遺跡とニゴレ製鉄遺跡



丹後半島 弥栄町 竹野川流域

2.1. 古代 大和の国衛製鉄コンビナート 遠所遺跡



丹後地域の古代製鉄遺跡群
遠所遺跡と竹野川中流 製鉄関連遺跡

丹後地域で出土した鉄生産に関連する古代遺跡は 48 遺跡の多数にのぼり、この地域が鉄の主要生産地であったことを示している。

丹後地域における古代鉄の歴史は 弥生時代の峰山町扇谷遺跡からの鉄斧ならびに鍛冶生産の開始を示すフイゴ羽口・砂鉄系鍛冶滓の出土及び峰山町途中丘遺跡の鉾石系滓の出土などにはじまり、弥栄町奈良岡遺跡からは大量の鉄片や鉄製品が出土し、鉄器加工が行なわれていたと推定されている。

その後 古墳時代中期まで、丹後地方での鉄生産に関する資料はみいだされていないが、古墳時代中期以降 加悦町作山 2 号墳や大宮町左坂古墳久美浜町大塚古墳など丹後地域の各地から鍛冶精練関係の資料が見出されるようになり、その中心に遠所製鉄遺跡が置かれる。

遠所遺跡は弥栄町と網野町との境に近い木橋・鳥取の集落に近い丘陵地から発見されたわが国最古級（六世紀後半～八世紀後半）の製鉄コンビナートで、東西 400m・南北 800mにおよぶ大規模なもの。



遠所製鉄遺跡遺跡 2000.8.26.



弥栄町遠所遺跡(発掘当時)

現在のところ、製鉄炉・鍛冶炉・炭窯・古墳・住居跡などが確認され、生産と生活の場が同じだったことや、約百人がこの一帯で作業し、高度な技術で一日に1kgの鉄が長期にわたって生産されていたと推定されている。

この遠所遺跡の東側に隣接して8世紀後半ならびに9世紀後半～10世紀初頭の製鉄炉を有する製鉄遺跡「ニゴレ遺跡」がある。また、遠所遺跡から東側竹野川の対岸の丘陵には8世紀中期から9世紀前半の製鉄炉・炭窯などを持つ黒部製鉄遺跡がある。

6世紀後半遠所遺跡で始まった丹後の国のたたら砂鉄精練が8世紀後半最盛期を迎え、黒部遺跡・ニゴレ遺跡へとほぼ同じ地域で連続と続いて行く。この竹野川中流の弥栄町鳥取・木橋の地域はまさに丹後の国の一大製鉄地帯であった。

遠所遺跡では、特に製鉄炉の出土は重要で周辺の他の製鉄遺跡が鍛冶炉の単独遺跡であるのに対し、多数の製鉄炉鍛冶炉の両方を有する原料から鉄製品までの一貫製鉄生産が数世紀に渡り、大規模に行なわれている事は他の地域では見られない大きな特徴で、日本における大規模な一貫製鉄生産はこの丹後の国遠所遺跡で始まったといっても過言でない。

出雲など他の山陰地方での古代製鉄においても遠所遺跡のごとく同じ場所で大規模に行なわれた例は見られない。また、この遠所遺跡での鉄原料が丹後地方の砂鉄ではなく、他の地域から大量に持ち込まれたものであることと考えあわせると、畿内大和朝廷にとってこの製鉄コンビナートが極めて重要な国衛工房であったことと良く符号し、奈良時代後半まで国衛工房として維持されたと見られている。



遠所遺跡立看板より

古代 当時の鍛冶工房の様子と鍛冶製鉄炉跡

11.3. 遠所遺跡の製鉄炉と丹後の国製鉄炉の変遷

日本最初の大規模一貫製鉄コンビナート
yskafe.htm by Mutsuo Nakanishi 2000. 6. 9.



図 遠所遺跡と製鉄炉発見場所

ここ遠所遺跡群では製鉄炉が4ヶ所から見つかっている。(O地区 A地区 E地区 S地区)
遠所遺跡では精錬滓その他の出土から5世紀末~6世紀初頭にかけて製鉄を行っていたと推定されているが、製鉄炉遺構そのものの発見は遺跡中央の谷間のO地区水田面から発見された6世紀頃半の古代製鉄炉遺構が最も古い。

その後 空白期があり、8世紀後半の遺構として、丘陵先端部をL字形にカットした扇形の平坦部(A地区)や丘陵谷部の平坦地(E,S地区)に構築された製鉄炉遺構発見されている。

(京埋セ遠所遺跡現地説明会資料 89-07, 90-04, 90-12より)

1. 日本で発達した古代製鉄炉の形式



古代の製鉄炉には箱型炉と縦型炉があり、西国では箱型炉 東国では竪型炉が当初発達した。箱型炉は6世紀吉備の国ではじまり、西国・畿内から全国に広がったと言われている。

丹後の国でも遠所遺跡に見られるごとく6世紀後半には箱型炉での製鉄が発達した。

一方 竪型炉は8世紀初頭関東ではじまり 東北へ展開されて行く。

図 古代製鉄炉推定 箱型炉と竪型炉

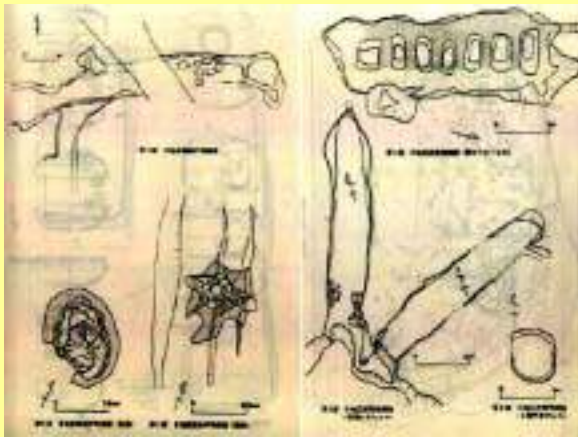
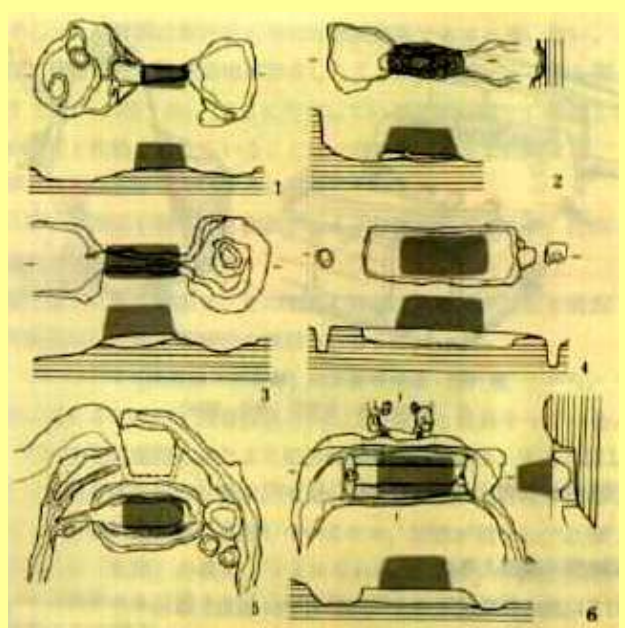


図 丹後国 箱型製鉄炉精練

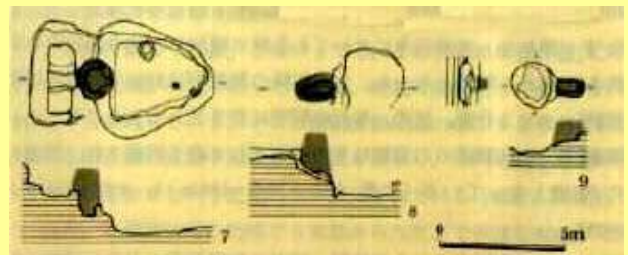


古代・中世 各地の箱型炉

行方製鉄の最盛期 (8世紀後半～9世紀前半)



図 箱型炉 炉と天秤鞆のイメージ図



古代・中世 各地の各種製鉄炉

図 古代・中世におけるさまざまな製鉄炉

第11図 古代・中世におけるさまざまな製鉄炉

1福岡早良瓦下遺跡 (7世紀後半) 2千葉県若林1遺跡 (8世紀前半) 3福岡県
向田石遺跡2号炉 (8世紀前半) 4富山県石太郎C遺跡 (9世紀前半) 5広島県
大矢遺跡 (11世紀) 6広島県石神遺跡 (14世紀中～15世紀前半) 7福直原高田C
口遺跡1号炉 (9世紀前半) 8青森県大館森山遺跡3号炉 (9世紀後半～19世紀)
9熊本県大津遺跡 (8世紀)

1～6は箱形炉、7～9は壺形炉である。1は古墳時代後期に吉備地方で成立した炉から発達したもので、当時の最先端技術として最初に各地に伝えられた炉である。その後、箱形炉は各地でさまざまな展開し、とくに中国地方では近世までの成立に向けて独自に発展する。壺形炉もまた全国に拡がり、地域ごとに定着の在り方が異なる。なおトーン部分は炉の大きな位置を示し、正確な形態・大きさを示すものではない。

2. 遠所遺跡の製鉄炉と丹後の国の製鉄炉の変遷



図 遠所遺跡と製鉄炉発見場所

2.1. 遠所遺跡 0 地区出土の 6 世紀頂半の製鉄炉



6 世紀後半出土の製鉄炉【溝付き箱型製鉄炉】略図

0 地区から発見された製鉄炉は大部分削られていたが、浅い彫り込みと基礎となる石組部分が見つかり、方形の箱型炉であった。この製鉄炉の南側の地形が急に落ち込み、鉄滓や炉壁が大量に捨てられていた。製鉄炉の床面に 3 列計 8 石の敷石が残存し、内部は粉炭層が充填され防湿の配慮がなされている。

2.2. 遠所遺跡隆盛時の製鉄コンビナート A 地区 8 世紀後半出土の製鉄炉遺跡

丘陵先端部 A 地区からは 8 世紀後半の製鉄炉 5 基のが見つっている。この地区からは炭窯や須恵器焼成窯や掘立柱建物 竪穴住居などが出土。その遺物は 6 世紀末から 10 世紀にわたっていますが、大半は 8 世紀後半のものでした。製鉄炉は丘陵裾部分を「L」字型にカットした平坦部に作られており、花崗岩の岩盤を掘り、炉の基礎にしたもので長さ 2.0Mx 幅 0.3Mx 深さ 0.1M が赤く変色。この彫り込みに粉炭層が充填されている。同じような丘陵の傾斜地 E 地区からも 8 世紀後半の製鉄炉 1 基が見つっている。8 世紀後半は奈良時代後半にあたり、遠所遺跡での製鉄が最も隆盛を極めた時代である。また この地域や隣接地域からの砂鉄の貯蔵穴や鍛冶炉の発見 製鉄精練や鍛冶精練滓の出土により、この地域ではこの時代 原料から製鉄精練 鍛錬 製品加工までの一貫生産が大規模に行われていた事が判った。

2.3. S 地区 奈良時代後半の製鉄炉出土

丘陵谷間の平坦地(S 地区)から製鉄炉が出土。しかし、周りからは鍛冶炉は出土せず、ここで作った鉄を A 地区などに運んで鍛冶・加工していたと推定されます。

3. 遠所遺跡の製鉄炉につながる黒部遺跡・ニゴレ遺跡製鉄炉の変化



6世紀後半の製鉄炉出土以降遠所遺跡では8世紀後半まで遠所遺跡では製鉄炉が見つかっていない。

この空白期埋める製鉄遺跡として竹野川の対岸 黒部製鉄遺跡があり、8世紀中頃～9世紀前半にかけて12基の製鉄炉が出土。また8世紀後半遠所遺跡A地区の製鉄炉4基ほか隣接するニゴレ遺跡(主に9世紀後半～10世紀主に)から9基の製鉄遺跡が発見。

これら丹後半島弥栄町の竹野川中流域の丘陵地に存在した一大製鉄コンビナート古代古墳時代から日本誕生・大和朝廷の勢力を支え、そして 奈良時代後半衰退していった丹後の国

の製鉄コンビナートの変遷が明らかになった。製鉄炉から見るとこの地域における製鉄精練は6世紀後半から9世紀にかけて『遠所遺跡 黒部遺跡 黒部・遠所遺跡 ニゴレ遺跡』へと移って行った。この間、鉄の生産量が激変するとともに製鉄炉の大きさ・形式も大きく変わり、さらに精練に用いられた砂鉄原料も大きく転換している。

3.1. 遠所遺跡の製鉄炉 下部構造を持つ大型箱型炉

6世紀後半及び8世紀後半の製鉄炉はいずれもU字型に溝をほりそのなかに粉炭層を引き詰めた下部構造を持ち、長さ2.0Mx幅0.3Mx深さ0.1Mの比較的浅いが大きな下部構造でその上に築造される箱型炉も大型であったことが推定される。

3.2. 黒部遺跡の製鉄炉

下部構造を持つ大型箱型炉
下部構造を持たぬ小型箱型炉へ

黒部製鉄遺跡は8世紀代特に大半は8世紀後半の遺跡で9基の製鉄炉が出土している。この製鉄炉の大半は遠所遺跡でみられる炉底に溝を持つ下部構造のある箱型炉であるが、9世紀前半の製鉄炉として下部構造の無い小型炉も同時に出土。

この遺跡では二つの形態の製鉄炉が同時期に存在していたことが判った。

下部構造を持たない製鉄炉では自然のくぼみに粘土が充填されており、平坦化されたその上に炉が築造されたと考えられている。

また 出土した遺物の分析からこの2つの形態は9世紀前半並存していたことが判明しています。



黒部遺跡で見つかった
「下部構造有り(左)・無し(右)」
両タイプの製鉄炉

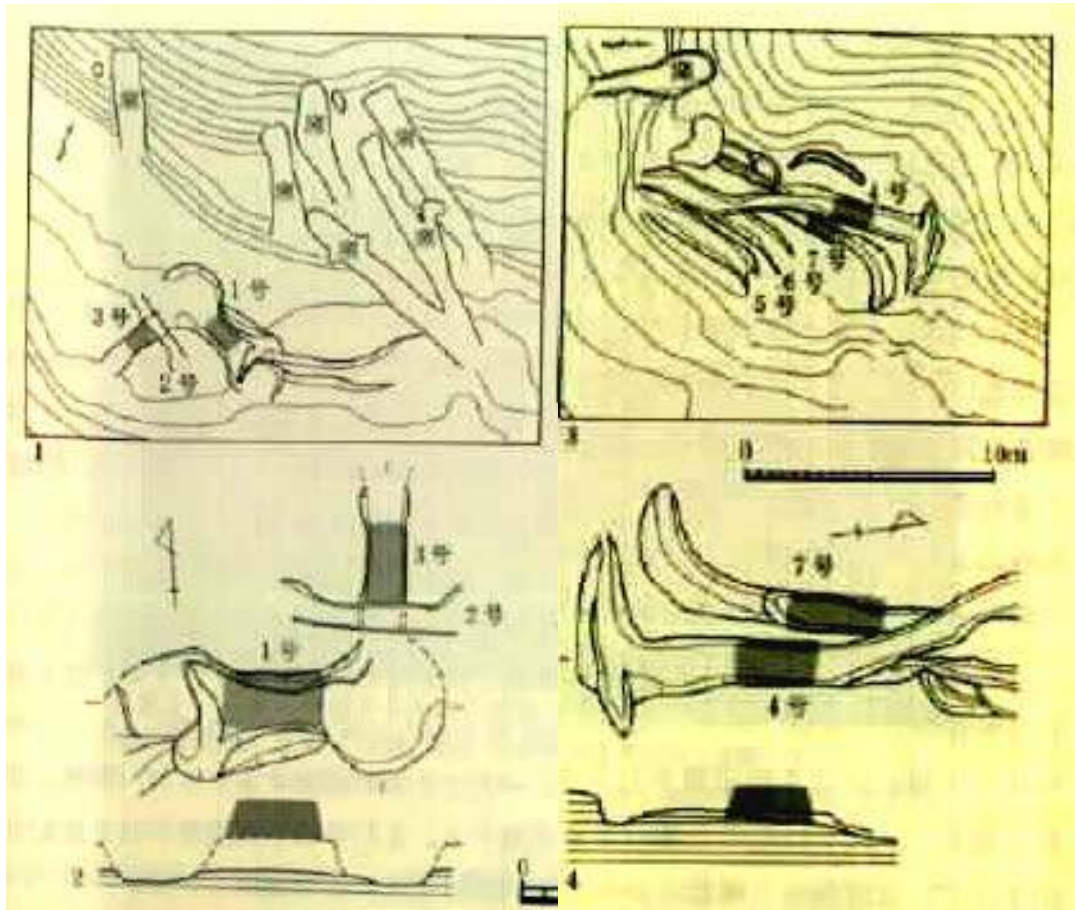


図 下部溝を持つ大型箱型製鉄炉
8世紀後半～9世紀

図 下部溝の無い製鉄炉 連続移動
8世紀中～後半

3.3. ニゴレ遺跡



遠所遺跡に隣接する製鉄遺跡で8世紀後半の下部構造を有する大型箱型炉と10世紀前半の下部構造を持たない小型炉が出土している。下部構造を持つ製鉄炉で長さ4.5M X 幅1M X 0.5Mの下部構造を持ち粉炭層が敷き詰められており、遠所遺跡にみられる大型の箱型炉である。一方10世紀前半の遺構である下部構造を持たぬ製鉄炉では、一辺が約80cm程度で徐々に山手へずらしながら築きなおしている。

以上のごとく 遠所遺跡で始まった丹後の国の古代製鉄は8世紀後半 大和朝廷の国衙製鉄コンビナートとして箱型の大型炉と鍛冶炉を備え遠所・黒部遺跡で全盛を迎える。

この時期には他の地域から大量にチタン系の砂鉄が持ち込まれ、鉄の大量集中生産が行なわれると共に鉄製品への加工も集中して行なわれた。出来あがった鉄の製品・半製品は若狭から近江の国に集められ、琵琶湖岸から飛鳥・奈良へ送られていった。

9世紀後半～10世紀にかけて大和朝廷の基盤が固まり、畿内での鉄の需要の変化 また他の国からの鉄が畿内に入ってくるようになり、丹後の国の鉄の価値が相対的に衰退し、それに伴って製鉄炉は小型小規模になり、製鉄原料も丹後の国国内産のものがかかわるように変化する。

この丹後国の製鉄の衰退時期と呼応して 東北地方の蝦夷征伐にたいする東国における鉄の需要は大きいたかまり、福島県原町金沢にある金沢製鉄遺跡は畿内大和朝廷の兵器庫「行方の製鉄」として隆盛を極める事となる。

日本誕生とその後 大和朝廷の勢力の伸展と密接に鉄が関わり、日本誕生におおきな役割を果たした古代山陰の鉄の王国はその役割を終えて「鉄の道」の重要性は北・東国に移って行く。

いまは静かな田舎の風景がひろがる丹後半島。

「山高く、水清く、人うるわし」 日本一の国として父が自慢していた丹後の国に色々歩いてみると日本誕生の歴史を作った「Iron Road 鉄の道」があった。

小さい時に良く行った丹後の地の展開に自分なりに驚いている。

By Mutso Nakanishi 2000. 6. 7.

11.4. 遠所遺跡 高チタン系砂鉄原料の謎

他国産砂鉄原料での精

現在の溶接材料精練に生きる高チタン系

yskati.htm by Mutsuo Nakanishi



京都府埋蔵文化財研究センターでの遠所遺跡発掘調査報告によれば、製鉄原料として使われた砂鉄に極めて特異な特徴が見られる。

「6世紀後半の製鉄炉が発見された「0地区」をはじめ、遠所遺跡の各所で発見される砂鉄は、丹後半島で現在採取される砂鉄とは異なり、極めて高いチタン酸化物を含んでいる。一方、丹後地方で得られる砂鉄はチタン酸化物量が少ない。他の地域から砂鉄原料が持ち込まれている。」

この様に丹後地方には沢山の砂鉄原料がありながら、他の地域から大量の高チタン系砂鉄が持ち込まれ、製鉄がおこなわれたのはなぜか？

しかも、後世では 高チタン系砂鉄は使いにくいとされ、低チタン系砂鉄の産地に製鉄業そのものが出ていっているのに……。

また、丹後での製鉄が衰退してくる9世紀には丹後地方で産出される低チタン系の砂鉄へと代わっている。興味のあるところである。

一般にチタン酸化物は、溶融点が高く、溶融しにくいばかりでなく、溶融して出来た滓が非常にネバく、精練時に「棚つり」現象などのトラブルを起こしやすいことから、後世では、チタン酸化物の多い砂鉄は嫌われてきた。特にたたら製鉄法が大きな飛躍をとげた近世江戸時代、チタン酸化物含有量の少ない出雲の砂鉄が他地域を次第に陵駕してゆき、出雲・中国地方が製鉄の中心地となった。

また、大陸から朝鮮半島を経て日本へ伝わった製鉄技術は当初 チタン酸化物含有量の少ない鉄鉱石原料を用いられていた。そして、日本で大量にある砂鉄に出会い、砂鉄を原料とした製鉄へと変遷して行く。朝鮮半島から吉備地方に伝わった箱型炉製鉄が日本国内に豊富にある砂鉄と出会い、「たたら」製鉄の原型である砂鉄による箱型炉製鉄法がこの遠所遺跡で大コンビナートとして花開く。

これととも、今のところ この砂鉄精練の始まりについても良く解っていないのが現状である。この砂鉄を原料とした古代たたら製鉄は日本海沿岸の山陰出雲・伯耆・丹後を経て越の国まで広がって行く。

一方 鉄鉱石を原料とした製鉄法は吉備の国から畿内河内国の製鉄法として、大和朝廷成立前後の我が国製鉄初期段階では重要な役割を果たした。

また このような箱型炉の歴史とは別に東国の国々を中心に縦型炉も日本に伝えられ、特に東北地方では縦型炉による鉄鉱石精練が製鉄の中心として発達してきた。

しかし、砂鉄原料埋蔵の豊富さから 次第に砂鉄原料による生産に変化をとげ、近世には奥出雲を中心とする中国地方での「たたら製鉄」へと次第に集約されて行くのである。

1. 遠所遺跡から出土した砂鉄の主要成分分析値
2. 遠所製鉄遺跡の原料は他国から持ち込まれた高チタン系砂鉄
 - ・ 丹後半島近傍の砂鉄は低チタン低塩基性成分砂鉄
3. 高チタン系砂鉄の熔融温度と塩基性成分の影響
4. 現在の溶接材料精練に生きる高チタン系滓

1. 遠所遺跡から出土した砂鉄の主要成分分析値

- ・ 丹後半島近傍の砂鉄は低チタン低塩基性成分砂鉄

遠所遺跡から出土した砂鉄の主要成分分析値

表 丹後半島遠所遺跡で出土した砂鉄の分析値

マーク	試料	出土位置	推定年代	Total Fe	FeO	Fe2O3	SiO2	MnO	CaO	TiO2	C	V	系
T-9013	砂鉄	【製鉄炉】	6世紀後半	56.24	24.76	52.88	4.51	3.34	1.75	10.61	0.55	0.24	高チタン系
T-9014	砂鉄	E 西川津場	6世紀後半	40.05	19.97	54.42	2.89	2.97	1.66	22.60	0.18	0.24	高チタン系
A-9	砂鉄	A 砂鉄埋納土坑	8世紀後半	50.8	26.9	54.0	1.57	2.28	1.20	12.5	0.07	0.29	高チタン系
T-905	砂鉄	A 製鉄炉	8世紀後半	65.30	23.57	67.17	1.90	1.94	0.62	3.48	0.04	0.22	中チタン系
A-10	砂鉄	A 自然堆積	縄文	68.1	21.5	72.9	2.02	1.39	0.32	0.70	0.10	0.16	極少塩基性成分
M6D-3	砂鉄	M6 土坑	8世紀後半	46.90	22.92	41.59	1.20	1.66	1.39	10.66	0.05	0.27	高チタン系
T-9015	砂鉄	E 製鉄炉	8世紀後半	60.59	24.02	59.92	2.12	2.29	1.10	9.57	0.11	0.26	高チタン系

(京都府立総合調査報告書 No. 21, P. 112 大沢正巳氏「遠所遺跡出土製鉄関係遺物の金属学的調査」より抜粋)

● 8世紀の丹後半島での製鉄遺跡から出土する砂鉄のチタン含有量は数%以下となり、丹後半島近傍の砂鉄へと原料変化が疑われている。

遠所遺跡で製鉄が始まった6世紀後半の製鉄原料は出土する砂鉄・製鉄滓から他国から持ち込まれた数種類のチタン酸化物含有量の異なる高チタン系の砂鉄が使われていた。丹後半島にも砂鉄原料があるにもかかわらずである。

日本各地の砂鉄の主要成分分析値

表 14 砂鉄成分

	T-Fe	TiO ₂	SiO ₂	Al ₂ O ₃	MnO	P	S	Cu	Cr
青森 大 畑	56.84	13.78	3.75	6.28	0.37	0.054	0.057	0.002	0.023
天間林	58.80	11.00	6.00	2.00	—	0.045	0.020	0.019	痕跡
麻 代	53.00	12.50	6.00	2.75	0.50	0.130	0.040	痕跡	痕跡
三 沢	53.30	13.00	7.50	3.00	0.45	0.180	0.030	0.005	0.070
千葉 飯 岡	57.15	10.50	4.85	2.35	0.49	0.030	0.030	0.003	0.025
鳥根 飯 石	56.64	0.81	13.96	3.32	0.37	0.047	0.053	痕跡	—
仁 名	67.46	1.63	2.74	0.42	0.64	0.005	0.033	0.058	—
北海道中ノ沢	59.22	8.51	4.42	—	0.59	0.135	0.029	0.002	—
蟹 別	55.85	8.19	8.26	—	0.50	0.138	0.034	—	—

日本鉄鋼協会編「製鉄製鋼法」地人書院

遠所遺跡では、古代他国の製鉄と較べても非常に大規模な製鉄が数世紀にわたって同一場所で行なわれ、製鉄から鉄製品の加工にいたる一貫製鉄が行われていた。また この地域は畿内大和へ最も近い地の利を生かした大和朝廷の国衙製鉄工房であった。

これらの事を考えると大和朝廷の勢力の源泉として、各地から原料が大規模に集

められたとしても不思議ではない。むしろ この国産製鉄工場の重要性を考えるとそれは妥当とも言える。しかし、後世の大規模精練の知恵・技術からすれば なぜ 砂鉄精練が厳しい高チタン系の砂鉄原料が使われたのであろうか・・・？

2. 遠所製鉄遺跡の原料は他国から持ち込まれた高チタン系砂鉄

砂鉄原料には チタン酸化物が含まれることが多いわけであるが、丹後国の砂鉄はチタン酸化物が少なく、また出雲を含め、中国地方にはチタンの少ない砂鉄・製鉄原料がある。吉備に伝わった最初の頃の製鉄もチタンの少ない鉄粉鉱(チタンの少ない山砂鉄)ではないかと推定される。

それなのに、なぜ 各地から高チタン系の砂鉄を集めなければならなかったのか????

高チタン系砂鉄を必要とする必然があったと考えるのが妥当であろう。

遠所遺跡での製鉄は当時としては他国 出雲・伯耆国などと較べても何処よりも大規模であり、当時の大規模生産には後世の大規模生産とは違った理由で高チタン系砂鉄の方が向いているのではないかと・・・

1. 高チタン砂鉄の方が溶融点が低いのではないかと

チタン酸化物単独では高温でしか溶融しない。当時既に 1400 を越える高温が得られる技術があったとは言え、厳しいと考えられる。

しかし、鉄酸化物との共存領域では鉄酸化物単独より溶融点が低くなる領域がある。

高温を得にくい古代の状況では、滓粘性が高く棚つりを生じ易いなどの欠点があってもメリットがあったのではないだろうか???

遠所遺跡から出土した鉄滓の組織からイルメナイトやルチルの結晶が大量に含まれており、少なくとも 1400 を越える温度が得られてする。

このような操業温度領域ではチタン酸化物との共存で砂鉄は溶融点がさがり、流動性が増し、精練が容易になったと考えられる。

2. 砂鉄に含まれる塩基性成分(CaO+MgO)が砂鉄の自溶性をもたらす

また チタン酸化物の他の成分との固溶状態を示す状態図を調べるとチタン酸化物と MgO CaO などの塩基性成分が混合されると少量であっても、その溶融点は著しく低下している。従って、チタン酸化物と同時にこれら塩基性成分が混じっていれば 溶融点は非常に安定して下がり、砂鉄の自溶性が促進され、高温が得にくい古代の状況下においてはスムーズな砂鉄の溶解精練が行なわれる。

鍵はチタン系というより、高塩基性成分含有による自溶性に有ると考えると矛盾なく説明できる。

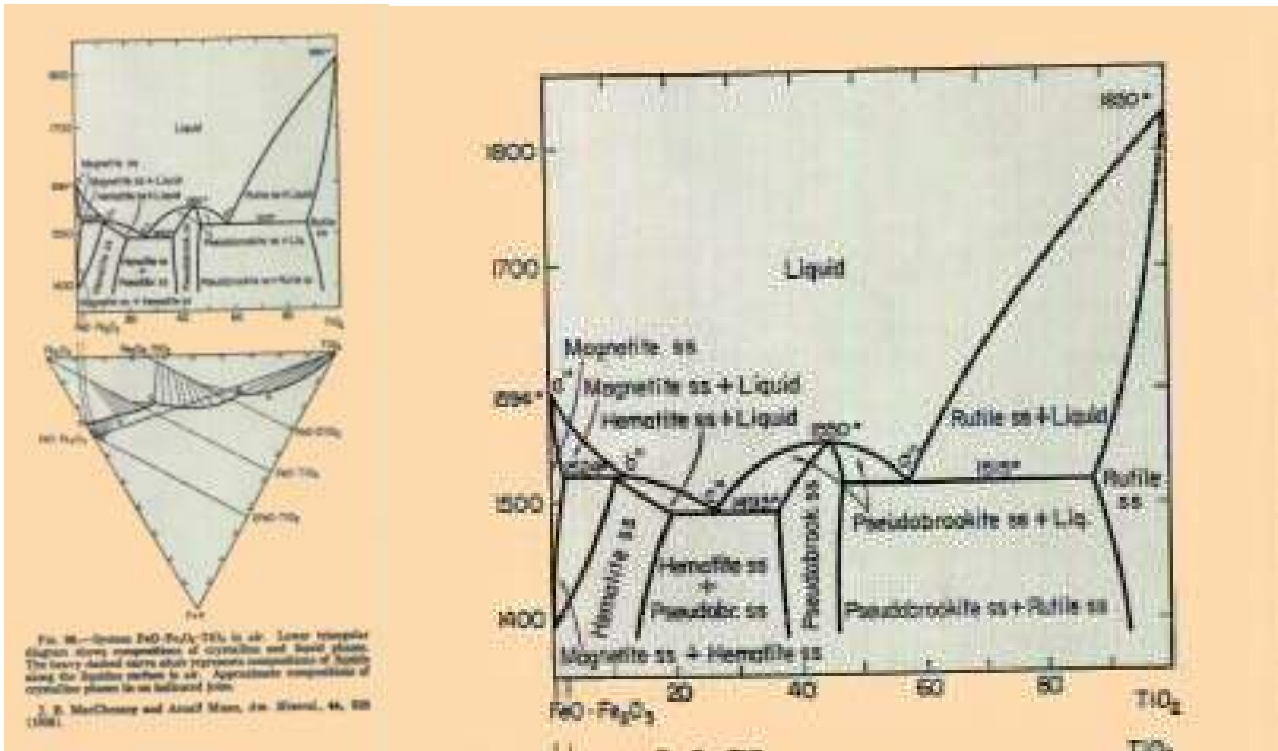
丹後国の砂鉄は低チタン系であると同時に塩基性成分の含有量が少ないといわれており、溶解初期には安定した砂鉄溶融が進まず、比較的低い温度での精練にはむしろ不都合と考えられる。

また、このような溶融状況をチタン酸化物や塩基性成分が支配すると考えると、出雲の近代たたら製鉄でも製鉄の初期にはチタン含有量の多い「赤目 浜砂鉄」を用い、溶融が安定してくると「山砂鉄」に切替えて行くと聞く。

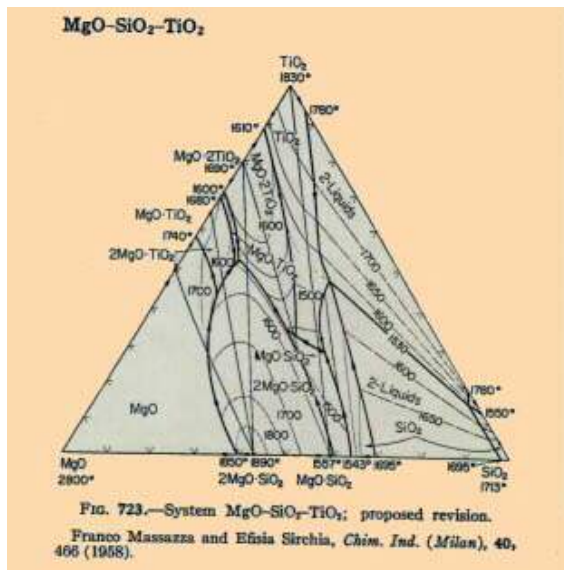
独断と私見ではあるが、古代における比較的小規模での大量精練ではむしろ比較的低温での溶融がスタートすると考えられる不純物成分の多い高チタン系砂鉄が使われたと考えられる。

遠所遺跡で使われた高チタン系砂鉄もそのチタン含有量に限って言えば、20 数%含有の超高チタン系 10% 程度の高チタン系 数%含有の中チタン系など数種類の物が使われており、厳しくチタン含有量が制限されていた訳でもない。

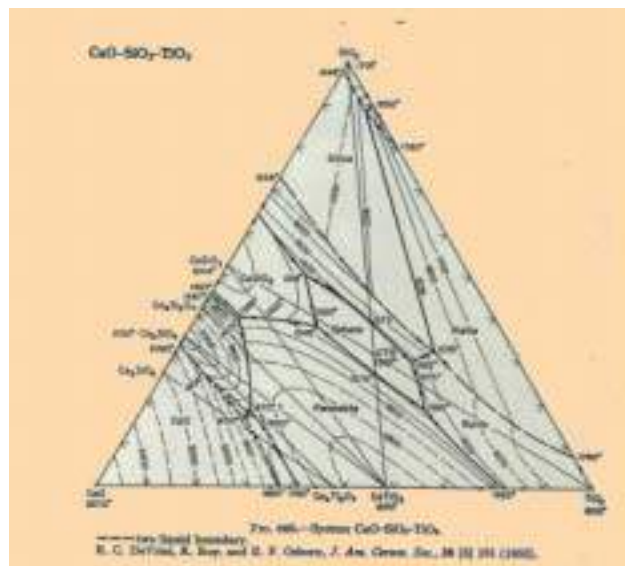
3. 高チタン系砂鉄の溶融温度と塩基性成分の影響



TiO₂ 添加の影響 【溶融滓の粘性増・溶融点変化】



塩基性成分 MgO 添加の影響
【急激な溶融点の低下】



塩基性成分 cao 添加の影響
【急激な溶融点の低下】

4. 現在の溶接材料精練に生きる高チタン系砂鉄滓

他国の高チタン砂鉄を持ち込んでの大量生産。これがこの丹後国遠所遺跡での国衛製鉄コンビナートの役割だったに違いない。

事実 9世紀後半 国衛製鉄コンビナートの役割を終え衰退して行くとその製鉄原料は自国産の低チタン砂鉄原料にかわりまた、製鉄炉も小さな物に変化している。

これらの経過をみるとこの丹後の国の一大製鉄コンビナートが大和朝廷直営の製鉄コンビナートとして 極めて重要であり、日本誕生に大きな影響を与えた事が判る。

また、陸から日本海沿いに山陰をとおり丹後から若狭を経て熊野本製鉄遺跡・琵琶湖近江へそして飛鳥へ続く道こそが、日本誕生を支えた「鉄の道」「文化の道」でなかったか・・・・。

また 高チタン系の砂鉄は後世の「たたら製鉄」では嫌われ者となったが、チタン酸化物を含む溶融滓が精練に重要な働きを有している事は現在も変わらない。

今回遠所遺跡の精練滓の資料 特にチタン酸化物の重要性の指摘により、今まで不思議にも思わなかったのであるが、今実際に使われている溶接材料の基本滓系として、チタン酸化物が広く使われ、溶接ビード形成に重要な働きをしている事に気づいた。

チタン酸化物の結晶系であるルチル系やイルミナイト系被覆アーク溶接棒や全姿勢ルチル内蔵フラックス充填 CORED WIRE などである。これらの溶接スラグ系はチタン系砂鉄精練と驚くほど似通っている。高チタン砂鉄のスラグの考え方は溶接の中に今も連綿とつながっている。

溶接の勉強を始めた頃 接合の起源は「奈良の大仏にあり」と大阪大学の西先生に教えてもらいましたが、溶接材料ではさらに遡って古墳時代 この遠所遺跡の高チタン砂鉄の精練にその原型がみられるのではないのでしょうか。

【参考資料】

京都府遺跡調査報告 第21冊「遠所遺跡」1997 財団法人 京都府埋蔵文化財調査センター

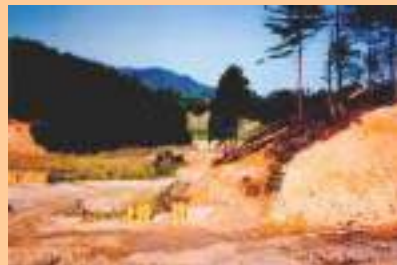
by Mutsuo Nakanishi 2000. 6.8.





**ニゴレ製鉄遺跡
発掘調査現場【1】**

1993.10.10.



ニゴレ製鉄遺跡 発掘調査現場【2】 1993.10.10.

追伸 遠所・ニゴレ製鉄遺跡の今

2000.8.26.



丹後 味わいの郷

弥栄町鳥取郷 遠所・ニゴレ製鉄遺跡丘陵地帯の今 2000.8.26.

2000.8.26.遠所・ニゴレ製鉄遺跡の場所鳥取郷・木橋郷にまたがる丘陵地がリクレーション・リゾート施設『丹後 味わいの郷』に生まれかわり、多くの人を集めているのをテレビでみて、家内と二人でかけた。

私達がこの地を訪れたのが、1993.10.。ニゴレ製鉄遺跡の発掘調査の真っ最中であった。

今 この発掘当時の面影は全くなし。

ヨーロッパ風の建物が建ち並ぶ街が再現され、観光バスや車が行き交うリゾート地に変身。どこか一角に製鉄遺跡のモニュメントでも有るかと思っただが、それもなし。

背後にある遠所遺跡の1ブロックのみが、埋め戻されて残されていた。

ちょっと寂しい感じがするが、この都会から離れた過疎の山里での生活を考えると仕方のないことと割りきってはみたものの同じような施設が日本各地にバブルのように出来ている事思うと失われた物の重さ感じる時がくるのでは・・・との感傷もある。

もっとも、味わいの郷でドイツビールを飲みソーセージをほうばり、かつてドイツで同じような事をしたことを懐かしんでいたのも自分。



2000.11.10. by M.Nakanishi 追加

もう一つの邪馬台国 『鉄の道 iron road』
山陰の鉄の大王国 丹後の国の製鉄コンビナート 遠所遺跡
〔完〕